

# 教授法が 大学を変える

2013 年度版

日本私立大学協会

教育学術新聞

協力：日本高等教育開発協会

# アクティブ・ラーニング を探求する

昨年に引き続き、アクティブ・ラーニングの事例を募集し、他大学でも活用できるユニークなものについては、日本高等教育開発協会の協力を得て教育学術新聞において紹介し、また事例を電子化し、各大学のFD活動の参考にして頂くため「教授法が大学を変える」を企画した。

このたびの応募校は、全体として、グループワークやプロジェクト/プロブレム・ベースド・ラーニング（PBL）にちなんだ事例が大半であった。また、初年次教育等でアクティブ・ラーニングを展開している大学も多かった。更に一つの授業や講義を超えて、全学、または、学部横断の取組が多くみられたことは、特筆すべき点であろう。

3つのポリシーの作成、それに合わせたカリキュラム改革の必要性が求められて久しいが、このたびの結果は順調に各大学では改革が進んでいるという見方もできよう。

# ピックアップ

## ●札幌大学「臨床教育学入門」

学生の振り返りと深い思考を促す

芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター／工学部

共通学群（数学） 教授・ファカルティデベロッパー 榊原 暢久

## ●明星大学「自立と体験」

1年生全員必修の本気の授業づくり

東京大学大学総合教育研究センター

特任准教授 栗田 佳代子

（教育学術新聞 2552号（平成26年2月12日付）掲載）

### 27大学一覧

愛知工科大学	グループ学修を通して自分の活かし方を考える
朝日大学	CSCLを用いたり、授業ノートやミニ課題を活用した講義
いわき明星大学	PBL,TBLを活用したイグナイト（点火）教育
大手前大学	PBLとSDL(Self Directed Learning)
嘉悦大学	長期実践型インターンシップ
神奈川工科大学	eポートフォリオ活用のグループワーク
金沢星稜大学	模擬授業による相互評価など
関西外国語大学	企業等が抱える課題を解決するプレゼン授業
神田外語大学	放送通訳・放送翻訳の疑似体験
九州共立大学	独自のシラバスオンラインを活用した模擬授業
国際医療福祉大学	学年をまたいだ協同実習・模擬患者演習
札幌大学	手書きを重視したレポートを課す授業
静岡理工科大学	ものづくりとテーマ研究、課外活動
十文字学園女子大学	ソーシャルメディアも取り入れたPBL
東京電機大学	講義とPBLを行うハイブリッド型PBL
長崎外国語大学	PBLで実践的・体験的学修
日本獣医生命科学大学	大人数のクラスによる小グループ学習
八戸工業大学	グループ学習とコンテスト型実習
広島経済大学	フィールドワーク重視のプロジェクト型授業
福山大学	学外での体験型学習
文化学園大学	PBLで地域貢献テーマにプラン作成
北海道医療大学	全学的なICT教育支援システムの導入
北海道工業大学	少人数グループによるプロジェクト型課題追究
明海大学	オリジナル教材を使用した少人数制クラス
名城大学	科学イベントにボランティアとして参加
明治薬科大学	模擬症例に対する問題志向型アプローチ
明星大学	講義と個人学習、グループ学習を通じた学び合い

# 札幌大学「臨床教育学入門」

## 学生の振り返りと深い思考を促す

芝浦工業大学教育イノベーション推進センター  
工学部共通群（数学）教授・ファカルティデベロッパー

榊原 暢久

### はじめに

札幌大学は2017年に創立50周年をむかえる、学生数約3500名の私立大学である。今年度から5学部を「地域共創学群」に統合し、1学群13専攻制を敷いている。学生は自分自身が最も学びたい専攻を選択し、2年次から履修する。入学後の基盤教育によって興味・関心の対象が変われば、入学時に予定した専攻を変更することもできる。また、学びの幅を広げ教養を深める「主専攻+副専攻」、体験や実習によって人間力・就業力を培う「主専攻+アクションプログラム」、将来の職業を明確に見据えた「主専攻エキスパートコース」など多様なコースがあり、学生自身が自分だけの学びを形作れるよう配慮されている。学生が主専攻を選択する際、指針となる科目群が「専攻入門」である。ここで紹介する荒木奈美先生が担当する「臨床教育学入門」は、日本語・日本文化専攻への専攻入門として開講されている受講生200名ほどの科目である。また、正課教育に課外学修を組み合わせた上述のアクションプログラムの中の「教職アクションプログラム」、「キャリアデザインプログラム」に参加する学生に対し、「自ら考え、自ら学ぼうとする学修意欲と主体性を育む」基本姿勢を形成することも、この科目の目的となっている。

### 授業概要

この授業の到達目標は、「現在の学校教育の問題点を探り、自発的に学ぶ子供を育てるための教育に必要な要素について、学習者自身の考えを深める」、「学習者自身の気づきを今後の大学における学びへと生かすための方策について、学習者自身の言葉で具体的に語る」である。授業においては、学生個々の毎回の振り返り、学期半ばにこれまでの自らの記述内容についての振り返り、学期末に自らの考えの再構築が課される。後述するが、それらをまとめたものは、ラーニング・ポートフォリオともいえる成果物であり、学生が今後の大学生活を送る上で貴重な財産に成り得る。

### 教育理念

荒木先生は、学生が学修を通して、「もっと社会のことが知りたくなった」、「もっと『大人』の考えを持ちたいと思った」などの気持ちが芽生え、それが日常生活の学習意欲へと結びついた時に初めて、教授者としての役割を果たしたと考える。学ぶ意欲を引き出すため教員が個々の学生と

丁寧に関わり、直接的な働きかけをすることももちろん大切である。一方、教員が行う個々の学生への直接的な働きかけは、得てして強制力が働いてしまい、主体性を育むことに逆行する。大規模講義形式で行われる授業では、教員の言葉は不特定多数に向けて発信され、それを受け取るか否かは学生個人の意志に依存するが、学生が授業内で他の学生と関わることにより、他者の考えと出会い、自己の考えを相対化できる機会に恵まれる。主体性の育成と強制的な狭間で、荒木先生は学生の学修につかず離れず伴走しながら、学修を支えることを大事にしているように私は感じた。

### 方法

授業回により、自由座席での個人思考主体の回と、座席指定での四人一組で行うグループ討論主体の回がある。個人思考での課題例は「フツーの子の心の闇」、「いじめの構造上の問題を考える」などであり、グループ討論の課題例は「教師と生徒に距離感があることのメリット・デメリット」などである。これらの課題設定には、荒木先生の12年にわたる都立高校教員としての経験が強く反映し、机上の話ではない、学生にも身近で切実な課題設定になっているのだからと感じた。グループ討論ではおよそ50組のグループが同時に討論を行うことになるが、それぞれのグループで出た意見はサイトに書き込まれ、その場でプロジェクターにより投影し共有される。これにより、他の学生がどのような意見を持ち、それが自分とどのように違うのか実感し、自分と他の学生との考えの違いを受け止める習慣がつく。その後、共有した内容を受けてグループで再討議し、最終的な自分の考えを個々の手書きレポートにして提出する。個人思考主体の回のレポートとともに、これらのレポートは学期の半ばにコメントつきでまとめて返却され、ここまでのレポートを学生自身が自ら読み返し、その記述内容を批判的に振り返る。さらに、講義最終回には「どんな教師・大人・親になりたいか」というレポートが課され、これまで学生自身が書きためたレポートを手がかりとして、自分の考えを再構築する。講義最終回まで、「個人思考」、「グループ討議」、「他者の意見を知る」、「振り返り」を繰り返すことで、学生が書くレポートは、「思いつき」や「感情論」に終わらない、自己を相対化した記述となり得るといえる。

荒木先生は、この手書きレポートを学修指導上、とても重要視している。荒木先生曰く、「手書きレポートには学生

一人ひとりのその日の心の状態がはっきりと表れている。毎週のレポートを並べてみると、学生一人ひとりがそれに気づく。やる気のない日は乱雑な字であったり、どうしても書きたい気持ちが収まらず、レポート用紙の裏にまで自身の思いを書き込む答案もある。そのような『温度』を感じ取れるのは、機械文字にはあらわれない手書きの持つよさと考えている」ということであった。また、荒木先生は各回の授業において、詳細なりフレクシオンシートを自らに課している。当初の計画をし、学生の様子を観察し、計画を修正し、次学期に何を行うかを詳細にメモしたこのシートを拝見したが、PDCA サイクルというべきものはそこには存在し、これを何年か繰り返すことで、綿密に作りこまれた授業プログラムが完成することを大いに期待させるものだった。



## 成果

講義最終回に課したレポートの記述内容から、この授業を通して多くの学生の主体的に学ぶ意欲を引き出し、自分自身の言動を反省的に振り返ることで自らの意識を開発することへの気づきができた荒木先生は考えている。以下は、荒木先生から頂いた学生の記述内容の抜粋である。

・私の考え方を直せる・増やせる大事な90分間でした。まだまだこの分野を学びたいと思いました。後期の授業ではこれに似ている講義を見つけて、もっともっと成長したいです。がんばります。

・4ヶ月の間で自分の考え方がこんなに変わるとは思いませんでした。そして学習というよりも人の心を学んでいける講義だったので、他の講義と違い濃い90分だったと思います。

・この講義を受けて、親のことや自分のことを深く考えました。自分の中でいろいろと考えが変わったと思います。この講義で学んだことは、これからの人生で役に立つことだと思いました。

・15週×90分=1350分=22.5時間、ありがとうございました。この授業のおかげで、実際よくわかっていなかった“教師としての心構え”が少しわかった気がします。残るわからない部分は、これからの学生生活のなかで見つけれたらなと思っています。

## おわりに

「アクティブラーニング」という言葉からは、グループでの討論や課題作成・発表を連想することが多いと思われる。私はアクティブラーニングという言葉をもう少し広く捉え、一方的な知識注入型講義以外の授業形態・手法を指すものだと理解している。荒木先生の授業でもグループ討議が何回か用いられているが、この授業の本質はあくまで学生個々の振り返りと深い思考である。学問体系が確立している分野や資格取得に関わる分野ほど、知識注入型講義が実施されている傾向が強いと思われるが、そこに少しでも学生の活動や振り返りの仕組みが組み込まれ、適切なフィードバックがなされるだけで、その科目本来の目的達成度は格段に上昇するのではないだろうか。荒木先生の授業は、その可能性を感じさせてくれる授業であると実感した。

この場を借りて、素晴らしい実践を見させて頂いた荒木先生、及び札幌大学の関係各位に感謝申し上げます。

# 明星大学「自立と体験」

## 1年生全員必修の本気の授業づくり

東京大学大学総合教育研究センター  
特任准教授 栗田佳代子

### はじめに

明星大学は、理工学部や人文学部など8学部（2014年4月に設置予定のデザイン学部含む）からなる私立大学であり、教育目標として「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」（自分の夢の実現に向けて努力し、他の人のために役に立つことのできる人を育てること）を掲げている。

明星大学の考える「社会に貢献できる人」とは、自ら問題を見出し、その解決に向けて取り組むことのできる判断力と実行力を持った人であり、その結果として社会に貢献できる人のことを指す。それは、現実の問題に直面し、自分で体験し解決して初めて身につくものであり、そのため、特に体験教育が重視され、ここで紹介する「自立と体験」も体験プログラムの一つとして位置づけられている。この授業の教育目標は、「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」である。この授業を通して自分の理想や目的を明確にしなが、社会貢献への道筋を学生一人ひとりが探すことを目指している。

### 授業概要

本授業は2010年度よりスタートした全学初年次教育科目であり、全学共通科目として1年生全員が前期必修科目（2単位）として受講する。最大の特徴は、学部学科横断型クラス編成であり、多様な学部学科から集まった学生が1クラス30名、全68クラスに振り分けられる。短い講義と個人学習、5、6人で構成されるグループ学習を通して様々な学部学科に入学する学生と交流し学びあっていくアクティブラーニング形式をとっている。

学生にはポートフォリオが配布され、担当教員が統一した教案をもとにファシリテーターとして授業を進めていく。担当教員は、授業手法や授業内容に関する事前研修を受け授業内容の質の担保がなされている。すべてのクラスに事前研修を受けたSA（スチューデントアシスタント）が授業のサポートを行う。また、この科目の開講にあわせて、2010年度より開設された明星教育センターの特任教員と事務スタッフが協働し、すべての授業の教材等の準備および担当教員のサポートを行っている。

### 教育理念

すべての学生が、充実した四年間の大学生活を送るための基礎として位置づけられる。能動的に学び、自分で考え、表現し、他者と関わり、多様性を理解し、多様性から学ぶ、

まさしく「大学での学び方を学ぶ」授業を目指している。この授業はまた、一年次に位置づけられることで、専門知識を活用した授業で多くの学びを得ていく基礎ととらえられる。そのためには、担当教員が学生の能動的な学びをサポートする役割（ファシリテーション）を行うことが重要であり、それにより学生の力を引き出していくことができると考えられている。

### 方法

全15回の授業は、全授業共通の各回教案が用意され、授業の流れと時間配分（目安）が記載されている。担当教員は、この教案に基づいて授業を行う。授業構成は、「第一節 人と関わる」（1回～5回）、「第二節 人と関わる・学びのスタートを切る」（6回～11回）、「第三節 大学生活を見通す」（12回～15回）というテーマ構成をとる。授業には多彩なワークが設計されている。たとえば、第六回は、学長が自ら大学の自校教育について講話をし（20分）、その後、上級生の大学生活などの話を聞く仕立てになっている。第7回では、第6回で得た情報（学長・上級生の話、大学の歴史等のVTR）をもとに、高校生に「明星大学を紹介する」ポスター制作をする。さらに個々の学生が自分の所属学科の特徴を調べ（第6回授業宿題）、「私の学科自慢」としてポスターに取り入れることになっている。二週の授業および自宅学習のつながりを持たせて授業を進めている。

教科書は使用せず、学生に第1回目の授業で配布されるポートフォリオおよびワークシートを使いながら授業が進行する。学生には、ポートフォリオに「授業で取り組む様々なワークの記録をする、ワークを通して学んだこと・感じたことを書きこむ、グループメンバーの発表や発言をメモする、先生の説明やまとめの話のノートを取るなどを通して自分の学習の積み重ねを記録しておく」ように指示がされている。また、それぞれの授業テーマに沿ったワーク教材が用意されており、たとえば、卒業生へのインタビューをパズル形式にして、卒業後の仕事や大学生活について考える「卒業生パズル」、バラバラの情報を集めて、グループメンバーが協力して課題を解決する情報カードゲーム「歓迎企画をたてる」、将来を見通しながら、大学4年間の計画を記入する「大学生生活デザインシート」などがオリジナル教材として開発されている。

### 成果

学生の行動目標あるいは到達目標は、「他者との関わり

を通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること」である。多様な学部・学科に所属するクラスメートとの交流を通して、様々な角度から自分自身をみつめ、自分の理想や目的を明確にしていくことをねらいとしている。

第1回と第15回授業で収集される学生アンケートによれば、①「卒業後にしたいことを考えているか」、②「学生時代にすべきことを考えているか」、③「明星大学の歴史や特色を知っているか」、④「大学図書館の利用方法を知っているか」、⑤「自分の意見を筋道立てて話すことができるか」、⑥「敬意・関心を持って他者の話を聴くことができるか」、⑦「自分の意見を文章でわかりやすく表現できるか」という項目すべてについて、望ましい方向に自己評価が変化しており、学生たちが自信を深めている様子がわかる。

また、自由記述には、「いろいろな学部と交流をすることが出来て良かった」、「人と関わる、体験する、行動するというのは社会に出てからも役立つ」、「人に自分の考えを伝える、人の考えを理解することを通じて色々と学べた」、「最初は知り合いが少ないので不安だったけど、この授業を通じていろいろな人と触れ合えた」、「いろいろな目的をもって大学に入学してくるのがわかった。目標をもって行動をしたい」、「自分から動かないとダメな授業だと思うと大変だったけど、今の自分を見つめ直して将来についてみんなと意見交換できてよかった」、「この授業がなければ明星大学のことを知らないで卒業をしたと思うので、知れてよかった」など、本授業の目標に合致したコメントが寄せられている。

授業の実施にあたっては、担当教員だけでなく、上級生(SA)や大学職員(職員インタビューや図書館での演習)が関わっており、まさに大学全体で取り組んでいる授業である。初年次教育を専門の教員だけで実施するのではなく、各学部学科の教員が担当することで、学生の学習内容を大学全体で共有でき、1年生後期以降の授業に学びを継続させていくことができる可能性が生まれている。「全学初年次教育に関する委員会」では履修者、担当教員、SA、授業に関わった職員などを対象にアンケートを実施。それらの声が授業改善の大きな柱となっている。

数値に表れている成果としては、学生生活実態調査において本授業科目開講前(2008年度)と開講後(2011年度)を比較すると「一度でも離籍を考えたことのある」学生の割合が一割減少した。

## おわりに

本授業の特徴は、アクティブラーニング形式をとる授業内容もさることながら、1年生全員に対して必修としたその設置形態にある。70弱ものクラスが同時に実施されることの意味するところは、多くの教員の参画の必要性である。それを実現にまでもっていった大学としての意思と、その質と継続性を担保するための研修体制および支援体制の構築と実現には敬意を表したい。本授業はいまや明星大学のホームページのトップにも紹介がある通り大学の教育理念を実現し、大学を特徴づける科目として位置づけられており、今後もその安定的な継続と充実の方向性がうかがえる。多くの教員が関わる「本気の」授業づくりが大学をかえてゆく好例として紹介させて頂けたことに感謝したい。



# AUT (愛知工科大学) 教育入門

## 愛知工科大学

工学部／機械システム工学科・電子制御ロボット工学科・情報メディア学科  
各学科担当教員 20 名， 共通教育担当教員 2 名， 学生相談室教員 1 名

科目の位置づけ	新入生が大学生活を始めるに当たって、学修意欲を喚起し、本学の教育目標である「自立と夢の実現」に向けた行動の基本を修得する。具体的には、大学と自分とのかかわり、学修制度の仕組み、勉学の方法などの学習スキルと、大学生活を楽しく、安全、安心に過ごすための生活スキル並びに、グループ活動を通し自分の活かし方を考え、コミュニケーション能力を高めることを目指す。
受講（登録）学生数	124 名（6 名×19 グループ+5 名×2 グループ）
科目の到達目標	自主，自立，自治の精神を高め，夢の実現に向けた力を実感できることを目指し，大学での学びと生活をスムーズに始めるために，大学生活の過ごし方を自分で考えられること，およびグループ活動，ディスカッション，プレゼンテーションを通してコミュニケーション能力を身につけるとともに，自己理解を深め自分の活かし方を考え，気づくことができるようになること。
教育方法の特徴	<p>本学工学部の全 3 学科混成の 6 名 1 グループ計 21 グループを構成し，各グループに教員が 1 名アドバイザーとして付いてグループ学修の支援を行う。本授業科目は新入生オリエンテーションの最終日における地元企業の工場見学から始まっている。ここでは上記グループにて見学内容をディスカッションし，まとめて発表を行うグループワークを行った。授業週に至ってからの本授業の内容は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 学長講話、自立と夢の実現に向けて</li><li>2. 仲間と考え、行動しよう（最初の共同作業として各グループの名称を決定）</li><li>3. 何故、大学進学なの？ 大学生活の抱負</li><li>4. 生活スキルを身につけよう</li><li>5. 高校の学びから大学での学びへ</li><li>6. 科目履修の計画</li><li>7. 大学の施設と学習支援体制</li><li>8. 課外学習と家庭学習</li><li>9. 課外活動、地域とのかかわり、友達</li><li>10～15. 学科別グループワーク（学科の学びにつながるテーマで考え、実行、まとめ、発表するプログラム）</li></ol> <p>以上のような大学生活への適応と学びを促進する各回の授業課題に対して，グループワークによるアクティブラーニングの試みを導入し，筆記力，具体的な目標設定と目標達成のための取り組みの確認，コミュニケーション</p>

●必修科目●グループ学修を通して自分の活かし方を考え、コミュニケーション能力を高める

能力および自己理解力、プレゼン力などの体験的な習得が組み込まれている。各回の概要が書かれたオリジナルのテキストおよびワークシートを使用し、必要に応じてポストイットを用いて KJ 法の導入部を実施した。また、グループによる議論の結果を全体に向け発表する時間を設け、回により一部のグループや、すべてのグループの代表者に発表させた。さらに、各回の終わりに授業内容を振り返り、ワークシートを記入させて回収。次週、アドバイザーがコメントを付記して返却するというサイクルを繰り返した。(現在、10~15 の学科別グループワークを実施中。本報告は 1 ~ 9 の全学科合同の前半部についてのものである。)

教室空間の特徴

図書館閲覧室を転用したラーニング・コモンズにおいて、移動可能な机を 6 名分集合させたものと、6 人掛けの大机の混在で 21 グループを構成し、全グループが同時に活動を行う。中央前方に総合司会席を設け、拡声器により全体に大まかな司会進行のアナウンスを行い、グループワーク中は各テーブルで活動を進める。KJ 法を行う際は、各机に A3 用紙を数枚配布し、メンバーおよびアドバイザー教員がそれを囲む形で実施。各テーブル近くにパーティションを置き、グループ名を書いた用紙や KJ 法の結果の要旨を貼りだすために使用。

特定の回の授業の流れ・  
時間配分

例として、第 4 回「生活スキルを身につけよう」のスケジュールを示す。

1. 全体説明 (本日のスケジュール) (約 5 分)
2. 前回のワークシート返却 (約 2 分)
3. アドバイザによる説明 (約 8 分)  
内容：グループワークの意義、本日のテーマ、本日のワークシートのまとめ方
4. グループワーク (約 50 分)  
注：KJ 法の導入部を適用。司会・タイムキーパーはアドバイザーが務める。
  - ①各自、予習としてワークシートに記入してきた自己のキーワードを発表
  - ②グループ全員がテキスト記載の各項目 ([1]時間管理、[2]健康管理、[3]経済観念、[4]生活マナー) を念頭に置き、大学卒業時、社会人になるにあたって大切なことは何か、そのためにはどうしなければならないか、ポストイット 1 枚につき、できる限り沢山書き出す。
  - ③A3 用紙 5 枚に 4 つの項目の名称「時間管理」、「健康管理」、「経済観念」、「生活マナー」と「その他」と書き、あてはまる用紙にポストイットを貼っていく。
  - ④最も沢山のポストイットが貼られた A3 用紙について、ポストイットの同じものは重ね、関連するものは近くにまとめる。
  - ⑤ポストイットのグループにタイトルをつける。
  - ⑥グループに優先順位をつける (並び替える、数字を書くなどして)。
  - ⑦優先順位が決定したら、A3 用紙をパーティションに貼り、時間があれば次にポストイットが多い A3 用紙に移って同じことを繰り返す。または、他のグループで貼りだされた用紙を見に行き情報収集し、再検討する。時間が来たらそこで終了。

●必修科目●グループ学修を通して自分の活かし方を考え、コミュニケーション能力を高める

	<p>5. 結果発表(約 5 分) 各項目について 1 グループを指名し、得られた結果を全体に向け発表させる。</p> <p>6. ワークシート記入 (約 10 分)</p> <p>7. 次週のテーマと課題の説明 (約 5 分)</p>
<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の議論テーマに基づき、ツールなどは変更した。毎回、授業の内容とタイムスケジュールを確認し、KJ 法を用いることが望ましい場合は、ポストイット、A3 用紙、サインペン、ストップウォッチを使用し議論をさせた。</li> <li>・毎回提出させるワークシートに、各回のテーマのまとめと、「自己の気づき」のほか、「本日自分ががんばれたこと」「本日グループの良かったところ」に対するコメントを記入させるとともに、「がんばり度」「満足度」について 5 点満点スケールによる評価を課し、全体やグループごとの得点の推移や、各回の内容が得点に及ぼす要因を分析することができるように配慮した。</li> </ul>
<p><b>学 習 成 果</b> (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的に発言し、異なる意見を互いに認め合い、協力して議論するなどの、コミュニケーション能力が向上した。</li> <li>・大学 (単位取得の仕組み・履修内容の検討・施設など) への理解が深まり有意義な利用ができるようになった。</li> <li>・企業の現場を見学できたことや生活習慣の見直しに取り組んだことなどで各自の目標が明確になり自己実現への過程が定まった。</li> <li>・大勢の人前での発表や初対面の学生同士での会話を経験して自信を育んだ。</li> </ul>
<p><b>学習成果の評価・測定 の方法</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成績評価は各回に提出されたワークシートおよび授業態度に対し、アドバイザー教員が一定のルールに従って点数化し、積み上げる方式で行った。</li> <li>・現在、毎回のワークシートの各回の振り返りコメントと「がんばり度」、「満足度」の調査を統計的に処理し、各回の授業の効果を分析しているところである。これは来年度以降の同授業の方針を決定するために使用する。</li> </ul>
<p><b>本科目についての学生から の評価</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人との関わりは社会に出てからも必要なので、グループワークに取り組みで協調性を学べて良かった。</li> <li>・他学科の学生と交流でき人間関係が広がりお互いに知識を増やせた。</li> <li>・意欲を持ち続ける重要性や夢を実現するための取り組みを考えることができた。</li> <li>・教員と触れ合える良い機会になった。</li> <li>・大学生活の目標が鮮明になったので時間を有意義に使えるようになった。</li> <li>・人見知りが無くなり、初対面の人と話すことができるようになった。</li> <li>・自分の夢を見つめ直すよい機会になった。</li> <li>・高校までの覚える授業ではなく考える授業であった。</li> </ul>
	<p>愛知工科大学 (AUT) は教育目標を「自立と夢の実現」と設定している。この目標は、社会において自立し、夢を実現するために必要な 3 つの要件: 「意欲」、「人間性」および「能力」を学生自らがバランス良く向上させ、自</p>

●必修科目●グループ学修を通して自分の活かし方を考え、コミュニケーション能力を高める

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

らの成長に自信を持って就職できる人材を教育指針に基づき養成することにある。本学はこれを「AUT 教育法」と名付け、その構築を模索している。「AUT 教育入門」はこのうち、「意欲」と「人間性」を養成する「意欲喚起型科目」の一つとして位置づけられ、本年度から開講された。本講義はこれまで実施していなかった共同学習（アクティブラーニング）の手法としてグループワークを取り入れている。

本科目のような意欲喚起型科目の授業方法として、一方的な授業展開では学生達の信頼をなくし意欲を減退させてしまう危険性があるため、受講する学生の期待や満足を十分に把握しながらより効果的なプログラムを構築することが重要である。そのために、毎回の学生たちの感想や満足度などを記述させ、授業内容との呼応や全体の経緯およびその他の要因などを客観的に検討するため担当教員全員で議論し、時には予定の内容を変更するなどして、独りよがりでない授業運営を心掛けている。

授業風景



↑ KJ法によるまとめ  
←全体へ向けた発表風景

その他の特記事項

- ・担当教員はグループワークの経験がないものが大多数であったため、事前に経験のある教員を指導者とし、在学生ボランティアを受講生として KJ 法による模擬授業を行い、その模様を収めたビデオを配布したほか、教員自身がグループワークを経験するなどして、講義に備えた。
- ・講義実施日の夕刻より毎回 2 時間程度のアドバイザ会議を開催し、その回

●必修科目●グループ学修を通して自分の活かし方を考え、コミュニケーション能力を高める

の問題点、次回の実施方法について議論し、意識合わせを行った。その中で、各グループの学生の雰囲気の共有や、グループ活動になじめない学生への対処法について話し合いを行った。会議を重ねていくうちに、グループワークに対する教員の本気度が増し、教員自身が新しい教育スキルを徐々に獲得して成長を遂げていった。

- ・グループ活動になじめない学生に対して適宜学生相談室の教員によるサポートを行った。

- ・3学科合同で行われた前半部に対する振り返り調査を行った結果、グループワーク自体や議論する内容の意義に疑問を持つ学生も一部いることが分かった。この様な学生をどう能動的に学修に向かわせるかが今後の課題である。

# 組織人間行動論

朝日大学

経営学部経営学科

畦地真太郎

<b>科目の位置づけ</b>	経営学科に開設された科目であるが、「組織心理学の知見を利用し、組織内での動機づけの向上の方法と、それを促すリーダーシップのあり方について検討する」内容であるために、ビジネス企画学科の選択科目ともなっている。学部の多くの学生に受講を薦めるべき科目となっている。
<b>受講（登録）学生数</b>	42名
<b>科目の到達目標</b>	特に集団意志決定におけるリーダーの役割に焦点を置き、組織によって課題解決や知識創造をする際に、リーダーが設定すべき目標・指示の役割と、調整すべき組織内の人間関係要因について理解すること。
<b>教育方法の特徴</b>	いわゆる大教室での座学ではあるが、学生との相互作用を積極的に取ることであり、教育効果の向上を図っている。主要な特徴は、以下の通りである。 1) 毎回の授業終了時に、学生に対し、① 授業ノート、② 当日の講義内容と関連したミニ課題への回答、の提出を行わせる。教員は翌週までに2点について添削を行い、採点し返却する。これにより、① ノートテイキング技量の向上、② 授業内容の確実な定着、の2点を図る。 2) 授業内での、個別の学生に対する問いかけと回答。 3) CSCL システムを用いた教材の配布。学生は、CSCL システムにアクセスすることにより、授業の予復習を行うことが可能である。また、欠席学生に対する授業内容の提示も同時に行っている。 4) 多様なデモンストレーションおよび体験実習形式の授業回を設けている。① 集団的浅慮およびリーダーシップに関するビデオ教材の投影。② 集団意志決定課題の実習、③ 集団統制課題の実習。これらは、座学の内容を理解した気になっている学生に対し、実際の場面でのリーダーシップを活かした行動が困難であることを体験してもらうことを目的としている。これにより、「分かった気になる」だけでなく、授業当日から実践的に使える知としての理解を図る。
<b>教室空間の特徴</b>	開講されている513教室は、定員200名の階段教室である。主に使用される機材は、設置されているプロジェクタである。パワーポイントによるスライドが、ノートPCによって投影される。授業はスライドを用いて行われるが、ノート作成が必須のため、内容を限り、授業進行速度を学生の板書に対応できるように十分に調整している。 授業雰囲気維持のために、スライド遠隔操作機能のついたレーザーポインタを用い、スライドの進行と指示を、教室内通路を随時移動しながら行っている。

●選択科目●CSCL を用いたり、授業ノートやミニ課題を活用した講義

	<p>この移動を利用し、学生への問いかけを行う。 課題実習時は、教室内で数名ずつが臨時の班として集合するという形になる。</p>
<p><b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b></p>	<p>・集団統制課題回 集団討議を行った後に、投票によって以下の人間を、チームごとに各1名ずつ選出する</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1) 最もリーダーとしてふさわしい人間</li><li>2) 最もチーム（議論・結論）に対して貢献した人間</li></ol> <p>これにより、集団を機能的に動かし成果を挙げるためには、いわゆる「リーダー」だけではなく、集団メンバーの各員が自らの役割を自覚し、適応し、行動する必要があるということを学ぶ。実習の条件によっては、集団の再組織化についても学ぶことが可能である。</p> <p><b>【およそ 15 分間】</b> 課題の意義と前回までの授業内容との関連性を説明 <b>【およそ 35 分間】</b> 課題体験 議論のテーマ「どうすれば学内全面禁煙がきちんと守られるようになるかについて、具体的で効果的な方策を立てる」 インセンティブ「なお、各チームで「1) 最もリーダーとしてふさわしい人間」に選出された人間には、副賞が与えられます。張り切ってリーダーシップを発揮してください」 <b>【およそ 15 分間】</b> 「投票用紙」作成（ミニ課題の作成に当たる） さらに、「就職活動や職場の場面で、組織的な知識創造をしなければならない場面に立ったとき、あなたのすべきことは何でしょうか？それをするために、あなたに欠けているところ、補っていかなければならないところを書いてください」という課題への回答を求め、授業（実習）内容と学生本人との具体的な関わりを考えさせ、理解を求める。 <b>【およそ 25 分間】</b> 上述の目的、目論見、授業内容との関連を解説する。</p>
<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<p>8.「教育方法の特徴」、9.「教室空間の特徴」で述べたとおりである。 全学の情報教育機関である「情報教育研究センター」に設置されている CSCL システム「Moodle」を用い、学生が座学部分の予復習を行うことが可能である。授業はパワーポイントによるスライドをプロジェクタにより投影することで行われる。これは、学生が板書内容を授業前後に欠席者が知ることができるようにするためである。教室内で随時行われる学生への問いかけと回答を維持するために、授業の進行はスライド遠隔操作機能つきレーザーポインタによって行われる。</p>

●選択科目●CSCL を用いたり、授業ノートやミニ課題を活用した講義

**学 習 成 果**  
(学生は何ができるようになったのか)

授業目論見についての基礎的な知識を定着させるのみならず、あまり知らない人間との議論を、自らの求められている役割を認識しながら、積極的に行うことが可能になる。特に近年の学生は身近な人間関係に閉じこもりがちであり、職場でのコミュニケーションに困難を来す者が多いとされているが、その傾向を是正するための一助となっている授業（課題実習）内容となっている。

**学習成果の評価・測定  
の方法**

毎回のミニ課題において、学生自らの経験に授業内容の理論的な適用を施した回答が散見される。学生によっては、授業中に出来なかった質問を記述したり、教員との見解の齟齬について議論をしかけてくる者もある。教員側は、それらに対して、ある時は先学として、ある時は一学徒として真摯に対応することにより、学生の授業に対する興味を惹きつけ、集中力を上げ、理解を向上させることが可能となる。

**本科目についての学生から  
の評価**

毎回のミニ課題において、実生活への適応が可能であるとする声が多い。また、就職活動中に、主に面接時に役立ったとする声もある。

学期末の授業理解度調査の自由記述欄において、ビデオ教材や実習の他、ミニ課題でのやりとりについての肯定的評価をする学生が多い。

**学生の学習のあり方や教授  
法の果たす意味等に関する、  
担当者の基本的な考え方  
(教育哲学)**

大教室における座学講義においても、学生の集中力を維持し、理解力を高める方法は存在する。大人数に効果的に知識を伝達する方法として、いまだに有力である。ただし、そのためには個々の学生との相互作用を維持する必要がある。

**授 業 風 景**



授業風景 1：座学からグループワークへの移行

●選択科目●CSCL を用いたり、授業ノートやミニ課題を活用した講義



授業風景 2：グループワーク風景（全員が協力的なチーム）



授業風景 3：グループワーク風景（リーダーが成員を引っ張るチーム）



授業風景 4：最優秀チームへの景品贈呈

# ファーマシューティカルケア

## いわき明星大学

薬学部/薬学科

中越元子 野原幸男 林正彦 小佐野磨子 永田隆之 川口基一郎

<b>科目の位置づけ</b>	いわき明星大学薬学部の学士課程教育の目的は、豊かな人間性と倫理観をもち、確かな薬学的知識と技能を身につけた”多くの人から感謝される地域のくすりの専門家”を育成することにある。そのためには、患者志向型医療に必須となる幅広いコミュニケーション力と持続可能な自主的学習力や批判的思考力を醸成することが不可欠となる。本学部の初年次から3年次に亘る「イグナイト教育」は、学生の潜在能力を自己力で点火（イグナイト）し、主体的に、論理的かつ着実に学び続けることができる学士力の基盤創りを目的とした持続・発展教育である。本科目は、この「イグナイト教育」のアドバンスト科目として位置づけられている。
<b>受講（登録）学生数</b>	4年生 65名（2013年度）
<b>科目の到達目標</b>	ファーマシューティカルケアは患者の保健およびQOL（生活の質）の向上のため、明確な治療効果を達成するとの目標をもって、薬物療法を施す際の、薬剤師の姿勢・行動、関与、関心、倫理、機能、知識・責務ならびに技能に焦点を当てるものである。その実践においては、確かな薬学の専門知識と共に、コミュニケーション力やプレゼンテーション力が重要となる。そのため、本科目の具体的な到達目標は以下になる。①課題に対して、調査・情報整理・分析する力を身につけることができる。②課題に対してチームとしてのコンセンサスを形成できる。③調査結果をまとめてプレゼンテーション（プレゼン）できる。④ファーマシューティカル・コミュニケーションの重要性を実感できる。
<b>教育方法の特徴</b>	現在医療人教育で注目されている PBL（Problem-Based Learning）：問題基盤型学習は、自主学習へのモチベーションの乏しい学習者に対する教育効果において問題点が指摘されている。そこで本科目では、学習集団に対して均質な学習効果をもたらすと考えられている TBL（Team-Based Learning）：チーム基盤型学習を取り入れたアクティブラーニングを実践し、学生の自主的学習を促し、教育の質保証の強化を図っている。授業は学生全体を半分に分け、5名ずつのチーム編成として前半後半で展開する。2日間連続3コマ（90分×6）を2週連続で実施し、これを3回繰り返す。学生はチームごとに、教員により提示されたファーマシューティカルケアを意識した薬物療法または実務関連の多様な課題に対し、調査・情報整理・分析を行い、チーム内及び全体で成果を発表し、チーム活動での貢献度評価や相互評価を行う。また、薬剤師国家試験レベルの問題作成や解答解説により学習成果のフィードバックを行う。このような教育方法を3回繰り返すことにより、自主学習のモチベーションを高めることができる。さらに、この教育法では、コミュニケーション力や共同作業によるチームへの貢献度などについて少人数の指導教員全員がチームメンバー

	<p>一人ひとりの主体的な学習状況を把握できる。</p>
<p><b>教室空間の特徴</b></p>	<p>1) スクール形式で配置された固定式の椅子と机（150 人収容可）の大教室では、全体説明や、全体発表、質疑応答、クリッカーによる試験を行う。</p> <p>2) 低めのパーティションで6箇所仕切られた空間に6～8席の稼働式机をアイランド式に配置し、パーティション上に壁掛け式ホワイトボードを設置した学習室（50人収容可）で、小グループ討論（SGD）などのチーム活動を実施する。全チームを1箇所に集めてチームとしての学習活動を教員は見守る。</p>
<p><b>特定の回の授業の流れ・時間配分</b></p>	<p>1) 全体説明：大教室にて①ファーマシューティカルケアの説明と諸注意、②プレゼンの仕方、③レジюме（発表に用いる資料）の書き方、④化学構造式作成ソフトについてオリエンテーションする。（60分）Phase1 についての授業の流れを以下に示す。</p> <p>2) 1日目（調査のための役割分担と下調べ）：大教室にて、指導教員がPhase1の課題説明を行う。くじ引きにより課題の振り分を行う（2チームが同一課題となる）。学習室に移動し、各チーム内で役割分担（進行・書記）を決め（5分程度）、チーム全体で課題内容を解析し、進行役が調査項目等を全員に割り振る。（40分程度）続いて、課題について図書館やDI室へ適宜移動して、個人で下調べを行う。（17：30に出席を点呼し解散）</p> <p>3) 2日目（個人レベルのまとめ作業とチーム内発表および相互評価）：個人発表用に調査内容をパワポにまとめる（表紙無しでスライド2枚以内）。発表用読み原稿（必要な場合）、レジюмеを作成する。（180分）チームで集合して各自の調査結果を発表し、質疑応答（発表2分、質問1分）を行う。相互評価シートにより発表に対する相互評価を行う。余った時間を有効に使い、進行役が次回以降の準備などを指示して作業を進める。（90分）相互評価シート・スライド・レジюмеを授業支援システム（LMS：富士通 CoursePower）で提出する。</p> <p>4) 3日目（発表内容の構築と試験問題作成）：課題に対する結論をチームとして討議し、結論に沿って発表内容を考える。その間に、発表者、タイムキーパー、出題問題の解説者を決める。パワポのスライド（表紙含め12枚以内）を作成し、発表用読み原稿（必要な場合）、レジюме（A4用紙1枚）を作成する。発表練習をする。（190分）さらに、課題の結論を基に、国家試験レベルの問題を2題（2者選択の10択形式）作成する。（90分）最後に書記が作成したスライド・レジюмеと試験問題・解答・解説をLMSで提出する。</p> <p>5) 4日目（全体発表・討論とまとめ）：各グループでまとめたことを発表し、質疑応答（発表10分、質問5分）を行う。特に、同一課題のチーム同士の質疑応答を優先する。各質疑応答直後に課題出題教員が発表内容に関するコメントをする。相互評価シートにより、チーム発表に対する相互評価を行う。（180分）休憩を挟み、クリッカーにより各チームで考えた問題（1問1分各チーム2問出題）を解く。（20分）各チームが問題の解答と解説を行い、指導教員がコメントする。（20分）最後に貢献度評価や振り返りシートを用いた振り返り</p>

	<p>を行い、それらを提出後解散となる。(10分) また、相互評価シートはLMSで提出する。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>ドラッグ・インフォメーション (DI) 調査のためDI室のパソコンや図書館を活用し、自主的に各人が資料の調査等を行う。SGDのためにチームごとにホワイトボードやプレゼン用のプロジェクターを設置し、討論やプレゼンに役立っている。試験問題解答時にはクリッカーを用いており、リアルタイムで正答率を学生に提示できる。LMSを活用して学習成果物や相互評価の結果を回収することにより、各人のデータ整理が円滑となる。Phase2のポスターセッションのために、可動式パネルを活用している。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>自分の意見をよりわかりやすく伝えられるように、表やグラフで、事とめる方や発表の仕方 自身に付けることができた。          一つ一つの疑問点を言明へていくことで、仕事をこなすことか出来た限られた条件内にまとめるのが難しくしたが、要点をとりえる能力と、欲しい情報の収集の仕方が身についたと思う。          グループをうまくまとめることができたと思う (学生の直筆コメント掲載)</p> <p>アンケート調査により、63.7%の学生が意見の違いや立場の違いを理解する力が高まったと回答し、課題発見力、主体性、発信力はそれぞれ63.7%、55.9%、68.8%であった。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>チーム内発表におけるスライド資料、レジュメ、相互評価シート* (Phase1と3) : 30% (15×2)、全体発表における相互評価シート* : 15% (5×3)、振り返りシート : 30% (10×3)、試験 : 10% (5×2)、教員評価 : 15%の合計100点満点とする。</p> <p>* : 内容、表現手法、質疑応答などの11の評価項目について学生同士が5段階で相互評価する。さらに、良かった点、工夫を要する点などについてコメントする。この評価には、個人点とチーム点がある。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>最初はCBT*まで1年もないのにむかえたいと思いましたが、しかしここで他者の勉強の仕方を知り、何かを伝えることの難しさも学びました。自分が知っていることでも説明出来な場合は「知っていることにはなりません。大変ではありましたが、心に戻るといって意味で得るものがある授業でした。 (* : CBT ; 4年次に実施される実務実習に参加するための薬学共用試験)</p> <p>他のグループのスライドや、発表者の説明の仕方から、良いと思ったところを次から自分たちのグループでも取り入れようと思った。(学生の直筆コメント掲載)</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)</p>	<p>本学部のイグナイト教育は、基礎学力不足や学習方法のコツがわかっていない、あるいは主体性が乏しい学生に学習意欲を掻き立て、自主的に学ぶ習慣を身につける基盤教育である。この土台の上に、チーム活動により問題解決を試みる実践段階の学習が成立し、個々の体系的な思考力の醸成から踏み込んだ、チームにおけるコンセンサス形成までの過程の学習が可能となる。チーム活動を通して学習したことを他者と共有し、教え・学び合う過程で多様なフィードバックを受け、批判的思考力と創造力や行動力を身に付け学生は成長する。</p>

●専門必修科目●PBL, TBL を活用したイグナイト（点火）教育

授業風景

情報収集



SGD



全体発表



ポスター  
発表



その他の特記事項

入学時の偏差値は最低レベルでも、この授業を受けた第1期生の国家試験合格率は91.49%で、全国8位の成績であった。

# 経営理念事例研究

## 大手前大学

現代社会学部現代社会学科

芦原 直哉

<p><b>科目の位置づけ</b></p>	<p>本科目はマネジメントプログラムのレベル200番台に位置づけられている。マネジメントを学ぶ上で最も重要な経営理念を自己の倫理観と重ね合わせて自ら深く思考して理解・修得するものである。</p>																																										
<p><b>受講（登録）学生数</b></p>	<p>10名強</p>																																										
<p><b>科目の到達目標</b></p>	<p>本学では知識偏重から脱し、能力の伸張をはかる教育改革の基盤として10の能力の伸張の到達目標をシラバス（右図参照）に掲載している。グレードは1～7の7段階とし4以上は社会人レベル、大学卒業レベルは3と設定している。本科目は一部の能力について社会人レベルの高い目標を設定している。</p> <table border="1" data-bbox="805 840 1465 1093"> <caption>到達目標と学習成果</caption> <tr> <td>①知識レベル</td> <td colspan="5">経営理念に関する総合的知識を習得する。</td> </tr> <tr> <td>②能力レベル</td> <td colspan="5">ビジネスパーソンに必要な「利他の心」を持つと同時に、分析、創造、計画、プレゼン、コミュニケーション、論理的思考力を養成する。</td> </tr> <tr> <td colspan="6">C-PLATS (Level)</td> </tr> <tr> <td>コミュニケーション</td> <td>3</td> <td>プレゼンテーション</td> <td>4</td> <td>リーダーシップ</td> <td>3</td> <td>行動力</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>創造力</td> <td>3</td> <td>計画力</td> <td>3</td> <td>論理的思考力</td> <td>4</td> <td>分析力</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>チームワーク力</td> <td></td> <td>社会的責任</td> <td>4</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	①知識レベル	経営理念に関する総合的知識を習得する。					②能力レベル	ビジネスパーソンに必要な「利他の心」を持つと同時に、分析、創造、計画、プレゼン、コミュニケーション、論理的思考力を養成する。					C-PLATS (Level)						コミュニケーション	3	プレゼンテーション	4	リーダーシップ	3	行動力	3	創造力	3	計画力	3	論理的思考力	4	分析力	3	チームワーク力		社会的責任	4				
①知識レベル	経営理念に関する総合的知識を習得する。																																										
②能力レベル	ビジネスパーソンに必要な「利他の心」を持つと同時に、分析、創造、計画、プレゼン、コミュニケーション、論理的思考力を養成する。																																										
C-PLATS (Level)																																											
コミュニケーション	3	プレゼンテーション	4	リーダーシップ	3	行動力	3																																				
創造力	3	計画力	3	論理的思考力	4	分析力	3																																				
チームワーク力		社会的責任	4																																								
<p><b>教育方法の特徴</b></p>	<p>本学は全ての授業を PBL+SDL 型学修に転換すべく全学をあげて取り組んでいる。本科目及びマネジメントプログラムはその先鞭として4年前から PBL+SDL 型学修を導入している。</p> <p>PBL 型学修（Problem Based Learning）は課題を事前に調査・分析し、自ら解決策を思考してプレゼン資料にまとめ、発表しクラスでディスカッションする手法である。</p> <p>一方、SDL 型学修（Self Directed Learning）はアクティブラーニングと類語の自律的学修手法である。本科目では課題を自己学修するには教科書や参考文献を読むだけでも4時間/週の時間を要するよう設定している。学生は否が応でも自律的に学修しなければならず、修了時には全ての学生が受け身ではなく能動的な学修方法を修得できるようになる。</p> <p>本プログラムでは1冊以上の本を課題図書として課題を設定することを推奨している。本科目においては内村鑑三の「代表的日本人」を課題図書とし、次の二つの課題を与えている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 内村が挙げた5人の代表的日本人の内、最上の組織リーダーは誰か。その理由を挙げて論ぜよ。</li> <li>② 5人の人生理念や行動についての共通点について論ぜよ。</li> </ol> <p>全ての授業で1冊以上を課題図書とすれば、学生は卒業までに教科書や参考図書意外に相当数本を読むことになる。本離れが進む現代の学生に、本の読み方、</p>																																										

●講義●PBLとSDL(Self Directed Learning)

本を読むことの楽しさを修得させる機会となると考えている。

試験についても PBL 型論述試験を実施している。本学のロジカルシンキングファカルティ（論理的思考方法を修得させる教育手法や評価方法などを開発する教員の FD 組織：本学ではコミュニケーション、チームワークなど前述の C-PLATS 能力別に 6 つのファカルティが設置され、全教員はいずれかのファカルティに所属し活動している。）が「PBL 型論述試験の導入手法」として冊子にまとめ教員に導入を推奨している。本科目で実施している PBL 型論述試験の概略は以下の通りである。

- ① 試験課題（6 テーマ）を初回授業において学生に明示し、学生の自己学修を促す。
- ② 課題は本科目の範囲を網羅する大きなテーマとする。
- ③ 答えは 600 字以上/1 問が要求され、字数が足りない場合には減点となる。（持ち込み不可）
- ④ 評価は論理性、知識修得レベル、学修意欲（字数が足りないのは意欲点の減点）とする。

この PBL 型論述試験は一夜漬けで書けるものではない。教科書、参考文献をしっかりと学修した上で自分の考えを論理的にまとめて時間内に記述するには相当の学修時間を要し、この学修を通じて、深い洞察力と必要な知識を自ら修得するのである。

教室空間の特徴

通常の教室を使用しており、特殊な空間は必要としない。但し、プレゼンテーションのための AV 機器が整っていることが条件となる。

特定の回の授業の流れ・  
時間配分

授業全 15 回の偶数週は課題の発表とディスカッション、奇数週は課題に関する講義で構成されている。講義は学生が既に課題で自己学修し教科書の知識等は修得していることを前提として、教員と学生の間答形式で行っている。

以下は第 14 回目の授業の流れである。14 回目は最後の課題発表、ディスカッションの日であり、課題は「自分がクリーニングチェーンを開業すると想定して、自社の経営理念を 4～6 項目策定し、各々の理念を策定した理由を述べよ。」である。毎年、業種を変えるものの、この課題を最終の課題としている。その理由は経営理念を真から理解するには自分で創るしかないと考えるからである。

発表者は 3～4 名程度とし、一人の発表時間は 10 分～15 分、ディスカッション 10 分～15 分である。発表者は希望者を優先とし、希望者が多い場合には発表履歴の少ない者を優先する。全員の学生が発表できないのが残念であり、学生からはこの授業は 90 分ではなく 2 時間以上にしたいとの意見がある。

授業で特に使用している  
ツールとその活用法

本学では、授業のレポート、論文、作品などを e-ポートフォリオとして蓄積している。本科目においても、課題を提出すると自動的に課題作成のプレゼンテーション資料などが電子ファイリングされる。学生が最初の課題成果物と最終の課題成果物を比較して自己の能力の伸張を確認することにより、学修に対する高いモチベーションを生み出している。

また、自分のポートフォリオを印刷して就職活動に活用している学生も少なくない。

●講義●PBL と SDL(Self Directed Learning)

**学 習 成 果**  
(学生は何ができるようになったのか)

本学ではシラバスに掲げた10のC-PLATS能力の伸張目標に対し、学生が実際にその伸張を自覚しているか授業アンケートをとって分析している。

下図は試験も含めて完全にPBL型学修を行っているマネジメントプログラムと講義科目、演習科目の平均との比較である。完全PBL型学修の飛び抜けた能力の伸張が挙証された。

(有意差 0.00000196207)

特に論理的思考力、分析力、プレゼンテーション、コミュニケーション、チームワーク、社会的責任といった能力の伸張が著しい。これらは全てPBL+SDL型学修の成果であると考えられる。



**学習成果の評価・測定の方法**

本科目では学修成果の評価・測定の方法としてルーブリックを導入している。予め、C-PLATS能力の到達目標に合わせたグレードの基準を設け、意欲・能力・知識の三つの規準を設けてルーブリック表を作成し学生に示している。更に具体的にレポート、PBL型論述試験、授業への貢献度の配点規準を設けて評価の透明性を高めるようにしている。

必要に応じて、ルーブリックを基に学生に今後の学修についてアドバイスを行っている。

**本科目についての学生からの評価**

授業アンケートの授業満足度はほぼ満点に近い評価を得ている。以下は授業アンケートに書かれた自由記述の一部(要約)である。否定的記述は全くない。

- ① 自分にできること考えることなどが増していくのを実感できる。
- ② 「代表的日本人」を読む機会があり良かった。今後はポーターやドラッカーの本も課題にして欲しい。
- ③ 不安と緊張、達成感と喜び、様々な思いを充実して味わうことができた。プレゼンテーションによる課題発表は自分で噛み砕いてPPT資料を作成するので理解できるし、プレゼンの訓練ができて、だんだんと発表するのが楽しくなった。

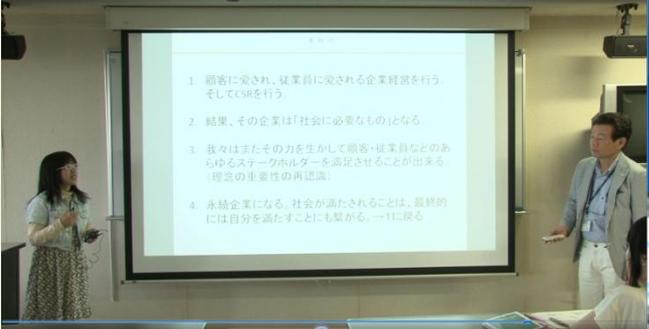
**学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)**

私は「学校は人にもものを教えるところにあらず。ただその天資の発達を妨げず、してよくこれを発育させるための具なり。」福沢諭吉『文明教育論』1889を教育者としての座右の銘としている。人が何かを教えるということではできないのであり、学生の学修による能力の伸張を手助けするのが教員の役割であると考えている。

最近の学生は正解を求めがちであるが、世の中に絶対に真なるものはほとんど存在しない。私は最初の授業において「私が話すことを正しいと思っはいけない。私の考えは数多の考えの一つであり、鵜呑みにするのではなく、私だけでなく多くの書物や他の学生も含めて他者の考えを理解した上で、自分の頭で考えて自分の意見を持つことが大切である。」と言っている。

PBL+SDL型学修はまさにこの私の教育理念を実践する上で現在のところ最

●講義●PBL と SDL(Self Directed Learning)

	<p>良の手法であると考えている。</p>
<p>授業風景</p>	<p>右の写真は前述第14回目の授業風景である。学生が自分の会社の理念について発表し、ディスカッションに入ったところである。この学生は理念だけではなく社名やロゴまで提案した。</p> 
<p>その他の特記事項</p>	<p>本学では教員が相互に PBL+SDL 型学修の実践を学び合い授業を改善していくために、毎学期全専任教員が授業見学を行い、実施レポートを提出し更にそのレポートに対するコメントを付して WEB 上で教員全てが共有している。今期からは職員、教育ボランティア（本学の教育改革を外部からチェックし意見をいただく為の約200名の組織）にも拡大する。</p>

## 長期実践型インターンシップを核にしたビジネス教育カリキュラム

嘉悦大学ビジネス創造学部

白鳥成彦准教授

小野展克准教授

田島悠史非常勤講師

### 1. プロジェクト科目の構成

嘉悦大学では従来の経営経済学部に加えて、2012年春に新しくビジネス創造学部を開設した。新学部では、社会でのビジネス経験と教室での学びを組み合わせた「実戦重視」の新しいタイプの教育を四年間にわたって行うのが特徴である。そのユニークなカリキュラムのコアとなるのが「プロジェクト科目」である。プロジェクト科目とは1年次後期から3年次前期まで行われるプロジェクトベースドラーニング型の業界研究・インターンシップの科目である。学生は学部が用意する9つのビジネスプロジェクトの中から選んで、それぞれ企業と連携しながら1つのプロジェクトを1年半かけて実施していく。学生はプロジェクト科目と研究会の連携を通して将来の仕事・業種を理解し、キャリアデザインを考えていくとともに、実践を通して専門性を高めていく。

プロジェクト科目はプロジェクトエントリー、インターンシップ、プロジェクトの3種類の科目から構成されている。プロジェクトエントリーは業界研究に行く前の準備段階の授業、インターンシップとプロジェクトは企業と共同で行うプロジェクトを基に業界研究を行う授業である。まず1年次後期に「プロジェクトエントリー」が開講され、その後、3年次の夏休みまでインターンシップ4科目とプロジェクト3科目が連続して行われる。具体的には「インターンシップ1」（1年次春季休暇）、「プロジェクト1」（2年次前期）、「インターンシップ2」（2年次夏季休暇）、「プロジェクト2」（2年次後期）、「インターンシップ3」（2年次春季休暇）、「プロジェクト3」（3年次前期）、「インターンシップ4」（3年次夏季休暇）のように設置されている。最初はアルバイトやインターンシップ学生に準じた役割を行いながら、徐々に正社員の役割を担えるように1つのプロジェクトを行っていくのである。

学外で実践するプロジェクト科目で問題を発見し、その問題を解決するべく学内の授業で学び、実践とともに専門性を身につけていく。そのプロジェクト科目と学内の専門科目を連携させる科目が「研究会」である。プロジェクト科目は教員各自が担当する研究会（ゼミ）と連携している。学外の企業と連携し学んでいくのがプロジェクト科目であり、プロジェクト科目と学内の科目を連携させ、専門性を教えていくことが研究会の目的である。

学生は最初に学外での活動を行うインターンシップをし、その後、そのインターンシップで見つけた課題や疑問点を解決するべく学内で行われる科目を受講し、問題を解決していく。その後、再度インターンシップに向かい、疑問点を実践の中で解決していくという形である。

以下に、ブランドビジネス、出版ビジネス、フードビジネスの3つのビジネスプロジェクトの実践内容を紹介する。

## 2. ブランドビジネスプロジェクト

ブランドビジネスでは地域で生産した産品を利用して、学生が商品を企画・開発し、その商品を認知させ、地域産品をブランド化させていく中で、学生自身で所属している地域を活性化することを目的としている。今回は地域産品として嘉悦大学がある東京都小平市で日本初の商業栽培が開始された果物であるブルーベリーを選択し、提携企業として株式会社生産者直売のれん会と一緒におこなっている。



開発段階のブルーベリープリン

全体の期間としては1年半あり、その中でブルーベリーの商品を複数開発・販売し、ブランド化していくことを考えているが、前期にはまずブルーベリーを利用した「べりべりぶるべり こだプリン」（ブルーベリープリン）を製造した。

プリンを開発する前に、販売されている既存のブルーベリー商品を購入し、調査を行った。そこでは、ブルーベリー商品の多様性を知るとともに、賞味期限や保存方法の簡便さを考え常温で保存できるフルーツプリンを選択した。フルーツプリンの工場は提携企業に紹介してもらい、学生自身で味を調整し、何度もテストマーケティングを行った。プリンの味をもう少し甘くしたほうが良いとか酸味を加えたほうが良いとか、色の調整とかを何度も工場とやりとりをして満足する味にしあげた。その後、どのようなパッケージデザインにしたらよいのか、プリンの名前等を学生が考えブルーベリープリンを完成させた。前期に製造までこぎつけた後は夏季休暇中での販売実践である。販売目標として8月、9月の2ヶ月間で10,000個を掲げ、現在様々な場所で学生自身の手により販売を行っている。このように企画



から製造、販路開拓、販売、認知までを実際に身体を動かしながら地域を活性化させていくことがブランドビジネスで行っていることである。

### 3. 出版ビジネスプロジェクト

このプロジェクト（小野展克研究会）では「出版ビジネス」と銘打って、講談社の協力を得ながら、学生が取材の実践に挑戦している。2年次前期に取り組んだのは、自民党の高市早苗政調会長ら与野党の政調会長や有力議員6人へのインタビューで、すべて講談社のウェブメディア「現代ビジネス」にシリーズ掲載された。7月の参院選挙を前に若者目線で政治家から新たな言葉を引き出すことを目指した企画には大きな反響があった。取材活動は、アポ入れから始まる。政治家の秘書に、取材の意図を口頭で上手く説明し、詳細



掲載されたインタビュー記事(\*1)

な内容を文書やメールで、しっかり伝えることが要求される。さらに、質問内容をじっくり研究。原発再稼働について見解、憲法改正へのスタンス等々。ホームページや新聞、雑誌記事などを読み込んだ上で、若者にしか出せない切り口を絞り出した。実際の取材では、百戦錬磨の政治家たちの存在感が学生たちを圧倒。そんな中でも、「なぜ失言したのか」といった政治家が嫌がる質問も逃げずにぶつける。政治家と言葉のキャッチボールができる学生も出てきた。そして最後は記事化の作業となる。インタビューの中で、インパクトのある言葉を中心に簡潔にまとめ、規定の字数に収める編集作業に汗を流した。夏休み中のインターンシップでは、経産省を辞めて政治家のブレンなどとして活躍する古賀茂明氏のロングインタビューを取行、講談社の雑誌「g 2」に掲載予定である。8月下旬には講談社の編集者も交えて「編集会議」が開かれ、秋以降の取材テーマの設定に向けて、学生たちがアイデアを持ち寄る。

\*1 <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/36283>

### 4. フードビジネスプロジェクト

フードビジネスプロジェクトでは、カフェやバーなどを幅広く展開している株式会社フロントコーポレーションと提携し、フードビジネスに関する実践的な試みを行っている。

このプロジェクトでは、実際の店舗での接客や調理経験を重視しつつも、そこに留まらず、店舗経営や商品開発にも挑戦することを目指す。

学生たちは、1年次春休みのインターンシップでプロントにて、社会人としての姿勢やあり方に関する研修を受けた後、2年生の4月からは1)実際の店舗内での研修、2)営業店舗での客層調査とマーケティング企画、に取り組んだ。特に2)では、プロントコーポレーションの社長を前に、学生たちは自らの調査内容のプレゼンテーションに挑戦した。



2年次夏休みのインターンシップでは、茨城県にある古民家カフェを二週間にかけて運営する。「過疎地域のカフェで収益を上げる」という難題に対して、学生自身は目標金額を達成するための企画立案を



学内発表会

上記客層調査と並行して、進めてきた。具体的には、地域住民の意向などを聞いた上で、メニュー開発、企画立案、広報などに取り組んでいる。特にメニュー開発については、プロントコーポレーションの社長や社員に試食をお願いし、コメントを頂くなど、プロの視点を学びながら運営に挑む。



メニュー開発

今後は、商品開発と店舗経営に関する実践的な教育を行っていく。商品開発については、本社会議に学生が参加し、開発に関わることを予定している。店舗経営についても、プロントコーポレーションの社員によるマーケティングからリスクマネジメントまで経営に関わる様々なレクチャーを予定している。

# キャリア設計(前期)・キャリア開発(後期)

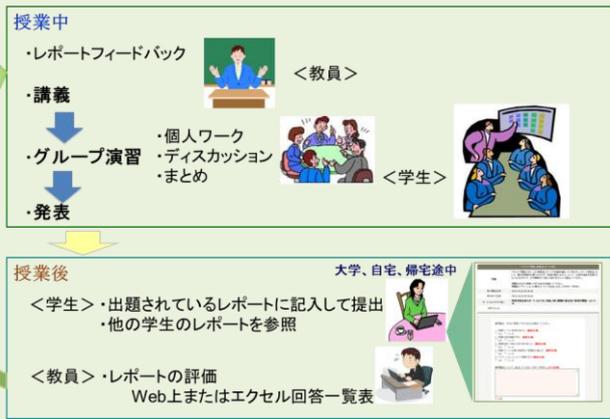
## 神奈川工科大学

専任教員 11名、非常勤講師 20名

<b>科目の位置づけ</b>	「学習目標の設定、職業観の形成、自己能力の開発、企業での職業体験等を行うことによって、4年間で体系的に自己キャリアを形成できるようになる」ことをキャリア系科目の学修目標とする。その中で、入学直後である1年次に①大学進学の意味、②入学学科の目的、を意識づけし、学習目標の設定、ポジティブ思考、チーム活動、対人コミュニケーションを養成していく。「キャリア設計」は1年生前期必修科目、「キャリア開発」は1年生後期日必修科目。
<b>受講(登録)学生数</b>	1200名
<b>科目の到達目標</b>	<p>(前期) 職業観の形成を目的として学生生活を創造していく導入科目である。1年前期の段階で、将来の進路を念頭に置きながら、4年間の大学生活において、どう過ごすか、何を学ぶか、どんなスキルを身につけるか、何の力を伸ばすか等について、学生自身が学修目標を設定できるようにする。具体的な学修テーマは、大学の学びと社会・仕事の関係、職業に関する幅の広い考え方、大学学修目標の設定、学修の振り返りに活用できるキャリアポートフォリオの利用法、論理的な思考方法や時間・行動スケジュール管理に関する基礎知識等を学ぶ。</p> <p>(後期) 大学生として、また社会人に必要な基本となる自己認識力、ポジティブ思考力、チーム活動力、対人コミュニケーション力を養う。具体的な学修テーマは、対人関係・コミュニケーションの基礎、ネガティブ意識の払拭・ポジティブ志向の高め方、目的意識の重要性、プレゼンテーションの基本、チームワークの高め方、自己学修の振り返りに活用できるキャリアポートフォリオの利用法等を学ぶ。</p>
<b>教育方法の特徴</b>	<p>授業においては、学生間交流・グループワークを中心とし、学生の主体性を引き出す手法を用いている。また、事前・事後学習についても、グループによる調べ学修を取り入れ、チーム活動力を引き出す工夫を行っている。さらに、ICTを利用したポートフォリオを活用し、教員・学生の双方向学習とともに自らの成長度・進捗度も確認できるように工夫している。</p> <p>(前期) 授業方法は、調べ学修やグループワークを中心に進めるが、企業人による仕事についての講義等も行う。</p> <p>(後期) 授業方法は、調べ学修やグループワークを中心に進め、プロジェクトの要件についても学ぶ。</p>

●専門必修科目 ●e ポートフォリオ活用のグループワーク

「キャリア設計」「キャリア開発」授業の流れ



教室空間の特徴

通常の教室を使用し、6～7人1グループを結成させ、60～70人1クラスとして実施している。

特定の回の授業の流れ・  
時間配分

(前期)

- 第1回 キャリア系科目の構成、キャリア教育の重要性、目的を理解する。
- 第2回 4年間での人間力向上指導のために、成長度を把握していくアセスメント検査の1回目を実施する。
- 第3回 キャリアポートフォリオの使い方をマスターする。
- 第4回 神奈川工科大学教育目標、学科教育方針を理解する。
- 第5回 専門学科のことをもっと知る。
- 第6回 学びと仕事の関係性を理解できる。
- 第7回 企業人の講義を通して、学びと仕事の関係性を理解する。
- 第8回 企業人の講義を通して、学びと仕事の関係性を理解する。
- 第9回 ロジカルシンキング能力を身につける。
- 第10回 ロジカルシンキング能力を鍛える。
- 第11回 ロジカルシンキング能力を磨く。
- 第12回 「社会が求める人材要件」を考える。
- 第13回 大学4年間のタイムマネジメントを策定する。
- 第14回 大学の学びの「キャリア設計書」(ロードマップ)を作る。
- 第15回 キャリアポートフォリオの使い方 上級偏。

(後期)

- 第1回 当該授業の大切さ、目的を認識、全体の構成、進め方、成績評価方法を理解する。
- 第2回 対人関係のあり方を考える。
- 第3回 制限思考を理解し、排除する考え方を身につける。
- 第4回 「マンネリ、甘えや停滞」の原因を理解する。
- 第5回 相手を尊重しながら自分の意見を主張するスキル(アサーション)を身につける。他者に影響を与える言動のスキル(ストローク)について理解する。
- 第6回 メンバーシップ、リーダーシップの基本を理解する。

●専門必修科目 ●e ポートフォリオ活用のグループワーク

	<p>第7回 目的思考の大切さを理解する。</p> <p>第8回 より説得力のあるプレゼンテーションの基本を理解する①。</p> <p>第9回 より説得力のあるプレゼンテーションの基本を理解する②。</p> <p>第10回 グループとして「どのように神奈川工大をプレゼンするか」を、合意形成する。その作業を通して、合意形成の基礎と仕方を理解する。</p> <p>第11回 プロジェクトの大切さを学ぶグループ演習。実践テーマを通して、自己キャリアを向上させる。1 STEP 作業。</p> <p>第12回 プロジェクトの大切さを学ぶグループ演習。実践テーマを通して、自己キャリアを向上させる。2 STEP 作業。</p> <p>第13回 プロジェクトの大切さを学ぶグループ演習。実践テーマを通して、自己キャリアを向上させる。3 STEP 作業、2回に渡って実施する。</p> <p>第14回 プロジェクトの大切さを学ぶグループ演習。実践テーマを通して、自己キャリアを向上させる。3 STEP 作業、2回に渡って実施する。</p> <p>第15回 大学4年間での人間力向上指導のために、成長度を把握していくアセスメント検査の2回目を実施する。</p>
<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<p>キャリアポートフォリオ：毎授業後、「授業確認レポート」をポートフォリオシステムにて Web 上で出題・作成・提出。</p>
<p><b>学 習 成 果</b> (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>(前期) ①職業観意識の形成や、キャリアについての考え方を理解し、自分の将来設計を考えることができる。 ②大学の学びと社会・仕事の関係がイメージでき、関連付けた学び方を考えることができる。 ③社会人の経験談などを聞き、職業に関する幅の広い考え方を養い、大学での学修目標を設定することができる。 ④キャリアポートフォリオの利用法を理解し、自己学修の振り返りに活用できる。 ⑤論理的な思考方法や時間・行動スケジュール管理に関する基礎能力が身につく、実践することができる。</p> <p>(後期) ①客観的に自己認識ができ、自分自身を律し、動機付けすることができる。 ②ポジティブに考え、実践することができる。 ③目的思考ができ、実践することができる。 ④コミュニケーションがスムーズにでき、良い対人関係を作ることができる。 ⑤チームワークができ、協力し合って物事を遂行し、結果に結びつけることができる。</p>
<p><b>学習成果の評価・測定 の方法</b></p>	<p>レポート（毎回授業後のレポート）55%、演習課題と授業参画態度 45%を基準として、総合的に判断している。</p>
<p><b>本科目についての学生 からの評価</b></p>	<p>総合満足度</p> <p>” (前期) 大変満足 18.0%、満足 49.4%、普通 30.3%、やや不満 1.7%、不満足 0.9%</p> <p>(後期) 大変満足 21.7%、満足 45.6%、普通 29.3%、やや不満 1.9%、不満足 1.4%”</p> <p>”「対人コミュニケーション能力の向上」として、①誰とでも会話ができるようになった、②相手との接し方がわかった、③自分の意見を言えるようになった、④人見知りの克服が少しできた、⑤グループワークにより友達ができた</p>

「チームワーク力の向上」として、①個人だけの作業から、チームメンバーとの協働へ進むことができるようになった、②チーム、他者への影響も考慮しつつ、役割分担をこなすということを理解した、③リーダーシップ、メンバーシップとは何か、理解を深めた

「プレゼンテーション能力の向上」として、①人前で話せるようになった、②目的・対象者を意識するようになった、③話す内容を組み立てられるようになった

「自己理解」として、①ネガティブ思考からポジティブ思考へと変わった、②主観的、自己中心的な考えから、客観的な見方ができるようになった、③自分の癖がわかり、改善を心がけるようになった

「自己管理能力の向上」として、①計画的に行動を取るようになった、②目的意識を持つようになった、③やるべきことを認識するようになった

「その他」として、①「未知の問題に取組もう」という姿勢がでてきた、②毎回のレポートで文章を書くことに慣れた、③社会人としての意識を持つようになった、④将来の就職や他の授業でも役立てることができる、等の学生評価があった。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

解のない問題に対し、学生が主体的に取り組んでいくためには、一方向による知識の教授だけではなく、双方向によるコミュニケーションに基づくアクティブラーニングを通じて、必要な考え（クリティカルシンキング等）を身につけることが重要と考える。そのために、継続的なグループ学習を通じて相互の考えを理解・尊重し、その上で「なぜ」そのような考えに至ったのかを引き出し、その経験を積み重ねていくようにしたい。

授業風景



# 教育実習・事前及び事後の指導

金沢星稜大学

人間科学部こども学科

村井 万寿夫

科目の位置づけ	小学校の教員免許状を取得するため、教職に関する履修科目の総まとめ（4年次配当）として位置づけてある
受講（登録）学生数	22人（小普免取得予定者のみ）
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none"><li>・教育実習の意義、心得について理解し、小学校の一日の流れをつかむことができる</li><li>・子どもの発達の姿をとらえながら、授業展開の技術を模擬授業を通して考えることができる</li></ul>
教育方法の特徴	<ul style="list-style-type: none"><li>・教員による講義と、学生による討論を組み合わせ、「教える」と「考えさせる」ことを明確にしている</li><li>・受講生全員が模擬授業を行い相互評価後、教員による評価（良い点、改善点）を行っている</li></ul>
教室空間の特徴	<ul style="list-style-type: none"><li>・小学校の1つの教室（普通教室）とほぼ同サイズの教室と、児童机に似た物を使っている</li><li>・学生同士がグループで討論するときには「班になって！」と言って、机を合わせる（小学校のイメージ）</li></ul>
特定の回の授業の流れ・時間配分	<ol style="list-style-type: none"><li>① 学生Aが10分の模擬授業を行う（10分）</li><li>② 子ども役となった学生が授業を受けた感想をもとに評価カードに書く（2分）</li><li>③ 授業した学生が「ふり返り」を1分で発表する（1分）</li><li>④ 何人かがカードに書いたことを挙手して発表する（3分）</li><li>⑤ 教員は両者のコメント内容を含め、良い点、改善点を話す（3分）</li><li>⑥ 学生Aにカードを渡したり、学生Bが次の準備をする（1分）</li></ol> <p>※①～⑥で約20分</p> <p>1コマ90分で、学生A～Dの4人が模擬授業する</p>
授業で特に使用しているツールとその活用法	<ul style="list-style-type: none"><li>・毎回の教員自身が作成し、学生に配布する授業計画はアナログ的かつ古典的ではあるが最も重視している</li><li>・“ベルスタート”も重要なツールと捉えている。小学校でも“ベル着”から“ベルスタート”にある現状において、教員も学生も互いに“ベルスタート”を毎回実行している</li></ul>

●教職科目●模擬授業による相互評価など

**学 習 成 果**  
(学生は何ができるようになったのか)

・小学校の学年段階（発達段階）に応じた考え方が指導案作成、教材準備、発問、学習課題設定、つぶやきや発言を広めたり板書したりすることが出来るようになってきた

**学習成果の評価・測定の方法**

- ・ 教員による観察評価
- ・ 教員による学生が作成した指導案の評価
- ・ 模擬授業を全員が行うので、学生自身の自己評価
- ・ 教育実習後の観点別自己評価

**本科目についての学生からの評価**

・ 授業についての満足度についてアンケートしたところ、「満足」と「まあまあ満足」を合わせた割合は 95.5%を示し、評価は高いと考えられる

・ 模擬授業を行った際の教員からのコメントはどの学生も好意的に捉えている（レポートより）

**学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）**

・ 本科目は、教員自身の学生への教え方や態度がとても重要であり、師範となれることをモットー（哲学）としている（師となれるように）

**授 業 風 景**

写真「模擬授業の様子」

① 先生役の学生中心の写真



② 評価カードを書く学生の写真



# ゼミナール 1、ゼミナール 2

## 関西外国語大学

国際言語学部国際言語コミュニケーション学科

小島 泰典

### 科目の位置づけ

本授業は、平成 24 年度に採択された文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の中心的な取組として実施するものである。

具体的には、企業、行政、地域と連携して企業などが抱える実践的な課題を、受講学生が主体となって課題解決の道を探り、アンケートなどの調査を実施して、その結果を分析評価、学生ならではのアイデアや提案を作成し、その成果を企業などに直接プレゼンテーションする授業であり、週 1 回 90 分授業、春学期 15 週、秋学期 15 週、合計 30 回実施した。

関西外国語大学国際言語学部では、24 年度に京阪電気鉄道(株)、(株)叶匠寿庵、大阪府商工労働部、千日前道具屋筋商店街の 4 つの企業、行政、地域と連携して実施した。

小職はこのうち(株)叶匠寿庵を担当した。このクラスでは、受講学生が取り組むテーマとして、叶匠寿庵とも協議し「和菓子の里で国際交流を企画しよう」を選定した。その具体的なプロジェクトの内容としては、叶匠寿庵の「寿長生の郷(すないのさと)」での「茶の湯と和菓子」「四季と和菓子」などの体験をもとに、関西外国語大学の強みである国際交流の視点から、外国人に対し「和菓子」の魅力や「日本文化としての和菓子」をいかに発信するかを調査・検討し提案するものである。

### 受講（登録）学生数

9 名（4 クラス合計 40 名）

### 科目の到達目標

本授業では、学生の主体的な取り組みを進め、また、企業と連携して活動する中で、実際の企業活動を体験することなどにより、社会人基礎力の向上、さらには就業力の育成を目標としている。具体的には、PBL 授業を通じて、問題解決能力、企画・提案能力、コミュニケーション力、情報発信力、協調性、積極性などを身につけることを目指した。

### 教育方法の特徴

本授業では、受講学生の自由な発想を尊重することを基本方針にして、学生のディスカッションや学生による活動成果のプレゼンテーションを中心に進めた。各回の授業記録や今後の活動方針、スケジュールなども学生が作成した。担当教員及び企業講師からは適宜、助言を行ったが、活動内容に対する関与は最小限にとどめた。このため、シラバスで示した授業内容についても、学生の討議の中で柔軟に変更・改善することを想定したものとした。

また、学生たちは授業時間外での多くの活動を自ら計画し実施した。具体的な授業外活動としては、(株)叶匠寿庵「寿長生の郷」での現地体験学習、外国人留学生などを対象にした和菓子や茶の湯に親しむイベントの企画、イベント

●課題解決型授業（PBL：Project Based Learning） ●企業等が抱える課題を解決するプレゼン授業

	<p>実施のための広報や事前準備、外国人教員や留学生に対するアンケート調査の実施、英文パンフレットの作成作業、滋賀県国際協会等との連携打合せ、オープンキャンパス・履修ガイダンス・ゼミ発表会でのプレゼンテーション、連携企業での報告会など、多岐にわたる活動を行った。</p>
<b>教室空間の特徴</b>	<p>プロジェクター、大型スクリーン、ブルーレイプレーヤー、OHC等を備えた教室。</p>
<b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b>	<p>授業は各回の実施内容によって大きく相違するため、全30回の授業の全体像を示す。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>① ウォーミング・アップ講座（4チーム合同の授業） 最初の6回の授業は、ウォーミング・アップ講座として、マーケティング概要、プランニング概要、マーケティング・リサーチ、KJ法演習など、課題解決のための調査手法や発想法等の講義を4チーム合同で実施した。</li><li>② 和菓子や叶匠寿庵に関する講義、「寿長生の郷」での現地体験学習 第7回、第8回の2回の授業は、(株)叶匠寿庵の企業講師により「和菓子と日本文化」「叶匠寿庵」「寿長生の郷」などについての講義を実施した。さらに、平成24年6月2日（土）には、「寿長生の郷」を訪問し、和菓子作り、お茶席、里山散策、古民家見学などの現地体験学習を行った。</li><li>③ これまでの講義・現地体験学習を踏まえた活動内容や調査項目の検討 チーム全体の具体的な目標の設定や各メンバーの役割分担を決定した。また、併せてイベント及びアンケートの調査項目や調査対象者を検討した。</li><li>④ 第1回イベント（平成24年7月24日）に向けた準備と実施 イベントの企画案（イベント内容、スケジュール、費用、参加人数等）を検討し決定した。また、参加者募集ポスターの作成、イベント参加者に対するアンケート項目の検討・決定なども行った。外国人教員、留学生（米国、カナダ、フランス）が参加した。</li><li>⑤ アンケート調査の準備・実施 アンケート項目、アンケート対象、実施方法を最終的に決定した。学生が全員協力して100件を超えるアンケート調査を実施した。</li><li>⑥ 第2回イベント実施（平成24年10月20日） 第1回イベントの良かった点や反省点を踏まえたプランを再検討して、改善を図り実施した。留学生（中国、韓国、オーストラリア）が参加した。</li><li>⑦ 提案内容の検討・決定 アンケート調査やイベント結果を総合的に捉える中で、KJ法などを使った検討を経て提案内容に関するアイデアを多数創出した。多くのアイデアのうち企業への提案に向けてアイデアの絞り込みを行った。この段階で、アンケート調査の分析手法・考察内容について(株)叶匠寿庵の講師とも討議し、適宜アドバイスを受け、最終の提案内容6項目を決定した。</li><li>⑧ 学内の合同報告会 平成24年12月19日、4チーム合同の報告会を実施した。各チーム15分という限られた時間の中で、叶匠寿庵チームでは、提案項目を3つに絞り効率よく報告を行った。</li></ol>

●課題解決型授業（PBL：Project Based Learning） ●企業等が抱える課題を解決するプレゼン授業

	<p>⑨ 企業での報告会 平成 25 年 1 月 8 日、寿長生の郷において(株)叶匠寿庵の会長・社長はじめ社員の方々 60 名にこの 1 年間の活動内容や 6 項目の提案を学生 9 名が全員参加でプレゼンテーションを行い、高い評価をいただいた。</p> <p>⑩ 滋賀県との連携 滋賀県庁及び滋賀県国際協会を訪問し、滋賀県在住外国人との交流方策等を協議した。</p> <p>⑪ 理事長、学長、教員役職者等への報告会（平成 25 年 3 月 25 日）</p>
<p><b>授業で特に使用しているツールとその活用法</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイント：活動報告や提案説明のプレゼンテーション</li> <li>・大型のポストイットと模造紙：KJ 法による提案のアイデア創出</li> </ul>
<p><b>学 習 成 果</b> (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員で企業から与えられた課題・テーマに取り組み、メンバー 9 人が常に協力し、協議し、連絡しあう中で、それぞれのメンバーの意見を尊重しながら、提案を生みだした。このような作業の中から眼に見えて協調性が身についた。</li> <li>・学生には、課題解決の手法は「ウォーミング・アップ講座」等で説明したが、授業の進め方や作業スケジュールなどはすべて学生たちが自主的に決定した。このことで、他の授業のように受け身ではなく主体性を持って授業に取り組むことができた。</li> <li>・学内の合同報告会、企業での報告会、理事長、学長等への報告会など数回のプレゼンテーションの機会を全員で分担し準備・発表することで、発信力が大きく向上した。</li> <li>・企業講師も多くの授業に参加、学生とのディスカッションを行った。その中では学生の意見を尊重しつつも、企業の視点でいろいろと有意義なアドバイスをいただき、学生たちにとっては、コミュニケーション力を向上する良い機会となった。</li> </ul>
<p><b>学習成果の評価・測定の方法</b></p>	<p>以下の 2 項目を総合的に評価した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①課題に対するアウトプット（報告書、プレゼンテーションなど）</li> <li>②グループワークへの参画度、貢献度など</li> </ol>
<p><b>本科目についての学生からの評価</b></p>	<p>受講学生の感想の抜粋を以下に示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7 月の第一回イベント活動から始まり、和菓子アンケートの作成と実施、日本語版&amp;英語版パンフレット作成、連携企業の幹部前でのプレゼンテーションと、とても 1 年間だとは思えない経験がたくさん出来、終了時には充実感と達成感で胸がいっぱいで、それは私の積極性の成長にも繋がったと感じている。</li> <li>・ 企業の視点で物事を考える姿勢を身に付けることが出来たと思う。</li> <li>・ この PBL 授業の活動ほど、大学でお互いの意見をぶついたり、チームでひとつのことに取り組んだりすることはなかった。そして、向上心のあるメンバーと切磋琢磨する中で多くの刺激を受け、以前よりももっといろんなことにチャレンジしたい、頑張りたいと前向きな気持ちになることができた。</li> <li>・ 自分達で考え行った事だからこそ、失敗もあったが、その失敗から生まれる学びはとて多く、成功した時の喜びはより大きなものとなり、メンバーひ</li> </ul>

●課題解決型授業（PBL：Project Based Learning） ●企業等が抱える課題を解決するプレゼン授業

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方  
（教育哲学）

とりひとりの「成長」や「自信」に確実に繋がったと思う。

・お互いの意見を尊重しながらも、刺激し高め合うことが出来るメンバーを得ることができ、大切な仲間・友人となった。

・学生が主体的に授業に取り組むこと、また学生たちがそれぞれ役割分担し、協力・協調して全員参加で授業に取り組むことに主眼を置いた。

・リーダー、副リーダーを学生の中から互選で選び、リーダーは副リーダーと共にチームのメンバーをまとめ、自ら率先して課題解決に取り組むよう指導した。

・企業講師とのコミュニケーションを重視し、学生たちが企業の考え方を知る機会とした。



授業風景



イベント（和菓子作り）



イベント（和菓子の里 散策）

授 業 風 景

# 英語総合講座 36

## 神田外語大学

英米語学科  
曾根和子

科目の位置づけ	英米語学科の3年生、4年生の履修科目 英語圏の様々なテーマを扱い、英語“で”学ぶ内容重視の授業。神田外語大学が設けている英語運用能力基準でC基準（TOEIC:600、TOEFL:480、IELTS:4.5）を満たしている事が履修の条件
受講（登録）学生数	30名
科目の到達目標	英語総合講座は、担当教員が各自、様々なテーマを扱うことになっているため、科目の到達目標も教員ごとに異なる。英語総合講座36は、放送通訳・翻訳の作業を通して、英語の理解力、および日本語の表現力を向上させ、時事問題に関する知識を増やすとともに、放送通訳・放送翻訳という職業に関する理解を深めることを目標としている。
教育方法の特徴	英語総合講座の趣旨は、様々なテーマを「英語」で学ぶというもので、授業は、基本的には英語で行われることになっているが、本授業では、履修者は、テレビやラジオの英語ニュースを日本語のニュースとして放送する際の原稿づくり、および二か国語放送の通訳作業を学んでいる。従って、教材は英語のニュースではあるが、学生は日本語の訳出を勉強するため、授業は、例外的に、日本語で行われている。授業は、毎回、実際の英語ニュース素材を使って、放送通訳や放送翻訳の作業を行うという形で実施しており、履修する学生に、放送通訳・放送翻訳の業務が行われている放送局の現場を「疑似体験」してもらおうという、一種の職業実践的な教育方法を採用している。教材の英語ニュースは、担当教員の曾根が、実際に放送通訳を行ったものを使っている。
教室空間の特徴	授業はCALL教室で行われている。CALL教室では、教卓のコンピュータから、学生が座っている席のコンピュータに、映像や音声の教材を配布する。また、CALL教室の全コンピュータには通訳訓練用のソフトウェアがインストールされており、学生は、配布された教材を、通訳訓練用のソフトウェアを使って、放送通訳原稿に仕上げ、その後録音を行う。
特定の回の授業の流れ・時間配分	1回の授業は1時間30分  1 ルーム・スピーカーで教材として使う英語のニュース映像を流す（5分前後） 学生は、まず、映像と英語音声を一斉に聞く

●英米語学科の必修科目●放送通訳・放送翻訳の疑似体験

2 学生が座っている席のコンピュータに、その英語ニュースの映像を配布する

3 学生が、それぞれ通訳訓練用のソフトウェアを使って、英語ニュースの映像を視聴しながら、日本語の訳文を書いていく。この作業は、学生が個人で行う（30分前後）

この作業は、英語の音声を聞き日本語の翻訳文を書いて終わりというものではない。放送通訳とは、英語のニュースを日本語へと訳出したうえで、二か国語放送の日本語音声を読み上げる仕事なので、学生は、英語の音声にあわせて日本語の音声を「アナウンサー」のように読み上げるところまで仕上げる事を求められる。

4 30分前後の個人作業が終わったら、英語音声に合わせて、自分が仕上げた放送通訳の原稿を（アナウンサーのように）読み上げ、それを録音する。（5分前後）

5 教材として使用した英語のニュースのスク립トを配布、その内容について学生に質問し、解説を行う。（30分前後）

6 内容の理解ができた段階で、学生は、先程、録音した自分の放送通訳のパフォーマンスを聞く。また、何人かのパフォーマンスを、ルーム・スピーカーで流す。（15分）

7 最後に、担当教員の曾根が行った実際の放送通訳（日本語音声）を流す。（5分）

以上のような流れになっている。

**授業で特に使用している  
ツールとその活用法**

9の教室空間の特徴の部分で記述したが、この授業の展開にあたっては、CALL教室、および通訳訓練用ソフトウェアが重要な役割を果たしている。

**学 習 成 果  
(学生は何ができるようになったのか)**

ニュースという時事問題を扱う素材を教材にしているため、学生は、今、社会で問題となっている物事に関する知識を、英語および日本語の両方で深められ、両言語の語彙を増やすことができた。また、放送通訳の作業とはどのようなものか、英語から日本語へ翻訳の際、どのような点に注意しなければならないかを、ある程度理解できた。

**学習成果の評価・測定  
の方法**

授業で使用したすべての英語ニュースを範囲として、その中から選んだ英語の音声を流し、即、日本語の翻訳文を書いてもらうというテストを行って採点する。

●英米語学科の必修科目●放送通訳・放送翻訳の疑似体験

**本科目についての学生  
からの評価**

色々なトピックのニュース英語を聞いて、実用的な英語が学べた。  
単語力が向上した。  
担当教員が実際に行った放送通訳を聞いたので参考になった。  
自分の声を吹き込み、時々、それをルーム・スピーカーから流されるので、  
恥ずかしい思いもあったが、自分が本当に放送通訳になった気分になり、楽しかった。  
日本語の勉強にもなった。  
  
などの感想が寄せられた。

**学生の学習のあり方や教授法の  
果たす意味等に関する、担  
当者の基本的な考え方（教育  
哲学）**

教育に関しては、学生を「聞くだけの受け身な態勢」にしておかないように気を配っている。学生に具体的な学習作業をさせることが重要だと考え、その際に、その学習作業は何のためにやっていて、どういう効果があるかを明確に示している。また、自分は通訳や翻訳の実務も行っているので、実際の現場で使用した素材を教材にするなど、できるだけ実践的な教育をすることをめざしている。

# 西 洋 史

## 九州共立大学

経済学部経済・経営学科

松田 高史

<b>科目の位置づけ</b>	高等学校教諭一種免許(地理歴史) および中学校教諭一種免許(社会)取得に必要な必修科目。ともに1年次前期配当であるが、毎年度数名の上学年学生も受講。世界史のうち西洋に関わる歴史の流れを、古代から現代に至るまで一通り学ぶ。
<b>受講(登録)学生数</b>	34名(うち平成25年度は2年生1名)
<b>科目の到達目標</b>	1)歴史を学び、歴史を教えることの意義を知る。 2)ヨーロッパがどのように形成されたかを、具体的な史実をとおして理解できる。 3)歴史がどのような要因で動いているか、そのダイナミズムを実感し、かつ説明できる。 4)歴史をどのように教えるかを学び、その手法を実際の授業に生かすことができる。 (平成25年度『講義要項』より)
<b>教育方法の特徴</b>	受講生は全員「教師」として「模擬授業」をおこなう。その手順は以下のとおりである。 なお、共通の教材として同じ出版社の高校世界史教科書を購入させ(教員側で一括取り寄せ)、必ず教科書を基本にして授業計画を立てるよう指導した。 1)各受講生は自分の担当する模擬授業の課題について、授業計画書を作成し、授業内容に即した資料を準備する。 2)上記の授業計画書および資料について、実際の模擬授業の数週間前から断続的に教員のチェックを受け、授業テーマについての理解を深めるとともに、授業計画書・資料の体裁を整える。5回以上の指導を受ける熱心な受講生も少なかった。 授業計画書のチェックは、本学に設置されている授業理解支援のための場である学習支援センターを利用した。当該センターには、世界史を含めて各科目の高校教科書や歴史年表・用語集などが備品として置かれており、受講生は教科書により同じ歴史事項でも記述内容が異なることを、自発的かつ体験的に目の当たりにすることになった。(これは歴史授業においてきわめて重要) 3)本番の模擬授業の際は、原則として男女ともスーツもしくは教員にふさわしい服装で臨み、教師としてのけじめとした。 4)模擬授業を受ける側の学生は、高校の生徒として「教師」の授業を受け、板書を写すなどする。授業後は、授業内容について必ず質問を考え(時間に余裕があれば実際に質問する)、また担当「教師」の授業についての感想・批評を所定の書式に記入して、その場で教員にメール添付送信をおこなう。 ☆模擬授業実施に向けてかなりの時間量を受講生・教員ともに事前準備に要する

ことになるが、その段階で受講生が模擬授業へのモチベーションを高め、また教員とのコミュニケーションを通して(強いプレッシャーにならない程度に)各自が負う責任を自覚できるように導いた。

**教室空間の特徴**

パソコン教室を使用。設備は、受講生が使うパソコンが 60 台(向かい合わせの 3 列配置)。受講生用のパソコンの間に別途モニターが配置され、教員が提示する教材などを受講生は随時見ることができる。また、この教材はプロジェクターにより教壇横のスクリーンに投影される。(授業風景写真参照)

今回は使用しなかったが、DVD を受講生用モニターおよびスクリーンに映すことは可能であり、授業展開によっては有効に使える。また、プリンターが備えられているので、教員、受講生ともに必要に応じて授業時間中に資料等をプリントアウトして配布できる。

座席は特に指定しなかったが、中央列前から順に座り、各自の指定席のようになった。教室定員半分程度の受講生であったが、それなりに密な授業空間を維持できた。

**特定の回の授業の流れ・時間配分**

1) 模擬授業であるので、各受講生が授業課題を決めるまでの最初の 4 回は、古代から現代に至る大まかな西洋史の流れを、各時代の特徴がわかるように解説。その間に、年表テストなどにより各自が自分の世界史知識を確認するとともに、それぞれに課題を選択。

2) 第 5 回目の授業から模擬授業開始。各回 2 名もしくは 3 名で、授業計画書が不十分な場合は、模擬授業実施を認められない。一人あたり 25 分程度。模擬授業の進め方は、  
1. 授業開始前に、生徒役の受講生は自分の座席のパソコンからシラバスオンライン※にアクセスして、模擬授業教師(以下、教師)の作成した授業計画書をモニターに表示して、授業内容をあらかじめ確認する。

2. 教師は、教員用パソコンから資料などを生徒用モニターおよびプロジェクターを介してスクリーンに提示。
3. 教師は授業開始の挨拶のあと(=きちんと生徒に挨拶を返させるよう指導)、教科書および授業計画書に沿って授業を進める。その際、声が小さいとか板書の字が見にくいなどの時は適宜教員が注意するが、授業内容そのものについての指摘は、明らかな間違いでない限り極力授業が終わるまで待つ。時に生徒側から板書を消すのが早いとかの注文も出る。
4. 授業のまとめまで終わった後、生徒からの質問を受ける。その際、教師が答えられない問いなどについては、その場で生徒役を含めて全員がパソコンで事項検索をして、問題解決を試みる。

課題名	マルタ会談 (一斉統一マルタ会談)	教材等
講義	マルタ会談とは第二次世界大戦直前、ドイツに連合したソ連軍とアメリカ海軍の艦隊との間で開かれた会談である。	
準備	①マルタ会談について(1) ・1941年2月4～11日にクレタや単島のマルタ空軍で行われた アムステルダム、イギリス、ソ連による首脳会談 ・マルタ空軍の戦況 ・艦隊連合の投票形式について ②マルタ会談について(2) ・会談の経緯 1. 艦隊連合の候補みに関する利害関係の補 2. 艦隊に勝つための取組み	
講義	③海戦について ・自衛隊艦隊の対面 ・英海軍艦隊の対面 ・ドイツの空軍攻撃 ・ベルリン封鎖 ・開戦後の軍事情勢の拡大	
準備	④海戦が歴史をどう変えたか ・ヨーロッパの形勢 ・中東での影響 ・独逸戦争、イロリンシヤ戦争 ・ベトナム戦争 ・アジア諸国の領土紛争 ・キューバ危機	
講義	⑤マルタ会談 ・ソ連の意思 ・海軍の戦況	
まとめ	第二次世界大戦後のある程度からアムステルダム、イギリス、ソ連による争いが、世界史の重要な出来事である。会談はマルタ会談で開始し、世界全体が「民主化・自由化」へと動き出すきっかけとなった。	

図 1 授業計画書 サンプル

5. 教師が最後の挨拶をし、生徒が拍手で授業を終えた後、教員が授業内容について補足の説明などをおこなう。
6. 最後に生徒役の受講生は模擬授業の内容に関する質問を必ず一つ以上、および授業の批評や感想を、教師は自分の授業の振り返りを所定の書式に入力した後、そのファイルを教員にメール添付で送る。教員は、毎回送られるそのファイルを見て自分自身の授業の進め方を検証し、改善が必要なところや受講生が抱えている疑問点などに対応する。

※シラバスオンラインについては、次項目 11 図 2 参照

この授業では、本学独自の「シラバスオンライン」を活用している(図 2 参照)

「シラバスオンライン」は講義要項を電子化したものである。教員は毎回の授業計画を予習課題などとともに、授業の進行に応じて紙ベースの講義要項の内容を修正しながら入力して受講生に伝える。また、授業終了後は直ちに実際におこなった授業内容を記録し、授業中に配布した資料などをアップロードする。そして受講生は、必要に応じて資料などを各自ダウンロードし、予習や復習をおこなうという仕組みになっている。

通常は教員側からの情報や課題提示の手段として使われるが、この授業では受講生が作成した授業計画書を UP することで、学生は自分の授業計画書が他の受講生に参照されるという緊張感を覚え、それが自分も頑張らなければという励みにもなっているようである。

No.	内容	授業計画	授業記録
1	0412(金)	1. 講義の科目に関する説明など 2. 世界史の基礎知識の確認 3. 講義の目的と到達目標について 4. 今後の授業計画について	1. 受講生は授業の科目を登録する上で注意書きをよく読んでください。 2. 授業の内容がリストアップされ、相互確認により世界史の基礎知識を各自確認した。 3. 近代、中世、現代という時代区分が持つ意味について話し、 4. 模擬授業のための課題を各自考えスケジュールなど、今後の授業の進め方を確認。 5. 講義の目的について話し、かつ近代と現代の両者の違いに考えてみる。 6. 受講生は課題提出。 7. 先生は授業計画書 UP
2	0419(金)	1. 世界史教科書配布 2. 模擬授業計画書の検討	1. 授業史上資料および教科書、ネット検索などにより、受講生が各自作成する授業計画書の検討。 2. 授業で使う資料のダウンロード方法などの説明 3. 受講生は課題提出 UP
3	0426(金)	1. 模擬授業計画書の検討と修正決定 2. 模擬授業計画書を授業計画として作成する準備	1. 本人の授業計画書を作成。 2. 授業計画書の作成について確認。 3. 本人の課題の進捗を記入した資料をもとに授業計画書の作成の進捗を確認。 4. 模擬授業の今後の実施スケジュールを確認、最終授業での授業の進め方について話し、かつ近代と現代の両者の違いに考えてみる。 5. 受講生は課題提出 UP
4	0510(金)	1. 模擬授業の内容を調べて授業を作成する作業 2. 最初の担当者の授業計画書の最終確認	1. 各自の模擬授業計画の内容を修正、準備、アップロードなどについて、担当の先生から話し、各自の授業計画書の作成を確認。単に話すだけでなく、わからない点や疑問点を先生に確認し、最終的に各自の授業計画書の作成を確認。 2. 授業計画書の作成を確認し、最終的に各自の授業計画書の作成を確認。 3. 受講生は課題提出、先生は授業計画書 UP
5	0517(金)	1. 模擬授業開始予定 2. 近代ヨーロッパの世界 3. 古代オリエントの世界	1. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 2. 授業の進め方を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 3. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 4. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 5. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 6. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 7. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 8. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 9. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 10. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 11. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 12. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 13. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 14. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 15. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 16. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 17. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 18. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 19. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 20. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 21. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 22. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 23. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 24. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 25. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 26. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 27. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 28. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 29. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 30. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 31. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 32. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 33. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 34. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 35. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 36. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 37. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 38. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 39. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 40. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 41. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 42. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 43. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 44. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 45. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 46. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 47. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 48. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 49. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 50. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 51. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 52. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 53. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 54. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 55. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 56. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 57. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 58. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 59. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 60. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 61. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 62. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 63. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 64. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 65. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 66. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 67. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 68. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 69. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 70. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 71. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 72. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 73. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 74. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 75. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 76. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 77. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 78. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 79. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 80. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 81. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 82. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 83. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 84. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 85. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 86. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 87. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 88. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 89. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 90. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 91. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 92. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 93. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 94. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 95. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 96. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 97. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 98. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 99. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。 100. 授業計画書の作成を確認し、各自の授業計画書の作成を確認。

図 2 シラバスオンライン (部分抜粋)

授業で特に使用している  
ツールとその活用法

学 習 成 果  
(学生は何ができるようになったのか)

- 受講生が各自の課題に沿って授業計画書を作成し、実際に教壇に立って教師として模擬授業をおこない、生徒役の受講生から質問や批評を受けるという、1 年生にとってはかなり厳しい授業内容ではあるが、
- 1) 付け焼き刃的な準備ではきちんとした説明ができない。なによりも十分かつ実践的な予習(自学自習)が必要であることを体験し、
  - 2) 自分の模擬授業が他者から批評され、逆に他者の模擬授業を評価するという両方の立場を経験することで、自分の立ち位置を客観的に考える＝自他を自覚するようになり、
  - 3) 教壇で時に話す順序を間違えてしばし沈黙し、時に生徒から質問を受けて立ち往生し、あるいは教員に基礎的知識の不足を指摘されて落ち込むことで、知識を身につけるとはどういうことかを体験し、
  - 4) 他の受講生も一所懸命がんばっていることに刺激を受け、適度な競争意識に駆り立てられ、進んで課題準備に取り組むようになった(課題解決能力が向上した)ことで、

大学本来の《学び》の在り方を少なからず身をもって知ることができたのではないかと考える。特に、通常のレポート作成・プレゼンテーションとは異なり、模擬授業は、生徒を自分に集中させ、生徒への視線を保ち、そのうえで授業内容が理解できているかを具体的に確認するという、トータルなコミュニケーション能力が求められる。その点を少しでも理解して、将来教師になろうとする意志をさらに強くしてくれることを期待したい。

**学習成果の評価・測定の方法**

基本的には、1)模擬授業計画書作成への取り組み、2)模擬授業の2点で考查するが、模擬授業の出来そのものは評価対象としない。あくまでも将来教師となるという目標に向かって自覚を持って模擬授業に取り組んだ成果が具体的に見られれば、基準点に達していると評価する(要卒科目ではないので)。細かい評点は、板書の適否、生徒への対応などの評価項目により増減する。

**本科目についての学生からの評価**

最終授業終了後の感想等

- 1)断片的な知識をつなぐだけでは出来事の本質が見えない。特に歴史においては、前後の出来事を含めて全体の流れを把握することが大切であることに気づかされた。
- 2)自分が調べた内容に責任を持たなければならない  
(模擬授業時に自分が作成した授業メモの漢字が読めなかったことの反省?)
- 3)人に教えることは難しい、でも楽しいということがわかった。
- 4)準備は大変だったが、改めて教師になりたいと思った。
- 5)人の授業を見て、自分の足りないところがよくわかった。

**学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)**

- 1)教員といえども、そして自分の専門領域であっても、すべてに通じているわけではない。そのことを自覚したうえで、学生生とともに学ぶことが大事であり、それがいわゆる双方向授業の基本だと考えている。
- 2)模擬授業計画書のチェックを受講生と顔をつきあわせながらおこなっていると、普段では見えない個性・特性に気づいてハッとすることがある。そうした発見も、(教員側への)教育効果の一つと考えている。
- 3)授業計画書のチェックにより課題に対する受講生の理解が深まり、顔が明るくなる。また模擬授業を終えた後の疲れた顔と同時に、多かれ少なかれ達成感いっぱいという顔を見るのは教師冥利に尽きる。
- 4)最近の各種調査で、今の学生は実習・演習よりは聞くだけの普通の講義の方を好むという結果が報告されているが、教員が学生一人ひとりと向き合う姿勢を見せなければ、この傾向は強くなるばかりではないだろうか。

**授業風景**  
(写真: : ない場合は省略可)



← 授業をしているのは受講生  
(板書するのは大変!)

●教職課程・教科に関する科目●独自のシラバスオンラインを活用した模擬授業

**その他の特記事項**

この授業は、本学独自のシラバスオンラインを利用して学生の自学自習を促し、教員がその学習成果を授業時間外にチェックすることで個々の学生とコミュニケーションを図るといふ、特異なスタイルであるかもしれない。しかしながら、学生一人ひとりと真摯に向き合うことが教育の原点であるとするならば、この授業方法はかなり有効であり、かつ工夫すれば教職科目以外の普通の講義においても実践できるのではないかと考えている。

# 検査実習、評価実習

## 国際医療福祉大学

保健医療学部理学療法学科

下井俊典

### 科目の位置づけ

本校理学療法学科の学年毎の学習目標および実習内容は図1の通りである。講義「検査実習」は2年生が対象の講義で、学外施設実習である検査実習を中心に理学療法検査・測定を選択・実施する過程を学ぶ。講義「評価実習」は3年生が対象の講義で、やはり学外施設実習である評価実習を中心に理学療法評価による対象者の問題点抽出の過程を学ぶ。両カリキュラムは同学科のゼミ別に2・3年生合同（一部4年生も参加）で、週2コマ連続で実施されている。

	主な年度目標	実習内容
1年生	基礎科目	見学実習 (3日間)
2年生	理学療法検査・ 測定の技術と知識	検査・測定実習 (2週間)
3年生	専門科目 理学療法評価技術と知識	評価実習(3週間)
4年生	理学療法の実践、卒業研究	総合臨床実習 (6週間×2回)

図1 学年毎の学習目標と実習内容

### 受講（登録）学生数

2・3年生各10名、合計20名

### 科目の到達目標

各学年別に以下の到達目標を設定している。

2・3年生

1. 適切な理学療法検査・測定を選択し、正確に実施できる。
2. 科目別の講義体系で学んだことを臨床推論過程として適切に反映、応用できる。
3. 適切な医療面接やコミュニケーションがとれる。(情意領域)が挙げられる。

3・4年生

1. 模擬患者経験を通じていわゆる「患者目線」を知る。
2. 対象学年に教えることによる学びと、自己成長の確認。
3. 対象学年に対する4年生のリフレクションを聞くことによる学び。

**教育方法の特徴**

上記を到達目標として本カリキュラムでは、協同学習（cooperative learning）形式による講義と、学生を模擬患者とした「学生模擬患者演習」を取り入れている。（図2）

前期・後期は協同学習（cooperative learning）形式による講義により臨床推論過程に関して学習する。協同学習を導入した理由として次の3点が挙げられる

- 1) 高等教育における能動的な学習の重要性
- 2) 学習者全員が理学療法士という共通の目的を有しているため、「共に活動する」という協同学習の効果が期待しやすい

3) 理学療法という臨床活動自体が、対象者と理学療法士との共同作業である。

このため、理学療法士のコンピテンスにおけるコミュニケーション、情緒、価値観の獲得に関して、協同学習の効果がより期待できる。

協同学習形式の座学で得た臨床推論過程を実践力に発展させるため、学生模擬患者演習を実施している。学生模擬患者演習とは、上級生（3・4年生）が模擬患者となり、対象学年（2・3年生）が模擬患者に対して理学療法検査・測定を実施し、上級生が対象学年の演習内容を評価する演習である。対象学年の知識・技術の確認・獲得およびコミュニケーション能力の向上という学習目標に加え、上級生についても「教える」ことによる教育効果が期待できる。学生模擬患者演習は年度内に2度実施し、初回は夏期休暇期間を自主学習期間として、同休暇期間明けの10月に実施する。2回目は初回のリフレクション内容を反映することを目的として12月に実施する。

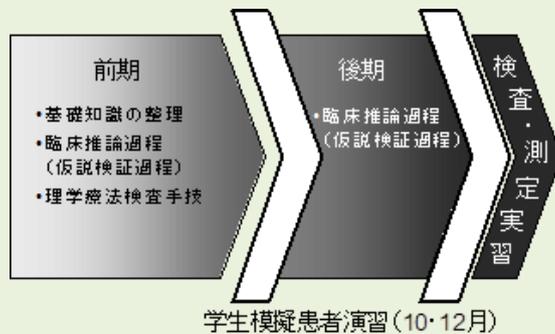


図2 学生 SP 演習を中心とした1年間のコース・カリキュラム

**教室空間の特徴**

協同学習はグループワークに対応するため、可動式の机と椅子が設置されている一般的な小教室を使用する。学生模擬患者演習は治療用ベッドのある演習室を使用する。

**特定の回の授業の流れ・時間配分**

学生模擬患者演習は疾患別の2症例についてそれぞれ40分間の検査・測定の後、3・4年生から40分間のリフレクションを受ける。年度内に2度実施する演習のうち2回目の演習に関しては演習内容をビデオ撮影し、そのビデオを用いて後日教員から模擬患者への対応内容（情意領域）についてのリフレクションを行う。

**授業で特に使用しているツールとその活用法**

学生自身が模擬患者となる学生模擬患者演習を実施している。

●専門教育科目・専門●学年をまたいだ協同実習・模擬患者演習

**学 習 成 果**  
(学生は何ができるようになったのか)

2・3年生は年度内2回の演習を通じて学生は双方向型コミュニケーションや仮説検証過程に基づいた理学療法検査・測定を学習し、実践しようとしていることが明らかとなった。対して3・4年生は、学生自身がSPを体験することで、理学療法検査が検者の一方向的な関わりでなく、患者・検者の相互作用によるものであることや、評価者となることで第三者的に下級生を評価するだけでなく、下級生の行動を通じて自己の今後の行動についてリフレクションしていることが明らかとなった。

**学習成果の評価・測定の方法**

教育効果に関しては、まず同演習後に配布したリフレクション・シートを後日回収し、各項目別に一文に1つの意味が含まれるよう学生の意見を抽出、KJ法を用いて学生の学びを分析した。

**本科目についての学生からの評価**

上記学習効果に加え、当カリキュラムでの学習内容が各学年での実習で「役に立った」あるいは「臨床実習で使えた」という評価を得ている。

**学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)**

専門職に求められる能力(コンピテンス)は知識、技術のみならず考えかた(臨床推論)、態度やモラル、感情を含めた包括的なものでなければならない。神経内科学、運動系理学療法学といった専門診療の学問体系である従来の主題中心型カリキュラムに基づく座学中心のカリキュラムでは同能力の獲得には不十分と考えている。この問題に対して、

1. それまで主題中心型カリキュラムで学んできた知識を横断的に統合する。
2. 協同学習により考えかた(臨床推論過程)を学ぶ。
3. 学生模擬患者演習により態度、モラル、感情などの実践をシュミレーションする。

上記3点が必要と考え、当カリキュラムで実践している。

**授 業 風 景**



図3 学生 SP 演習の様子

**その他の特記事項**

本コース・カリキュラムは次の課題も有している。

1. 同演習の効果判定(授業評価)の難しさ
2. 担当教員のゼミで実施しているカリキュラムで全学科のカリキュラムではない

# 臨床教育学入門

## 札幌大学

地域共創学群

荒木 奈美

### 科目の位置づけ

本科目は地域共創学群に入学したばかりの1年生が、学位の基盤となる幅広い教養を総合的に学ぶ「基盤教育科目」内の「専攻入門」（春学期）に属する科目である。「専攻入門」は、主専攻を選択する際の指針となる科目群である。本科目は、担当教員が専門として教える日本語・日本文化専攻への入門として開講されている。また、本学は正課教育に課外学修を組み合わせたアクションプログラムを全学的に展開しているが、このうち「教職アクションプログラム」および「キャリアデザインプログラム」に参加する学生の「自ら考え、自ら学ぼうとする学修意欲と主体性を育む」基本姿勢を開発することも、本科目の重要な目的となっている。

### 受講（登録）学生数

199名

### 科目の到達目標

- ・ 授業参加者がこれまで受けてきた学校および家庭での教育体験を反省的に振り返り、大学での学びを経て「将来どのような教師・親・大人になりたいか」という問いに対し、自らの考えを持つ。
- ・ 「答えが一つではない」問題に対して目を開き、「自分の頭を使って自分だけの答えを導く」ことの喜びに気づくことを通して、高等学校までに受けてきた教育と大学での学修との違いに気づき、主体的に学ぶ意欲を育む。

### 教育方法の特徴

- ・ 大教室の中でも「個に応じた学び」の空間を提供するために、毎回授業のまとめとしてレポートを課し、教員が一括管理。授業中盤において学生が自らまとめたレポートを返却し、その記述内容を批判的に振り返ることのできる機会を設ける。
- ・ 手書きレポートには学生一人ひとりのその日の心の状態がはっきりと表れている。毎週のレポートを並べてみると、学生一人ひとりがそれに気づく。やる気のない日は乱雑な字であったり、どうしても書きたい気持ちが収まらず、レポート用紙の裏にまで自身の思いを書き込む答案もある。そのような「温度」を感じ取れるのは、機械文字にはあらわれない手書きの持つよさと考えている。
- ・ 授業で出てきた意見をいくつかピックアップし、翌週の授業で紹介することを重視している。この内容によって参加者は、自分以外の参加者がどのような意見を持ち、それが自分とはどのように違うのかということについて実感を持つことができる。さらにそれら他の参加者の意見を受けて、自らが考えたこともまた文章に書き留めることを促す。これにより自己と他者との考えの違いを反省的に受け止める習慣がつく。

●講義●手書きを重視したレポートを課す授業

- ・ 学生が気負わず自己開示できるよう、教授者自身がまずは受容的な姿勢を持つ。学生からの要望に柔軟に対応し、改善可能な事柄には積極的に取り組む。一方で同時に学修のテーマとなっている「教師」「大人」の一人でもある存在として、学生の意見に納得できないと考えることには真摯に向き合い、対話を惜しまない。結果として逸脱や反発、それに伴う課題も多々出てくるが、「教師も人間であり、失敗も間違いもする存在」であることを継続して見せる。
- ・ 授業のまとめとして、最後の講義回において「どんな教師・大人・親になりたいか」というタイトルでレポートを作成する。学生はこれまで自らが書きためたレポートを手がかりとして、自分自身の考えを再構築することになる。これまでのレポートで、自らの活動や他者の意見をを通して考えたことを反省的に振り返る機会をくぐり抜けており、必然的に「思いつき」や「感情論」に終わらない、自己を相対化し得た記述となるものと考えている。

教室空間の特徴

- ・ 大教室での一斉授業である。自由座席を基本とするが、活動内容に応じて座席を指定した。座席指定を行ったのは、4人1組で行ったグループ討論の回（2回）である。2回目の座席指定は、前回と並び方を変えた。
- ・ 自由座席と2度の指定座席を組み合わせることにより、教室に「動的空間」が生まれたと考えている。自由座席にするとどうしても積極的に学びたい学生が前方に座り、そうでない学生が後方に座る傾向があるが、そのような「分断」を回避することは、学生達がこれまでの教育体験を振り返るとい授業内容に切り込む一つの問題提起にもなったと考えている。
- ・ グループ討論では、およそ50組のグループが同時に討議を行うことになった。それぞれのグループで出た意見を効率よく紹介するためにLINEでグループをつなぎ、教室全体をまとめるという取り組みを行った（詳細下記）。

特定の回の授業の流れ・  
時間配分

教師と生徒の「距離感」について考える（グループ討議）

（導入・15分）

座席の確認、教授者による問題提起

「前回出た、「教師と生徒の間には『距離感』が大切」という意見が気になりました。「距離感が大切」という意見にも、その距離感にはさまざまな意見があるようです。そこで教師と生徒の間ではどのような距離が必要だとみなさんは考えますか。グループで話し合い、意見をまとめてください。話し合った結果は、LINEのグループに代表者が投稿してください。投稿内容はプロジェクターを通じてみなさんに公開します。」

（活動・60分）

グループによる話し合い、LINEへの投稿、投稿の紹介（プロジェクターを使用）、投稿内容を受けての再討議

（まとめ・15分）

それぞれのプリントに最終的な自分の考えを書き込んで提出

●講義●手書きを重視したレポートを課す授業

授業で特に使用している  
ツールとその活用法

- ・ 毎回 800 字程度の自分の考えを書き込むA 4 サイズのレポート用紙  
→1. 前回の振り返り (他の参加者から出た意見を読んで考えたことをまとめる)  
2. 今日の授業を通して考えたこと (授業で扱ったテーマに対する自分の意見をまとめる)
- ・ LINE システム (学生たちが作ったグループをつなぎ、双方向的に意見を交換するしくみとして)  
→授業の中で定めた一つのテーマに従い、4 人 1 組のグループで話し合う。そこで出た意見を、授業時間内に他のグループに公表することで、意見交換を活性化させる狙い。

学 習 成 果  
(学生は何ができるようになったのか)

- ・ 講義の終わりに課したレポートの記述内容から、この授業を通して多くの学生の「主体的に学ぶ意欲」を引き出したと考えている。「もっと社会を知りたいと思った」「自分の頭を使って考えることがこんなに楽しいと知れてよかった」「答えのない問題について考えることの喜びを感じた」などの記述内容からすれば、彼らの身体からわき起こる「もっと自分から学びたい」という欲求を引き出し得たのではないか。
- ・ 自分自身の言動を反省的に振り返ることが自らの意識を開発することに気づいたと考えている。「これまで自分の書いたレポートを振り返って、考えたことを述べよ」と求めた回では、「自分の書いた文章を見て、感情的すぎる自分の言葉に恥ずかしくなった」あるいは「意外と真面目に語っているということがわかった」などという言葉が見えてくる。
- ・ 「この授業で考えたことを出発点として、秋学期以降も考え続けます」などのコメントもあり、大学での今後の学修意欲も育てることができたと考えている。「どんな教師になりたいか」について考えた学生が、入学した本学でその気持ちを更新し続ける出発点となり得たこと。「どんな大人になりたいか」という問いかけに「社会問題に目を開き、未来の子どもたちが少しでも生きやすい世の中作りに貢献したい」という意見をまとめた学生が、この先の学修計画に意欲を持つきっかけとなり得たこと。それらが彼らの内心からの声である限り、担当教員としてはそれこそが最大の学習成果と考える。

学習成果の評価・測定  
の方法

- ・ 毎回課したレポートへの取り組み状況 (A)  
各回の話題提供に対し意欲的に考え自分の意見を出そうとしている (関心・意欲)  
自身の書いたレポートを振り返り、自省的な視点からとらえている (態度・志向性)
- ・ 最終レポートの記述内容(B)  
現代社会における教育事情に対する理解が適切である (知識・理解)  
全体のまとまりも含め、読み手に対し説得力ある論の展開への配慮が感じられる。(技能・表現)  
上記 A・B の総合評価により、大学の評価基準にのっとった評価をつける

## ●講義●手書きを重視したレポートを課す授業

### 本科目についての学生からの 評価

- ・ 「先生の講義は、本当に最初理解することができなくて寝てばかりでした。しかしある時、自分のためにもなるし今後将来に役立つことを言っているんだと思い、そこからしっかり話を聞くようにしました。話を聞いていると、将来親になった時に役立つことばかりでした。私は物事を深く考えるようになりました。先生の授業は私たちが将来生きて行く上で大切なことをたくさん学べて、とても勉強になりました。」
- ・ 「私の考え方を直せる・増やせる大事な90分間でした。まだまだこの分野を学びたいと思いました。後期の授業ではこれに似ている講義を見つけて、もっともっと成長したいです。がんばります。」
- ・ 「4ヶ月の間で自分の考え方がこんなに変わるとは思いませんでした。そして学習というよりも人の心を学んでいける講義だったので、他の講義と違い濃い90分だったと思います。」
- ・ 「この講義を受けて、親のことや自分のことを深く考えました。自分の中でいろいろと考えが変わったと思います。この講義で学んだことは、これからの人生で役に立つことだと思いました。」
- ・ 「この臨床教育学は他の講義と何か違っていて、向上心がなぜか湧きました。自分の将来の夢に対して、また将来生きて行く上で欠かすことのできないことをたくさん学びました。受けて良かったと思える数少ない講義の一つでした。」
- ・ 「15週×90分=1350分=22.5時間、ありがとうございました。この授業のおかげで、実際よくわかっていなかった“教師としての心構え”が少しわかった気がします。残るわからない部分は、これからの学生生活のなかで見つけられたらなと思っています。」
- ・ 「この授業を受けて頭がおかしくなりそうでした。今までの自分の生き方は間違っていたのか？などを授業中に考えてしまい、複雑な気分になりました。けどとてもいい授業だったことは確かでした。」
- ・ 「たくさんの方が言っていました、初めはただ何となく選びました。そして授業の前半の方はただ座って、書いて、時間が過ぎるのを待っていました。ですが後半にはそれまでめんどくさいと感じていたことを真剣に考えている自分がいました。楽しい、楽しくないで表すよりは、ためになった、ならなかったが合っている授業だと感じました。僕自身はためになりました。」

### 学生の学習のあり方や教授法の 果たす意味等に関する、担 当者の基本的な考え方（教育 哲学）

- ・ 大学生の主体的な学習を促すとは、学生自身の内面に「もっと知りたい」「もっと学びたい」という内発的な感情がわき起こってはじめて可能になるものと考えている。教授者がどんなに有効な「自主的に学ぶ学修環境」を整えても、「何のための学修か」もわからないままでは、いつまでたっても「やらされている＝主体的でない」学習である。授業で出会った学生の中に、学修を通して「もっと社会のことが知りたくなった」「もっと『大人』の考えを持ちたいと思った」などという気持ちが起こり、それが日常生活の学習意欲へと結びついたときにはじめて、筆者自身は「教授者」としての役割を果たしたと考える。

## ●講義●手書きを重視したレポートを課す授業

- 上記のような学生の「学ぶ意欲」を引き出すためには、個々と丁寧に関わることで直接的な働きかけをすることはもちろん大切であるが、見方を変えればむしろ大規模の講義形式で行われる授業での関わりの方が有効という側面もあると考えている。第一に、学修者が他の参加者との関わりの中で、他者の考えと出会い、自己の考えを相対化できる機会に恵まれる。第二に、教授者が行う個々の学生への直接的な働きかけには、えてして強制力が働いてしまう。よかれと思って発した助言が、学生には「押しつけ」と受け取られてしまうこともあるだろう。一方で大講義の中で不特定多数に向けて発信する言葉は、それを受け取るか否かは学修者個人の意志にかかるものとなる。
- 手書きレポートでのやりとり、大講義の中でのグループディスカッション、また教授者自身の「人間性」を開示することは、ざらざらした手触りのある人間関係を極力避けようとする現代の若者への一つの問題提起である。今回の授業で話題となった「教師と生徒の距離感」の背景には、煩わしい人間関係は出来る限り避けるのがよいと考える、一部の通念が横たわっていると考察している。しかしながらそのような面倒な人間関係は、生きている以上避けられないものであるし、これから社会へと出て行く大学生が正面から対峙しなければならない問題であるとも考えている。大学の講義という作られた（虚構の）枠組みの中で教育にまつわる理想について語り合うという特殊な空間において、時に人間の「感情」をさらけ出す仕掛けを作ること、人間が生きるとは、ざらざらした感情をも受け入れて生きることであると気づかせたいという考えもあった。

# 創造・発見、社会貢献活動

## 静岡理工科大学

理工学部，総合情報学部

関山 秀雄（代表）

<b>科目の位置づけ</b>	“やらまいか”という言葉は、遠州地方の方言で、「やってやろう」という意味のチャレンジ精神を表す言葉としてよく使われる。本学では、この“やらまいか”精神にもとづき、日頃の授業ではできない新しいことを体験し、また未知の事柄に自らチャレンジする教育プログラム“やらまいか教育プログラム”を設定した。この中核をなす科目が、「創造・発見」、「社会貢献活動」であり、1年生全員に対する選択必修科目として、1年次後期に開講する。これらの科目により、学生の積極性、自立性、創意工夫の姿勢や開拓精神、協調性を養う。
<b>受講（登録）学生数</b>	1年生全員 380名（内訳：「創造・発見」354名、「社会貢献活動」26名）
<b>科目の到達目標</b>	「創造・発見」と「社会貢献活動」では、ともに下記の3点を到達目標とする。 <ul style="list-style-type: none"><li>● 積極的かつ自発的に計画を立案でき、それを遂行する能力を身につける。</li><li>● 新しい独自の発想を生み出し、それを授業の中に生かす。</li><li>● グループの構成メンバーと協調しながら、活動を遂行できる。</li></ul> これに加えて、「創造・発見」では、 <ul style="list-style-type: none"><li>● 必要に応じて、学問的な解析、分析ができるようになる。</li></ul> また、「社会貢献活動」では、 <ul style="list-style-type: none"><li>● 地域の問題点やボランティア活動に関する問題点を見だし、社会の中での自分の役割について考え、世の中での社会貢献活動の意義について自分自身の持つことにより、自主的に活動できるようになる。</li></ul> ことが、それぞれ個別の到達目標として加わる。
<b>教育方法の特徴</b>	「創造・発見」では、16テーマを用意した。これらは、大きく“ものづくり”と“テーマ研究（調査研究または実験的な内容）”に分けることができる。更に、細かくは、機械系5テーマ（「低温度差スターリングエンジンの開発」、「新エネルギーで音楽をしよう」、「コンピュータを使った解析」、「ロボットを作ってみよう」、「自動車の構造を理解する」）、電気電子系6テーマ（「電動自転車の製作」、「はじめての耐環境ICとCAD」、「自作回路で駆動するセニアカー」、「ブラシレスモータの組立と動作」、「電動レーシングカートを作る」、「電気回路シミュレータを用いたパワーエレクトロニクス基礎」）、物質生命系4テーマ（「コンピュータ上で分子を作り化学反応のしくみを解明しよう」、「”さびる”を科学する」、「身近なもので科学実験」、「バイオエタノールをつくろう」）、情報系3テーマ（「ワンチップマイコン超入門」、「電子工作とプログラミング」、「健康について考える」）である。各テーマの指導者は、学内教員が多いが、テーマによっては、その学外の専門家（企業の技術職の経験者等）に依頼することもある。また、「社会貢献活動」では、4テーマ（「中学校・高等学校 部活動支援ボランティア」、「学

●選択必修●ものづくりとテーマ研究、課外活動

校教育アシスタント」,「袋井市放課後子ども教室アシスタント」,「自然環境保全と地域づくり」)あり,これらは,小,中,高等学校での授業やクラブ活動,課外活動等のアシスタント,さらに地域の環境保全に関するものである。

学生はこれらのテーマから自分が希望するテーマを一つ選んで履修するが,選択にあたっては,学生が所属する学科の専門分野以外の領域のテーマをできるだけ選択するように促した。これは,「創造・発見」と「社会貢献活動」の目的が,“日頃の授業ではできない新しいことを体験し,また未知の事柄に自らチャレンジする”ことにあるからである。1テーマあたり,学生10名程度で1グループをつくり,グループ単位で活動するようにした。一つの学生のグループには,異なる学科の学生が混在するようにし,学科を越えた学生どうしの交流が持てる場とした。授業の形態は,できるだけ学生が主体的に活動できるように配慮した。

教室空間の特徴

各テーマのより実施場所はさまざまである。「創造・発見」の中の“ものづくり”のテーマは,これまでは,本学の「夢創造ハウス」(学生の創作活動を行う小施設)で行っていたが,今年度,新たに「やらないか創造工学センター」(3階建て)が竣工し,ものづくりの実習特に,機械系,電気電子系のテーマがほとんどこの施設で実施できるようになった。この他の,物質生命系や情報系のテーマは,教員の研究実験室,学内の演習室,「やらないか創造工学センター」等で行われる。

「社会貢献活動」は,実施場所は基本的に学外で,地域の小中学校や高等学校,地域の施設等で,学生は地域の人達の指導,協力のもとで,自主的に活動する。

(例:「創造・発見」物質生命系のテーマ:コンピュータ上で分子を作り,化学反応のしくみを解明しよう)受講生は1コマあたり約10名であり,3~4人のグループを3つ作り,グループ単位で活動する。

特定の回の授業の流れ・  
時間配分

1. 序論:原子とは何か,分子とは何か,等,化学の基本的な事柄の紹介(講義)
2. 電子の役割:原子,分子の中の電子の役割についての学習(講義)
3. 分子の立体構造:分子の立体構造の描画する(実習)
4. 分子の立体構造:さまざまな分子の立体構造の描画(実習)
5. 分子の立体構造:分子の立体構造を決めている原因では?(講義+演習)
6. さまざまな分子のモデリング:各人が計画を立て,興味ある分子の分子モデリングを行う(実習)
7. さまざまな分子のモデリング:各人が計画を立て,生体内で重要なアミノ酸やタンパク質の分子モデリングを行う(実習)
8. 化学におけるコンピュータシミュレーション:コンピュータによる化学実験とは?(講義)
9. 化学反応のしくみ:化学反応の過程に関する基本的事項の学習(講義+演習)
10. 化学反応のシミュレーション:化学反応のシミュレーションに必要なIRCに関する学習(講義)
11. 化学反応のシミュレーション:各人が自分自身で必要なデータを作成し,Diels-Alder反応のシミュレーションの行う(実習)
12. 化学反応のシミュレーション:化学反応アニメーションを作成し,反応が

●選択必修●ものづくりとテーマ研究、課外活動

	<p>起こるか理由を考察する（講義＋演習）</p> <p>13.報告会の準備とレポートの指導：3～4人のグループを3つ作り，各グループでポスターを作成する。また，各人が作成するレポートの指導を行う</p> <p>14.発表練習：報告会での発表練習を行う</p> <p>15. 報告会</p>
<p>授業で特に使用している ツールとその活用法</p>	<p>各テーマ毎に分かれての授業であり，使うツールはそのテーマにより，さまざまである。</p> <p>例えば，10 特定の回の授業の流れ・時間配分の「創造・発見」物質生命系のテーマ：コンピュータ上で分子を作り，化学反応のしくみを解明しよう）では，基本的には Windows のパソコンを使い，3次元分子描画ソフト Chem3D を使うが，ソフトウェアの使用にあたっては，さまざまな化学的知識が必要なため，その都度，講義，演習の形で与えて，学生が自主的にできるようにしている。また，学生達が自ら化学的に興味有る分子を選び，その立体構造等を学生自らがコンピュータを使って探る実習を個人個人に課している。また，最後は，3グループで同時に報告会のポスターを作らせ競わせるようにした。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>「創造・発見」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ “ものづくり”で設計する楽しさやさまざまな工夫をする面白さを体験することにより，しだいに積極性や自発性が育ってきた。</li> <li>・ 自分の所属学科の分野とは，異なる分野のテーマを体験したことが，かえって新鮮であったように感じており，さまざまなことに興味を持ち，またチャレンジするきっかけとなった。</li> <li>・ プレゼンテーション能力が，授業を始める前に比べて，かなり向上した。</li> <li>・ 日頃，あまり交流のない他学科の学生と協力して活動したことで，協調性が身についた。</li> </ul> <p>「社会貢献活動」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域の人達の中で活動するうちに，学生のコミュニケーション能力や協調性が向上した。</li> <li>・ 活動を通じて，学生の積極性や自発性が向上した。</li> <li>・ 学生達が，地域や学校の諸問題やその中で自分の役割について考えるよいきっかけとなり，活動を通じて，人間的に成長した。</li> </ul>
<p>学習成果の評価・測定 の方法</p>	<p>成績は，履修状況や履修態度 10 点，積極性と自主性 10 点，創意工夫の姿勢と開拓精神 10 点，協調性 10 点，報告書 60 点で計 100 点満点として評価する。評価は，秀：100 点～90 点，優：89 点～80 点，良：79 点～65 点，可：64 点～50 点，不可：49 点以下 である。また，学生には履修状況や履修態度，積極性と自主性，創意工夫の姿勢と開拓精神，協調性、プレゼンテーション能力について，授業開始前と授業終了時でどの程度進歩があったと感じているか，自己評価をしてもらっている。</p>
<p>本科目についての学生</p>	<p>学生の自己評価から，履修状況や履修態度，履修状況や履修態度，創意工夫の姿勢と開拓精神，協調性，プレゼンテーション能力のいずれも向上が見られたと感</p>

●選択必修●ものづくりとテーマ研究、課外活動

からの評価

じている。また、さらに、「創造・発見」では、“実際にものづくりを体験できること”，“他学科の人達も含めてグループで活動を体験したこと”，“自分で考えたり計画をたてたりすること”，“レポート作成や発表のプレゼンテーション資料の作成を初めて体験したこと”，“知らなかった分野（他学科の分野）に関することを勉強し、新たな面白さを体験できたこと”“に関する評価が高かった。また、「社会貢献活動」では，“小中学生との交流を通じて、学校教育を客観的にみることができたこと”，“さまざまな人達とのコミュニケーションができたこと”，“相手と同じ目線で対話することの大切さを学べたこと”，“活動が人のためだけでなく、自分のためにもなったこと”，“積極的に他のボランティア活動に参加したいという動機付けにもなった”等の評価が見られた。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

本学の“やらまいかプログラム”は、学生の意欲向上、自主性等の向上、人格の育成、自分の視野を広げて大学生として立派に成長して欲しいことを願って設けたプログラムである。1年生後期に「創造・発見」や「社会貢献活動」を履修することによって、日頃の授業にはないさまざまな体験をさせ、学生の興味、関心を広げ、勉学意欲等の向上をはかる。さらに、学年が進む中で、理工系の基礎科目や学科固有の専門科目の中で、自ら課題を見つけ、分析し、それを解決できること能力を養うPBL(Project-Based Learning)教育につなげていく。最終段階として、4年生の卒業研究で総仕上げを行い、それぞれの分野の専門家として、バランスのとれた研究者、技術者を育成することを狙っている。

授業風景



「創造・発見」で各テーマの大学祭における“ものづくり”実物展示

その他の特記事項

「創造・発見」と「社会貢献活動」は、2004年度からスタートした2、3年生対象の選択科目（科目名：「創造・発見」，「テーマ研究」，「ボランティア活動」）であった。受講者は全学生の1/3程度であったが、受講してみてよかった等、受講生の評判がよく、学生の自主性、積極性、人間性向上等に効果があることが、学内の指導者のみならず学外の指導者からもよせられたことから、2012年度からは、科目名「創造・発見」と「社会貢献活動」として、1年生の後期の選択必修科目となった。

# 入門ゼミナール

## 十文字学園女子大学

人間生活学部メディアコミュニケーション学科  
安達一寿／飯田路佳／向後朋美／田中東子

### 科目の位置づけ

1年次前期必修科目の全学共通科目であるが、授業は学科単位で実施している。本科目は次の2つの側面から大学での学びに入るための橋渡しをすることを目的としている。

1つめは、現在の自分の状況を把握したうえで将来なりたい自分について自らの言葉で表現し、他者に伝えることを通して、自己を再発見し、将来のキャリア形成の土台を作ること、すなわち、スチューデント・ソーシャルスキル身につけることである。

2つめは、情報を収集する、読み解く、分析する、論理的な文章で他者に伝えるという技術、すなわち、2年次以降の専門科目で必要となってくるスタディースキルを身につけることである。

当然のことながら、この2つの側面は相互に関連し、融合し合いながら、コミュニケーション能力と自ら探究する「能動型の学習姿勢」を高めていくことになる。

### 受講（登録）学生数

100名（1クラスあたり25名）

### 科目の到達目標

- ・大学を理解し大学生活に慣れ、学生同士、先輩とも親しくなり、教職員にも親近感を持つことができる。
- ・アクティブラーニングの方法を理解し、主体的な学びの必要性を理解する。
- ・時間管理や目標設定を通して、自分のキャリア形成についての準備を始める。
- ・講義の聴き方、ノートのととり方、文献や資料の探し方や読み方、ディスカッションの方法、文章での表現方法、発表やコミュニケーション能力等のスタディースキルを身につける。
- ・情報の収集・整理・分析の方法について理解する。
- ・テーマに沿って、ミニレポートを作成することができる

### 教育方法の特徴

- ・授業の1・2回目で、能動的／受動的学習の特徴と理解を深める講義・演習を行い、アクティブラーニングの方法（LiTe、振り返り等）を体得すること。
- ・少人数クラスで、かつグループでの活動（ブレインストーミング、ディスカッション、KJ法等）を毎時間取り入れること。
- ・facebookを利用して、授業の振り返りや授業記録の履歴化を図ること。
- ・ファシリテーターとしてスチューデントアシスタント（上級生）による学習活動の支援を取り入れていること。
- ・PC・インターネットを利用し、すぐに情報の収集や分析・整理等を可能にしていること。
- ・PBL型を試行し、複数の社会的な問題からテーマを選択し、その問題解決を通

●共通科目 初年次ゼミナール●ソーシャルメディアも取り入れた PBL

	<p>して、レポートの書き方や、文献・資料の読み方、情報収集・整理の方法、等を指導していること。</p> <p>(本年のテーマ:原発廃止について、消費税増税について、少子化対策について、ネット選挙運動について)</p>
<b>教室空間の特徴</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・一斉講義(1・2回目)は講義教室で、その他は情報処理演習室(コンピュータ教室)で授業をおこなっている。</li><li>・一人一台のコンピュータ使用はもちろんであるが、椅子が自由に移動できるので、グループワークも比較的やりやすい環境である。</li></ul>
<b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b>	<p>授業内容 自分が取り組むテーマについての情報収集</p> <ol style="list-style-type: none"><li>(1) アイスブレイク(15分)<ul style="list-style-type: none"><li>・この1週間内にメディア等で話題となった、自分自身が気になるニュースや出来事<del>の</del>等をグループ内(4名程度)で発表</li><li>・グループの代表者が、全体に要約して発表</li></ul></li><li>(2) 本日のテーマの説明(10分)<ul style="list-style-type: none"><li>・教員より、4つの課題についての内容説明</li><li>・調査方法の確認(インターネット、文献、新聞等)</li><li>・自分の立場(賛成/反対)を明確にし、それに沿った情報収集</li></ul></li><li>(3) 個人活動(30分)<ul style="list-style-type: none"><li>・各個人で情報収集と整理</li><li>・インターネットだけでなく、必要に応じて図書館等に出向いても可とする</li></ul></li><li>(4) グループでの情報共有(25分)<ul style="list-style-type: none"><li>・調べた結果の概略の報告</li><li>・それぞれの立場・意見の共有</li></ul></li><li>(5) まとめ(10分)<ul style="list-style-type: none"><li>・本で行ったことの振り返り</li><li>・次回の予告</li></ul></li></ol>

●共通科目 初年次ゼミナール●ソーシャルメディアも取り入れた PBL

<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ワークシート 学習活動全体にわたり、毎時間その内容指針となることをワークシートに記入することで、身につけるべきスタディースキルを明確化する</li><li>・コンピュータ 情報の収集・整理・分析、またレポートの作成等すべての活動で利用</li><li>・ホワイトボード、模造紙、付箋紙等 ブレインストーミングやKJ法、グループでの話し合い活動時に利用</li></ul>
<p><b>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・個人が身につけるリテラシーである、ノートテイキング、情報収集（インターネット、図書館）、リーディング、ライティングについて、基本的な方法を身につけることができた</li><li>・グループでのディスカッションやブレインストーミングを通して、グループ活動のメリットやソーシャルスキルを身につけることができた</li><li>・これらの活動を活かしたミニレポートの作成を通して、社会的課題への理解と問題解決の方法について体験ができた</li></ul>
<p><b>学習成果の評価・測定 の方法</b></p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・毎回のワークシートの記述内容</li><li>・最終的な成果物であるミニレポートの内容（予め、形式、作法、書式、内容の評価観点について学生に提示し、学生自身の自己評価と教員の評価を加味）</li><li>・グループ活動での各個人のパフォーマンス（教員、SAの観察）</li></ul>
<p><b>本科目についての学生から の評価</b></p>	<p>授業後の学生による授業評価アンケートで、全体の平均よりも特に高い項目として、以下のものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・総合的な満足度、参加意欲</li><li>・この授業の目的や到達目標の達成度</li><li>・興味や関心を高める</li></ul> <p>自由記述のアンケートを見ても、満足度や達成感が高い授業である。</p>

**学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)**

教育方法としてのアクティブラーニングの実施が求められる中で、その効果的な教育方法や学習者が身につけた能力を客観的に測定・評価することは、大変重要な課題と認識している。個々の授業をきちんと運営することは、もちろん大事なことである。一方で学部や学科の持つカリキュラムが、内容面や方法面、育成すべき能力や学力観等から体系的に構築されている必要性も痛感する。そのために、カリキュラムマップやナンバリング等の取組が求められていることも承知しているが、その方法論において多様な考えが存在し、更なる研究開発が必要であると考え。同時に、学生の評価に関しての標準的な方法についても検討が必要と考える。

また、FDの一環としては、大学教員すべてが大学の質の向上に対する方法に関して一定の理解と、教育技術を身につけることも必要と考えるが、日常の教育研究活動の中でお互いに研鑽に励む雰囲気や土壌の醸成が重要であり、更なる教育改善に対する意識の向上が求められる。

**授業風景**



# ITコミュニケーションと社会

東京電機大学

情報環境学部 情報環境学科

木村 敦

<b>科目の位置づけ</b>	<b>■ 大学学習の「統合」と「応用」</b> 情報環境学部「コミュニケーション工学コース」推奨の専門科目に位置付けられている。4年次推奨であり、これまで大学で得た知識や技術の統合化・応用を図るため問題解決型学習（problem-based learning, PBL）を導入している。
<b>受講（登録）学生数</b>	31名（例年30～40名）
<b>科目の到達目標</b>	<b>■ 「基礎知識」＋「自分だけの武器」の習得</b> 本学部の目標である「心豊かで快適な、そして安心・安全な情報化社会を築いていく人材」の輩出には、高度な技術力に加えて、人間と情報社会の互惠的発展を見据える先進的・創造的な視野の育成が不可欠である。そこで本科目では「ITコミュニケーションと社会」という複雑かつ現在進行形で変化を続ける事象を客観的・多面的に捉え、そこに独自・新規な価値を創造するプロセスを経験することを授業到達目標としている。具体的には講義によりICTと人間行動に関する基礎的知識と多視点的解釈を習得するとともに、PBLを通じて自ら関心あるテーマに関する専門的知識・技能・発想を身につける。 <b>■ 「本学最高の授業」を学生がつくる</b> 本科目のPBLでは、問題解決学習そのものに加え、その学習成果の発表を重視している。自分たちが調査した内容を論理的かつ魅力的に初学者に教えるプロセスを経ることで、学習内容の定着・深化や表現技術向上を図るものである。学生には、これまで様々な授業を受講してきた経験を踏まえて自分たちで「本学最高の授業」をつくってほしいと伝えている。
<b>教育方法の特徴</b>	<b>■ ハイブリッド型PBL</b> 科目内で講義とPBLの両者を行うハイブリッド型を実施している。PBLは利点も多いが学習内容が偏るという欠点もあるため、学期前半に講義を実施してITコミュニケーションに関する基礎知識や客観的視座を習得する。PBLでは初講時に学生および教員が提案したテーマについて、2～3名の班で授業時間内外にテーマの俯瞰・問題の抽出・解決法提案までを行い、その成果を学期後半の成果発表会で発表する。今期は「ICTの問題を解決する」と「ICTで問題を解決する」の2つのアプローチを設定し、前者は「ネット選挙解禁でできることと課題」「無料オンラインゲームのビジネスモデルを再考する」等、後者は「ICTで高齢者の孤立を防ぐ」「災害に挑むICT」等のテーマ設定がなされた。 <b>■ 学生主体の成果発表運営</b> 成果発表会は自主学習内容をまとめて“わかりやく面白い授業”を行うもので、今期は履修者以外も聴講参加できる公聴会形式で実施した。司会や質疑応答、発表評価、発表理解度を問う小テストの作成も学生

●選択科目●講義と PBL を行うハイブリッド型 PBL

	同士で行った (授業風景 図 3, 4).
<b>教室空間の特徴</b>	<p>連携メディア教室を使用している。主な特徴は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ <b>表現の幅を広げる二面スクリーン</b> 中央スクリーンと左右スクリーンに異なる映像を表示できるため、講義や成果発表における表現・演出の可能性が広がる (授業風景 図 3)。</li><li>■ <b>余裕のある空間</b> 受講者数に対し空間的余裕のある教室を使用しているため、班学習時も他班を気にせずに活動ができ、大きな身体動作を伴うアイスブレイクも実施しやすい。</li></ul> <p>※ その他、コンセントが座席数分設置されていることや、照明や空調が比較的細かく設定できることも自主学習や成果発表を円滑に進める上で重要な設備的特徴である。</p>
<b>特定の回の授業の流れ・時間配分</b>	<p>本学部では 50 分授業を採用しているため、50 分授業を週に 2 回実施している。ここでは PBL の流れを紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ <b>班学習</b> 第 1,2 週でテーマ提案, 班分け, アイスブレイクを行い, その後は班ごとの自主学習を行う。まずはテーマの現状に関する幅広い調査・体験を行い, その中から問題点の抽出と問題解決案の提案を行うよう指示している。第 5~9 週はほとんど講義を行うため, 自主学習の多くは授業自問外に実施することとなる。</li><li>■ <b>他班との企画検討会</b> ある程度班学習が進んだ時点で (第 6 週に実施), 自分たちの学習内容および成果発表計画を企画書 1 枚にまとめ, 他班とペアになって企画に対する意見交換会を相互に行う (授業風景 図 1)。これにより他者視点と他班の進捗状況を把握する。</li><li>■ <b>成果発表予告プレゼン</b> 第 10 週には, 全班が発表予告プレゼンを各 2 分で行う。学生は各班の予告に対するコメントを C-Learning (後述) で記入する。これにより, 本番前に人前で発表する練習, および発表に対する評価の記入法を練習する。</li><li>■ <b>成果発表会</b> 第 11~13 週に成果発表会を行う。各班の持ち時間は 20 分で, 内訳は発表 12 分, 質疑応答 6 分, 学生評価入力 2 分であり, 最後に教員が講評を行う。50 分授業のため, 1 回の授業時間では 2 班までの発表となる。発表は基本的にスライドを使用するが, 補助資料を PDF や印刷物で配布する班もあった。また成果発表会は「授業」としての側面もあるため, 理解度確認のための小テスト問題を各班 1 問作成し, 学期末に小テストを実施した。</li><li>■ <b>レポート</b> 学期末に自主学習内容と PBL 活動の感想をまとめたレポートを各自提出。</li></ul>

授業で特に使用している  
ツールとその活用法

■「C-Learning」による学生間インタラクション支援 本学部で利用可能な授業運営支援 ICT ツール「C-Learning」(株式会社ネットマン)を使用している. とくに学生同士で発表に対する評価を実施・閲覧できる「みんなで評価」や, 学生同士が自由にファイルをアップロード・ダウンロードできる「協働板」といった機能はよく設計されており, 学生主体の学習や成果発表をシステム面で支えている. たとえば「みんなで評価」は自班の発表予告に対する聴講学生の評価・コメントが即時に集計・公開されるため, 学生はそれらを参考に成果発表本番に向けてただちに発表内容の調整に取り組むことができた.

■「小集団学習用ログブック」による学習意欲と学習内容の自己管理 自分と班員の学習意欲と学習内容を視覚化する電子版ログブックを独自に開発し, 授業内で試行している(授業風景 図 2). 本システムは週単位で自分の学習時間と学習意欲を入力することで, 自分を含む班員全員の学習意欲の推移, および各学習フェイズの総学習時間がグラフ表示されるものである. これにより自他の活動意欲をモニタリングして班のコンディションを調整したり, 班員同士で作業分担した場合の自他の学習量や, 成果発表までに必要な学習フェイズと現在の到達点を確認することができる.

学 習 成 果  
(学生は何ができるようになったのか)

■ 成果発表会での発表内容 成果発表をみると, 多くの班において問題背景の俯瞰, 本質的問題点の抽出から問題解決法の提案まで至ったことが伺える. たとえば「個人情報漏えい」では SNS で個人や位置が特定される情報を発信しようとする確認画面が表示されるアプリを実際に開発したり, 「ICT で高齢者の孤立を防ぐ」では高齢者向けに機能やボタンを減らした SNS インタフェースを設計するなど, 本学部で身につけた情報工学の知識・技能を活用して現実問題の解決に取り組むことができた.

■ 実践を通じての問題解決力の向上 初講時および学期末に実施した社会的問題解決尺度 (SPSI-R 日本語版) を比較すると, 問題解決スキルの中でもとくに「様々な解決法の案出」と「解決法の実行と検証」のスキル向上が認められた. これらはまさに本科目の協働自律学習で取り組んだ内容であり, 実践を通じてスキルや自己効力感が身についたことが伺える.

■ 学生の自己評価 学期末に実施した PBL 活動に関する自己評価調査の平均評定値 (各 5 段階評定) をみると, 自己学習達成度 4.3, 計画的学習達成度 3.6, 班内議論達成度 3.9, 役割分担達成度 4.1, 班内協調性 4.2 であり, 自主学習・協調学習ともおおむね実現できたと考えているようである. なお, 前述のログブックに記入されたデータを解析したところ, 学生の授業時間外の自主学習時間は平均約 2.5 時間/週であった. また, 「本科目を通じて身についた力」について自由回答させた結果を以下に抜粋する.

- あるテーマについて探究していくことに, 自分の観点だけでなく班員の観点を参考にすることで, 多面的に考えることができ, かつコミュニケーションを円滑に行えるようになった. (4 年男)
- 計画性, 自主性, プレゼンテーション能力. (4 年男)
- 発想力と人と協力する力がついたと思います. (4 年女)
- すでにわかっていることについて更に深く問題を考え解決する力. (3 年男)

●選択科目●講義と PBL を行うハイブリッド型 PBL

<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>■ 講義 筆記試験を実施。</p> <p>■ PBL 学習プロセス, 成果発表, 期末レポートにより評価. 学習プロセスは電子版ログブック, Dropbox の班共有フォルダにアップされた自主学習資料, 授業内での教員の見回り等から定期的に個人・班の学習状況をモニタリングした. 成果発表は学生評価と教員評価の両者を成績に反映した. また, 他班の成果発表内容の聴講理解度を測るために各班の成果発表内容に関する小テストを学期末に実施した. この小テストの設問は各班に作成させた.</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>■ 授業評価アンケート結果 本学部で学期末に実施している授業評価アンケート(無記名, 各 5 段階評価)の結果をみると, 授業の内容, 方法, 進行に関する項目の平均評定値はいずれも 4.7~4.8 であり, おおむね好評価だったことが伺える.</p> <p>■ 感想 授業に対する感想を以下に抜粋する.</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 全体を通して, とても楽しくかつ充実した講義でした. 演習活動を行うことで社会に出てからも役立つようなことが沢山身につく, 今後様々な講義などにも生かしていきたい.(4年男)</li><li>● 大変でしたが, その甲斐あって満足のいく発表ができたと思います.(4年男)</li><li>● どの班の発表も工夫されていて, 発表の取り組み方としても, 新しい知識としてもよい演習でした. ありがとうございます.(4年男)</li><li>● 他のグループの発表のクオリティが高く参考になるものが多かったので, 自分もクオリティの高い発表を作っていきたい.(3年男)</li><li>● 自分で授業をつくれる, 面白い授業です(3年女)</li></ul>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)</p>	<p>■ エビデンスベースに進化する PBL 環境の構築 PBL は時間的制約が常に問題となるが, ハイブリッド型 PBL は更に PBL に費やせる時間が限られるため, 学生が主体的, 協調的, 計画的に学習に取り組めるよう教員が適切に授業環境・システムをデザインする必要があると考えている. それら授業運営システムの設計にあたっては, 各班の学習プロセスや成績・自己評価を定量的に解析し, 授業環境上の課題点の抽出と改善案の作成・検証を毎学期繰り返している. たとえば小集団用ログブックも昨年度のデータを解析する中で学習フェイズの定期自己モニタリングの必要性が示唆されたことから今期開発・試行したものである. このように, PBL の自主性を重視しつつも, 学生の経験不足や時間的制約で頓挫しないように授業システムの側からサポートする仕組み作りは必要と考えている.</p> <p>■ 模範的役割 独創的な発想や表現は, まずそれを体験することで身につく・思いつくものだと考えている. 本科目では成果発表において学生にプレゼン上の工夫を盛り込むよう推奨しているが, まずは講義において教員がその模範例を示せるように努力している. C-Learning を用いた ARS (audience response system) の導入等に加え, 今期はとくに教室設備上の特徴である二面スクリーンを授業演出にどう効果的に活用できるかを試行錯誤した. 結果的に, 今期は約半数の班が成果発表で二面スクリーンを利用した演出を試みており(授業風景 図 3), ある程度の役割は示せたのではないかと考えている.</p>

授業風景



図 1 班学習（他班と企画検討会）の様子

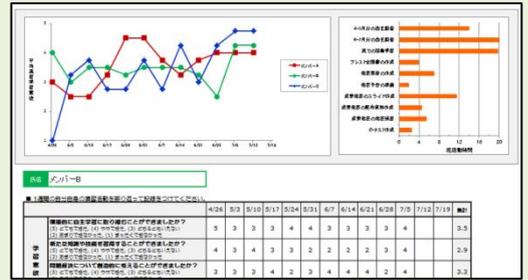


図 2 小集団用ログブック画面例



図 3 成果発表会での発表風景



図 4 成果発表会での質疑応答の様子

その他の特記事項

本科目は東京電機大学 PBL 教育支援プログラムの支援を受けており、その予算により TA を 1 名雇用するとともに、成果発表会に際しては更に補助スタッフ (SA) を 2 名雇用することができた。本科目の PBL 環境を支える授業システムの導入・管理、成果発表会の運営、各種データの記録・整理を円滑に進めるには教員以外の補助スタッフが不可欠であり、大学からその制度的・予算的支援を得られたことは本科目の達成に大きく寄与している。

# 現代英語グローバルプロジェクトⅠⅡ

## 多文化共生プロジェクトⅠⅡ

### 長崎外国語大学

外国語学部

成瀬 尚志／南津 佳広／マーク ティーダマン

科目の位置づけ	<ul style="list-style-type: none"><li>・履修対象は2年生～4年生。通年で履修することを前提としている。</li><li>・今年度は「社会的問題に取り組む」「社会との接点をもつ」の2つの条件を満たした4プロジェクトを実施している。</li><li>・グループで特定のプロジェクトに取り組み、実践的・体験的な学修をすることにより、コミュニケーション力や課題解決力などの汎用的な能力の育成を目的としている。</li></ul>
受講（登録）学生数	24名
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none"><li>・目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。</li><li>・問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。</li><li>・自らを律し、自立して積極的に行動できる。</li></ul>
教育方法の特徴	<ul style="list-style-type: none"><li>・「報告会」を半期に二回開催しており、アウトプットの回数を増やすようにしている。また、その報告会以外ではほとんど学生主導でプロジェクトを進めている。</li><li>・半期の最後に行なう報告会には外部の先生を招いてコメントをもらうようにしている。</li></ul>
教室空間の特徴	CoSTa Space という可動式の机・イス、ホワイトボードを有したグループワークに適した学習空間を使用している。また、この空間にはプロジェクターやスクリーンも備わっているため、半期に2回の報告会でも使用している。
特定の回の授業の流れ・時間配分	成果報告会の回 <ul style="list-style-type: none"><li>・プロジェクトの成果報告（1プロジェクト15分+質疑応答5分）</li></ul>
授業で特に使用しているツールとその活用法	eポートフォリオシステム・・・週に1回グループで打ち合わせを行なう際にそのときの議事録をeポートフォリオ上にアップさせている。

**学 習 成 果**  
(学生は何ができるようになったのか)

本年度からテーマ設定や授業の進め方などに関して大きく変更したため、まだはっきりとした成果は出ていないが、プロジェクトによっては課題発見から情報収集、課題解決案の提示といったプロセスに基づいて着実にプロジェクトを進めているところもある。また、構成メンバーの多様性に苦労したプロジェクトもあったが、一つの課題に取り組む中でお互いを尊重し合いながらプロジェクトを進めることができるようになったところもある。

**学習成果の評価・測定  
の方法**

半期に一度行なう「成果報告会」を独自に開発したルーブリックを用いて評価を行なっている。その成果報告会には外部から大学教員や起業家やNPO法人代表など多様な分野の専門家を招いて評価してもらっている。また、プロセス評価や各学生の評価のためにeポートフォリオシステムも利用している。さらに本年度から本科目を履修している学生を対象にジェネリックスキルを測定するための外部テストを用いて学習成果を測定している。

**本科目についての学生から  
の評価**

「自分が行なったことに対して意見をもらえたり、褒めてもらえたりして自信になった。これから先それらをのばしていき、反省するところは改善してよくしていきたい。」  
「プロジェクト科目だからこそできること、学べることが多くあり、とても良い経験になりました。」  
「今回正直、プロジェクト科目を甘く考えていたが、いざ始めて見ると、プロジェクトで集まる時間が授業時間より多く、個性がそれぞれ強かったのでぶつかったり、無断欠席などあらゆる問題が出てきました。しかし、イベント前の1週間、今までなかったチームワークが強くなり、一人一人のモチベーションも上がったと思います。そのような状態でイベントを開催できたのは良かったです。団結力の大事さコミュニケーションの取り方を学べてよかったです。」

**学生の学習のあり方や教授  
法の果たす意味等に関する、  
担当者の基本的な考え方  
(教育哲学)**

本学のプロジェクト科目に関して言えば、学内だけで閉じた活動になってはいけないと考えている。本科目は基本的に上級生が履修するものであるため、「深い学び」につながるように気をつけている。そのためにプロジェクトを設定する際の要件として「社会的問題に取り組む」と「社会と接点を持つこと」を入れた。また、各プロジェクトには活動内容を、ホームページなどを活用してできる限り外部に発信するように勧めている。さらに、報告会には多くの外部審査員の方を招いてコメントをもらうようにしている。つまり、学生たちの活動が多くの人たちの「目」にさらされるようにしており、そうしている限り、活動は(ほとんどの部分を)学生たちに任せておいてよいと考える。学生たちの主体性を損なわないように毎回の授業時には少し離れたところから別の作業をしながら学生たちのミーティングの内容を聞くようにしている。

授業風景



# 食べ物のおいしさ

## 日本獣医生命科学大学

応用生命科学部/食品科学科

西村敏英

科目の位置づけ	食品科学科は、平成23年度からカリキュラムを再編し、1年次に履修する専門教養科目として、「食べ物のおいしさ」、「食べ物と健康」並びに「食べ物の安全性」を開講した。「食べ物のおいしさ」では、高校の知識である程度まで理解できる新聞記事等を使用し、食品のおいしさに関する問題意識を植え付けると同時に、基本的知識を学習する科目とした。また、少人数グループによるグループディスカッション、グループ学習、グループ発表を通して、おいしさを自らの体験から考え、深く調べさせることで、専門知識を学ぶための動機付けを高める科目とした。
受講（登録）学生数	85名
科目の到達目標	<b>【到達目標】</b> ①食べもののおいしさに寄与するすべての因子を取り上げ、説明できる。 ②自分がおいしいと思う食べ物を1つ取りあげ、その理由をおいしさの要因を用いて、科学的に説明できる。 ③パワーポイントを用いて、プレゼンテーション資料を作成できる。
教育方法の特徴	・大人数のクラスでありながら、少人数（3～4人）からなる25の小グループを作成し、少人数教育を実践したところに特徴がある。この方法は、「チュートリアル教育の実践方法」で造詣の深い東京女子医大の吉岡俊正教授によるFD講演会等の内容を参考にして、実践をしている。具体的には、学生が、「おいしい食べ物の選定に関するグループディスカッション」、「グループによる食べ比べ」、「グループによる調査と解析」、「パワーポイントによるグループ発表」をやり遂げることにより、各学生が自ら学習する姿勢を身につけると同時に、食品を学ぶ重要性を知ることができる。
教室空間の特徴	・この授業方式では、特別な教室空間を必要としないのが特徴である。可動式の机が設置された教室であれば、前後の2つの机を合わせて、1グループのディスカッションできる場を簡単に設営できる。
特定の回の授業の流れ・時間配分	1. グループ分けと「おいしい食べ物」に関するディスカッション（1回） 2. テーマの設定（1回） ↓ 教員によるおいしさの講義（2回）：食べ物のおいしさと味

●専門教養科目●大人数のクラスによる小グループ学習

	<p>3. 第一回中間報告会による進捗状況の確認とアドバイス(1グループ3分間発表)(1回)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">教員によるおいしさの講義(2回):食べ物のおいしさと香り</p> <p>4. 第二回中間報告会による進捗状況の確認とアドバイス(1グループ3分間発表)(1回)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">教員によるおいしさの講義(2回):食べ物のおいしさと食感</p> <p>5. 最終発表会(1グループ8分間発表(学生との質疑を含む))(4回)</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>クリッカーシステム</u>:最終発表会において、他グループの発表(内容の興味深さ、説明のわかりやすさ)を評価するために、クリッカーシステムを利用する。これにより、学生が他グループの発表を熱心に聞く姿勢を身につけることができる。</li> <li>・ <u>パワーポイントによる発表</u>:学生がパワーポイントの資料を作成する技術を身につけることができる。</li> <li>・ <u>毎回配布する質問票</u>:各回の授業で不明な点を記載させることにより、不明な点を明確にする。次の週に、教員がコメントを返すことで、双方向授業を実施できる。</li> </ul>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自ら問題を設定し、それを調べることにより解決する能力を身につけることができるようになった。特に、製造会社や生産者に直接連絡を取り、様々な情報を得ることができるようになった。</li> <li>・ 他のグループの発表に対して、積極的に質問ができるようになった。</li> <li>・ 分かりやすいパワーポイント資料を作成できるようになった。</li> </ul>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人に書かせたレポート(グループのテーマに関して調べた内容や発表内容をまとめたものを各人に提出させる。)</li> <li>・ グループ発表での、発表内容と説明の分かりやすさに関する複数の教員の評価。</li> <li>・ 発表態度と質疑応答に対する評価。</li> <li>・ 学生による評価(発表内容と説明の分かりやすさ)。</li> </ul> <p>以上の4点を総合的に評価する。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>&lt;良い評価に関する意見&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ディスカッションという形式は、意欲が出ると同時に多くの力をつけることができ、良かった。(他13名)</li> <li>・ 食品という専門的なことを学ぶ授業が少ないので、非常に興味を持てた。(他3名)</li> <li>・ 広い視野から食品について考えることができた。(1名)</li> <li>・ 「食べ物のおいしさ」について興味がわいてきた。(1名)</li> </ul> <p>&lt;改善に関する意見&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ まだ定義が決まっていないことや分からないことについてディスカッショ</li> </ul>

●専門教養科目●大人数のクラスによる小グループ学習

ンしたかった。(1名)

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)

- 大学での学習は、まず興味を持たせることが最も大切なポイントである。特に、本学科の学生は、食品を学ぶことを希望して入学していることから、入学時の学習意欲を低下させること無く、さらに高めることが求められる。そのような背景から、教養科目の学習がメインとなる1年次で、食品に関する「専門教養科目」を設置することは、極めて重要である。
- 次に、高校までの受け身の学習姿勢から、能動的学習姿勢への切り替えは、1年次がベストである。そのような観点から、入学時に興味のある専門分野に関して、自らが勉強する科目の設定は非常に有効である。
- また、本教授法であれば、これまで大人数ではできないといわれている「少人数グループ学習」が実施できる。しかし、この教授法は、多くの知識を定着させることを目的とした授業では、効果を発揮できない可能性があるため、解答が1つではないような学問領域の授業で使用されることが効果的であろう。

授業風景  
(写真: : ない場合は省略可)



# 土木総合デザイン I・II

## 八戸工業大学

工学部土木建築工学科

迫井 裕樹、竹内 貴弘、鈴木 拓也、金子 賢治、佐々木 幹夫、長谷川 明、阿波 稔

科目の位置づけ	エンジニアリングデザインの要素のうち、特に、構想力、総合応用能力、制約条件下で解を見出す能力、を重点的に教育するための新設科目として、土木総合デザイン I、II を開講した。また、土木工学の専門的な構想力・総合応用能力などの要素・能力は、ある程度の専門知識を基礎として養成されるべきであるとの考えから、3 学年での実施とした。
受講（登録）学生数	約 20 名
科目の到達目標	土木総合デザイン I：主に問題点の認識力、制約条件下での課題解決力、及び、創造力の養成を目標とする。 土木総合デザイン II：建設プロジェクトとマネジメントの流れについて理解し、土木工学の複数の分野にまたがる課題の統合応用能力、制約条件下での課題解決力、チームワーク力の強化を目標とする。
教育方法の特徴	土木総合デザイン I：手法的な知識を学習するために、講義と実習を交えた形での KJ 法等の発想法の授業を行う。これらの発想法の知識を学習した後に、コンクリート工学および環境工学に関わるコンテスト型の実習を行う。 土木総合デザイン II：最初に建設プロジェクトとマネジメントの講義を行って、コストや技術者倫理・建設プロジェクトの進め方について学習する。次に総合課題として、平成 23 年度および 24 年度は「橋が津波に流されない計画」を実施した。 上記、コンテスト型の実習や総合課題の実施においては、4 名程度のグループ学習を行っている。また、各グループには、リーダー（先輩）学生を 1 名配置し、適宜ディスカッションにも加わり、アドバイスをを行っている。
教室空間の特徴	グループ学習が実施しやすいよう、スクール形式ではなく、小人数のテーブル（作業空間）を用意している。
特定の回の授業の流れ・時間配分	土木総合デザイン I（3 学年、前期） 第 1 回 ガイダンス（土木総合デザイン I の目的、目標、進め方、成績評価法） およびエンジニアリングデザイン能力について 第 2 回 発想法について① 第 3 回 発想法について② 第 4 回 発想法について③ 第 5 回 発想法について④ 第 6 回・第 7 回 コンクリート①・・・コンテスト① その後養生 第 9 回・第 10 回 コンクリート②・・・コンテスト②

●座学・演習●グループ学習とコンテスト型実習

第 11 回 コンクリート③・・・コンテストのまとめと講評  
 第 8 回 環境・・・コンテスト①  
 第 12 回・第 13 回 環境・・・コンテスト②  
 第 14 回 環境・・・コンテスト③  
 第 15 回 環境・・・コンテストのまとめと講評

土木総合デザインⅡ（3 学年、後期）

第 1 回 授業内容、授業の進め方についての説明、ガイダンス（佐々木）  
 第 2 回 建設プロジェクトとマネジメント①（佐々木）  
 第 3 回 建設プロジェクトとマネジメント②（佐々木）  
 第 4 回 建設プロジェクトとマネジメント③（佐々木）  
 第 5 回 建設プロジェクトとマネジメント④（佐々木）  
 第 6 回 建設プロジェクトとマネジメント⑤（佐々木）  
 第 7 回 建設プロジェクトとマネジメント⑥（佐々木）  
 第 8 回～第 15 回 総合課題”築土構木”（土を築いて堤をつくり、木を高く構えて建物・橋をつくる）コンテスト、課題説明、課題把握、問題の整理と計画、実施、評価、プレゼンテーション

授業で特に使用している  
 ツールとその活用法

土木総合デザインⅡのコンクリート工学分野においては、幾つかの制約を与えた状態でのなるべく強度の高いコンクリートを作ることを課題とし、環境工学分野については汚染水からなるべく綺麗な水を作ることを課題として設定した。いずれも提案された案を具体的に作成した後、実験を行って客観的に評価可能な内容となっている。  
 土木総合デザインⅡでは、「模型制作費 5000 円以内」を制約条件とし、「設定した津波に流されず、かつ、最軽量」を考えることとした。簡易津波発生装置を作成することで実際に評価可能とした。

学 習 成 果  
 (学生は何ができるようになったのか)

土木総合デザインⅠ：発想法についての基礎を理解し、いくつかのテーマに関するコンテストを実施して土木工学に関わる総合的なデザイン能力を身に付ける。  
 土木総合デザインⅡ：建設プロジェクト・マネジメントの基本について理解し、これまで学んだ知識を統合し応用することで課題解決へのアプローチ手法を身に付ける。

学習成果の評価・測定  
 の方法

①発想力（問題点の認識力）、②継続計画能力、③統合応用能力、④課題解決力、⑤図、文章等の表現力、⑥コミュニケーション能力（口頭によるプレゼンテーション力）、⑦チームワーク力、の評価項目について 3 段階の評価水準を設定し評価している。

●座学・演習●グループ学習とコンテスト型実習

本科目についての学生からの評価

これまでの座学と実習を統合した新しい形式の授業スタイルであることから、学生の関心も高い。また、グループの中での自分の役割を認識し、課題解決することが求められることから、コミュニケーション能力の向上の一環となっている。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

学習の流れとしては、(1)課題説明（把握）、(2)調査して発案（個人）、(3)ディスカッションおよび計画立案（グループ）、(4)制作、(5)試作品の評価、(6)課題の抽出と再計画・修正、(7)評価、(8)プレゼンテーション、(9)講評、とした。複数分野の知識を必要とする課題設定とすることと、試作品の性能評価により総合応用能力の養成を図っている。この流れにより、学生がグループ学習を通じてPDCAによるスパイラルアップを体験することが重要と考えている。



授業風景



# 瀬戸内海地域の魅力を発信しよう

広島経済大学

経済学部／教養教育部会

濱田 敏彦

<b>科目の位置づけ</b>	本学カリキュラムは、①共通科目（教養科目）や自学科科目（専門科目）などの講義を中心とする「基礎知識開発プログラム」、②演習（ゼミ）を中心とする「プレゼンテーション能力開発プログラム」、③「人間力（社会人基礎力）開発」を目的とする「興動館教育プログラム」の3つで成立。③の興動館教育プログラムには、興動館プロジェクトと興動館科目の2本柱があり、本授業は、興動館科目（「元気力」・「企画力」・「行動力」・「共生力」の4フィールドに分類。2013年度31科目開講）の内の一つで、「企画力」フィールドに属する。
<b>受講（登録）学生数</b>	定員 30名
<b>科目の到達目標</b>	①瀬戸内海地域に関連したさまざまなテーマを素材として、「企画をたてる」ために必要な手法を修得することをめざす。②立案した企画を魅力的にプレゼンテーションする能力を身につけることをめざす。③瀬戸内海地域の魅力を再確認し、地域社会における興味・関心を深めていくことをめざす。
<b>教育方法の特徴</b>	興動館科目では、属するすべての科目に対して、①少人数（原則定員 30名）、②双方向授業、③「座学」に終始せず実践の重視、④グループワーク、フィールド・ワークの重視、⑤成果発表の重視という、5つの条件を課している。担当教員は、この条件にそって到達目標に至る授業方法やプロセスを考える「プロジェクト型」の授業を展開している。 本授業においても、瀬戸内海地域がもつ歴史や風土の魅力的な特色・テーマを素材に、地域活性化企画を考えること目標として、5～6人の小グループに分かれてワークショップ形式で授業を展開している。グループごとに企画を立案し、プレゼンテーション・質疑応答を行った後、最終企画案をレポートにまとめて提出する。
<b>教室空間の特徴</b>	本授業を含む興動館科目は、本部キャンパスに隣接する「興動館」で実施している。興動館は、興動館教育プログラムの拠点となる教育センターで、学生が集い、考え行動し、刺激しあって人間力を育成するための「場（空間）」となっており、そこでは、学生が主体的に実践する興動館プロジェクトと興動館科目の2つの教育プログラムが実施されている。興動館は、1・2階はロビー・カウンターと主に興動館プロジェクト活動用のフロアに、3階は主に興動館科目用のフロアに、4階は宿泊も可能な多目的フロアになっている。興動館科目が行われる教室は、2教室を自由に繋げることができ、机やイスも可動式となっているなど、グループワークやプレゼンテーションの展開に応じて、自由に空間をつくることができる、利便性をもった空間となっている。

<p><b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b></p>	<p><b>【第9回の授業展開】</b></p> <p>①前回授業における学生のふりかえり確認、質疑応答。(5分程度)</p> <p>②今回のテーマと「ミッション」の指示・ねらいの説明(事例「瀬戸内の島々の特色を生かした企画」提案)。(10分程度)</p> <p>③基礎的情報(事例紹介など)の説明。(5分程度)</p> <p>④グループディスカッション(1)(45分程度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ブレインストーミングと「意見」の書き出し(模造紙・付箋など)。</li> <li>・ブレインストーミングで出た「意見」に対する質疑。</li> </ul> <p>⑤グループディスカッション(2)(15分程度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・KJ法による「意見」の整理(次回へ持ち越し)</li> </ul> <p>⑥本日のふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員による気付きの指摘、グループ評価。</li> <li>・学生による気付きの記入・提出。</li> </ul> <p>⑦次回までの課題伝達。</p>
<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<p>各グループにノートPC1台(学内無線LAN。情報収集のため)。その他、模造紙・付箋・マジックなどにとどまり、特別なツールは用いてはいない。</p>
<p><b>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</b></p>	<p>本授業は、「人間力(社会人基礎力)」を養成することを目的とする興動館科目の内、企画力フィールドに配置された科目である。その学習成果としては、以下の諸点が挙げられる。</p> <p>①与えられたテーマから企画を考えるグループワークを繰り返す中で、課題発見→情報収集→情報処理→課題解決のための企画構成→発信(プレゼンテーション)という、企画に関するプロセスを経験し、認識すること。</p> <p>②グループワークの中で、主体性をもってチームに貢献し、他者に働きかける経験を積んで、チームワークを身につけること。</p> <p>③瀬戸内海地域に対する興味関心をもち、一定の知識を身につけること。</p>
<p><b>学習成果の評価・ 測定の方法</b></p>	<p>①毎回の授業で提出する授業の振り返り。</p> <p>②グループとしての企画内容、プレゼンテーション、報告書。</p> <p>③履修生の人間力(社会人基礎力)の伸びを定量化・可視化することを目指した興動館教育プログラム「プログレスシート」記入。興動館教育プログラムでは、本学の4つの人間力要素を経済産業省から提示された社会人基礎力12の能力要素と連動させ、各能力要素のレベルを「レベル0」から「レベル3」までの7段階(0.5刻み)に設定した評価指標である「人間力マップ」を作成している。それをもとに、履修前と履修後に学生自身にそれら諸能力について自己評価させ、その伸長度をはかっている。「人間力マップ」は、人間力(社会人基礎力)の諸力を知識・スキル・行動と結びつけ、段階的な48項目に亘って示しているため、学生はその「人間力マップ」を参照しながら、人間力(社会人基礎力)について、授業でのさまざまな場面を想定しながら、より具体的な自己評価ができる。最終的に「プログレスシート」の変化は、興動館教育プログラム活動記録シート纏められる。そこでは人間力(社会人基礎力)の自己評価レベルの数値変化がレーダーチャート化され、自己評価コメントとともに教員のモニタリング(気付き・観</p>

察)も評価コメントとして記載され、学生個々にフィードバックされている(なお、プログレスシートは興動館プロジェクトでも使用している)。

**本科目についての学生からの評価**

①授業評価アンケートの自由記述欄には、「企画を立てる基本的なプロセスへの気付き」や、「協働することへの面白さ」、「新たな人間関係の構築」などの評価コメントがある。(ただし、**silent majority** の評価については、授業評価の採点数値結果から想定するしかなく、難しい部分もある。)

②プログレスシートにおける履修前と履修後との自己評価を比較してみると(平成 25 年度前期)、主体性が **194%**、働きかけ力 **184%**、創造力が **185%**、発信力が **179%**に伸長しており、学生自身が一定の手応えを実感していることがうかがえる。

**学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)**

「教育哲学」といえるほどのものではなく、教授法の到達度・実践度も決して高くはないが、本授業に関して以下の諸点を心がけている。

①授業は、「教員と学生とでつくりあげる」意識を持つこと(学生を置き去りにしない)。

そのために、授業の到達目標、授業内容、授業方法(ルールも含め)などについて、機会あるごとに学生に伝えて理解をえることや、授業の各場面やプログレスシートなどを利用して、学生に対する教員としてのモニタリング(気付き・観察)を積極的に伝えていくよう心がけること。

②学生に興味・関心をもたせる「テーマ(素材)」を選択・用意するよう心がけること。

③授業における学生の主体性を導き出すよう、教員はファシリテーター(ときにコーディネーター)であるよう心がけること。

④グループ学習における、学生相互の支援、「教え合い」・「学び合い」が果たす役割の重要性を認識すること(学科や学年を越えた繋がりによって、学生がリーダーシップを発揮したり、ある時はメンバーの失敗をフォローしたりする存在となりながら、時には対立しつつも、最終的には自ら課題を解決し、成果をまとめていくことが貴重な経験)。

※多くの先達が言われているように、教授法をどれだけ工夫し実践していくかは、大学教育における教員の「本気度」をあらわす一つの指標となる。それはいつか学生にも伝わり、学生が本来もっている主体性をどこかで引き出すことにつながるかと信じている。



**その他の特記事項** 広島経済大学興動館HP (<http://www.hue.ac.jp/koudoukan/index.html>) 参照

# コミュニケーション

## 福山大学

薬学部薬学科

薬学部教員（助教以上）16名と非常勤講師1名

<b>科目の位置づけ</b>	<p>福山大学薬学部では、医療の高度化や複雑化に対応する知識や技能の基盤を教育するとともに『行動変容のための気づきの学習』に力を入れており、1年次に初年次教育として『薬学入門Ⅰ』『薬学入門Ⅱ』、2年次に『コミュニケーション』、3年次に『生命倫理』、4年次に『医療の担い手の心構え』『医療コミュニケーション』『事前学習』、5年次に『実務実習』『実務実習後学習』等のヒューマニズム教育や医療倫理教育を体系的に導入し実践している。</p> <p>2年次に実施する体験型学習『コミュニケーション』は本学薬学部独自のプログラムで、幼児・高齢者との交流を通してコミュニケーション能力を培うと同時に、他者に対する自己の役立ち感に気づいて、自己肯定感・自尊感情を育てホスピタリティを涵養する。</p>
<b>受講（登録）学生数</b>	2年次生全員（96名：平成25年度）
<b>科目の到達目標</b>	<p>医療の担い手の一員である薬の責任者として、患者、医師、その他の医療従事者、同僚、地域社会の人々との信頼関係を確立できるようになるために、相手の心理、立場、環境を理解するための基本的な知識、技能、態度を修得する。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 言語的および非言語的コミュニケーションの方法を概説できる。</li><li>2 意思、情報の伝達に必要な要素を列挙できる。</li><li>3 相手の立場、文化、習慣などによって、コミュニケーションのあり方が異なることを例示できる。</li><li>4 対人関係に影響を及ぼす心理的要因を概説できる。</li><li>5 相手の心理状態とその変化に配慮し、適切に対応する。</li><li>6 対立意見を尊重し、協力してよりよい解決法を見出すことができる。</li><li>7 自分の特徴を知ることによって、自己を表現することができる。</li><li>8 相手の気持ちを理解する「話の聴き方」ができる。</li><li>9 自分が他者に対して役立っていることを実感する。</li><li>10 今の自分を認めて受容し、自分を大切にできる。</li><li>11 ハンディキャップ体験を通じて他者への心配りを体験する。</li></ol>
<b>教育方法の特徴</b>	<p>本科目は「気づきのワークショップ」「ハンディキャップ体験学習」「交流学習」からなり、いずれも能動的な学習形態をとっている。</p> <p>「気づきのワークショップ」では4～6名のグループを形成して体験学習を実施し、学習後には振り返りシートを書き、提出する。</p> <p>「ハンディキャップ体験学習」では、目隠しした人(会話・可)とサポートする人(会話・不可)の2名がペアになり、決められたコースを一巡後、振り返りシートに感想を書き、次に役割を交代してコースを一巡し、再び、振り返りシート</p>

	<p>を書き、それぞれの感想を発表する。最後にまとめの振り返りシートを書き提出する。</p> <p>「交流学习」では、保育所の5歳児または高齢者施設の高齢者と1対1のパートナーを形成して、週1回90分の交流を8週間に亘り実施し、毎回、日誌を提出する。すべての交流学习が終了後、振り返りシートを提出するとともに施設ごとに分かれて各学生が交流学习で体験して得たものや感想を発表し、それに対して教員及び施設スタッフが学生一人ひとりの成長に肯定的なコメントをする。</p>
<p><b>教室空間の特徴</b></p>	<p>「気づきのワークショップ」では学内の多目的研修室を利用し、無作為に椅子に座っている状況で4～6名のグループを形成して、お互いがコミュニケーションに関連するワークを体験しながら学習する。</p> <p>「ハンディキャップ体験学習」では2人がペアとなりブラインドウォークを実施する。学内の階段やスロープのある中庭を利用する。</p> <p>「交流学习」では、保育所3ヶ所、高齢者施設3ヶ所で実施する。</p>
<p><b>特定の回の授業の流れ・時間配分</b></p>	<p>幼児・高齢者との交流学习の流れは以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 5歳児または高齢者との交流を選択させ、施設ごとに注意事項を説明</li> <li>② 交流学习の自己課題を提出させ、それを基に各施設でパートナーのマッチング</li> </ol> </li> <li>2. 交流学习             <p>保育所又は高齢者施設において、特定のパートナーと1対1の8回の交流を行なう。教員は学生の行動を観察し、期間中の学生の成長を見守る。</p> <p><b>【保育所】</b></p> <p>14:00 大学のスクールバス又は徒歩で保育園に到着、交流学习開始（90分）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 初日は5歳児のネームカードづくり、最終日は手作りのプレゼント交換</li> <li>② 時計づくりなどの工作、竹馬の練習、学生考案のゲームなどで交流する</li> <li>③ 毎回、終了時に保育所スタッフの方々に質問し、意見交換を行う</li> </ol> <p>15:30 交流学习終了&lt;往復時間などを利用し、教員が学生にアドバイスする&gt;</p> <p><b>【高齢者施設】</b></p> <p>13:50 高齢者施設集合、教員が学生にアドバイス</p> <p>14:00 交流学习開始（90分）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 昔の体験談を傾聴する</li> <li>② リハビリを兼ねた創作活動、体操、ゲームをする</li> </ol> <p>毎回、終了時に施設スタッフの方々に質問し、意見交換を行う</p> <p>15:30 交流学习終了 &lt;教員が学生にアドバイスする&gt;</p> <p>毎回、その日の体験を通じてできたことや次回に向けての目標を日誌に書き、翌週明けに提出する。教員は、悩みや戸惑いのある学生にはアドバイスし、スムーズに交流ができている学生には肯定の言葉をかける。</p> </li> <li>3. 振り返り発表（3～5分/人）</li> </ol>

●専門教育科目＜専門基礎科目＞●学外での体験型学習

	<p>各学生が交流学习で体験して得たものを発表し、それに対して教員及び施設スタッフが学生一人ひとりの成長に肯定的なコメントをする。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>「ハンディキャップ体験学習」では目隠し用のアイマスク、「交流学习」では日々の日誌、気づきのワークショップを含めてすべての学習に「振り返りシート」を用いる。</p> <p>体験の様子、振り返りシートや日誌の内容をもとに、教員及び施設スタッフから各学生個人に対して肯定的なコメントをフィードバックする。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>平成24年度の交流学习後の学生へのアンケートから</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 相手の行動や表情から優しさを感じ取り、役立ち感・自己肯定感を得ている</li> <li>② 変化した自分に気づき、自分の内面を見つめて新しい自分を発見している</li> <li>③ 交流を重ね人間関係を深める過程でコミュニケーションのとり方を学び、相手を思いやることや非言語的コミュニケーションの大切さ、感謝の気持ちを行動や言葉で伝えることがコミュニケーションだと気付く</li> </ul> <p>これら様々な気づきを得ていることが学習成果として挙げられる。</p> <p>学生達は一様にして、相手の笑顔から元気をもらえること、そして自身の笑顔から元気を与えていることに喜びを感じ、ホスピタリティを持って接することの大切さに気付くことができた。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>体験学習に積極的に参加していること、気づきのワークショップの振り返りシート提出、ハンディキャップ学習の振り返りシート提出、交流学习の日誌提出、交流学习を振り返る学習成果発表、交流学习の振り返りシート提出、交流学习報告書用手記提出により評価する。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>平成24年度の交流学习後の学生に対するアンケート調査では、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 交流学习を非常に満足したか              &lt;非常に満足した：84.0%、満足した：14.0%、やや不満、まったく不満：0%&gt;</li> <li>② 交流学习は自分の言動を振り返る機会になったか              &lt;大いにそう思う：76.3%、ややそう思う：22.6%、あまりそう思わない：1.1%、全くそう思わない：0%&gt;</li> </ul> <p>という結果であり、学生からは高い評価を受けている。</p> <p>さらに、交流学习を実施している保育所スタッフや幼児の保護者からは交流学习に参加した幼児の積極性や寛容性などに良い変化がみられたという感謝の言葉も頂き、高い評価を受けている。</p>
	<p>相手の話を聴き、心に寄り添いながら人間関係を築くホスピタリティの醸成には、体験学習が効果的であると考えている。先ず、「気づきのワークショップ」</p>

●専門教育科目<専門基礎科目>●学外での体験型学習

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)

で、コミュニケーションについて考え、理論やスキルなどを疑似体験しながら学び、「ハンディキャップ体験学習」で自分の五感を再認識し、相手の立場に立って考える力や信頼関係の大切さを養うこと、同時にハンディキャップのある人が置かれている環境や障害についても理解することができる。「交流学习」においては、一対一の交流で傾聴・自己開示の重要性を理解し、パートナーとの関わりを通して自己の言動を振り返り、他者に対する感謝の気持ちを持つことができる。また、交流の回数を重ねるごとにパートナーとの信頼関係が築け、自分が他者に対して役に立ち、そして必要とされていることに気づきはじめる。さらに、交流で得られた思いや考えを自己肯定的なコメントとしてまとめ、それに対して教員や施設スタッフが共感して受け入れのコメントをすることで、学生自身が自分の言動や行動に対して自信を持ち、自己肯定感や役立ち感を育むことができると考えている。

～ 気づきのワークショップ ～



～ 幼児および高齢者との交流学习 ～



授業風景



その他の特記事項

この科目の活動の一部については、学会発表や論文、大学ホームページで報告している。さらに、毎年度、コミュニケーション学習報告書として冊子にとりまとめ、実施施設や本学薬学部の全教員に配布することで、学習成果の情報共有化をはかっている。

【学会発表】

- ① 日本薬学会第128年会 (H20年3月27日)

●専門教育科目<専門基礎科目>●学外での体験型学習

② 第41回日本薬剤師会学術大会 (H20年10月13日)

③ 第2回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 (H21年1月11日)

④ 第6回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 (H24年11月4日)

【論文】

① 医療薬学 (36(7), p-523-531, 2010)

【福山大学薬学部交流学习のサイト】

<http://www.fukuyama-u.ac.jp/pharm/htmls/humanisum/exchange.html>

# 国際観光研究 I

## 文化学園大学

現代文化学部 国際文化・観光学科

栗山 丈弘

科目の位置づけ	学生が自ら調査、問題発見、問題解決、提案、実行する姿勢を身につけるため、専門課程の基礎科目として2年次の必修科目として位置づけている。
受講（登録）学生数	14名
科目の到達目標	学生が地域の現状に関心を持ち、フィールドワークを中心としたプロジェクト学習のスキルを身につけ、地域貢献、社会活動に自ら参加する意義を見出すことができる。最終的に、市民として、社会人としての自覚と責任を意識することができる。
教育方法の特徴	<p>本科目は、観光の視点からの地域貢献をテーマとした授業である。平成24年度の課題は「こだいら観光まちづくりコンテスト」で、9月から1月までの後期半期科目の中で実施した。学生が2～3名のグループを組み、「観光まちづくり振興プラン」の策定を目指している小平市の現状を実地調査し、観光まちづくりに資するツアーなどの企画を立案し、小平市や関係団体にむけて企画提案を実施した。</p> <p>特記すべきは審査方法で、審査員として小平市観光まちづくり振興プラン検討委員会委員、小平市職員に参加していただき、学内教員を交え、プレゼンテーションの公開審査を行ったところである。</p> <p>教育方法としては、プロジェクト学習（PBL: Problem/ Project- Based Learning）および、グループ学習の手法に基づいて教授／学習過程をデザインした。</p> <p>すなわち、グループ学習により、①積極的に取り組む学生とそうではない学生同士がひとつのプロジェクトを完成させるために、互いの能力の足りないところを補いつつ、協働するよう指導する。プロジェクト学習により、②学外（地域）の人間とのコミュニケーションを図り、フィールドワークを通して学生自身が問題発見し、考え、協力して問題解決する機会を与える。③学外の専門家の厳しい評価を受け、自分たちの研究の未熟な点、足りない点、あるいは評価された点を、グループで再検討し、改善点を導き出すよう指導する。といった点が特徴として挙げられる。</p>
教室空間の特徴	通常の授業では、定員20名の演習室を使用した。机は、ロの字型に配置されており、全体でのディスカッションと、グループでの個別作業の双方が行いやすい環境に配慮した。フィールドワークでは、授業時間を活用したものと、課外時間の自主的なフィールドワークを行なった。公開プレゼンテーションでは、収容人数約50名の視聴覚教室を使用した。

特定の回の授業の流れ・  
時間配分

公開プレゼンテーションでは、外部審査員（市職員と小平観光まちづくり振興プラン検討委員）および、学内教員の合計約 20 名に対し、グループごとに発表を行なった。

各グループの発表時間は7分、質疑応答時間が5分で実施した。審査員は、プレゼンテーションの企画内容に対して、新規性／分析・構成力／効果／実現可能性／プレゼンテーションの5項目から各10点（合計得点50点満点）で評価し、各項目の得点とコメントを審査用紙に記入する。

全グループの発表後、2名の審査員から講評をもらい、公開プレゼンテーションを終了した。

最終回である翌週の授業では、審査結果の発表と本プロジェクト全体のふりかえりを行なった。

審査結果は、20名の審査員からの得点の平均値を算出し、得点により順位付けを行なった。各グループには、合計得点と、審査項目である5項目の得点分布を、レダーチャートでグラフ化した。また、グラフに加え、審査員からのコメントも掲載し、数値だけでない評価ポイントも捉えられるように工夫した。グラフ（量的）とコメント（質的）の両面から自分たちの企画・提案のどこが良くて、どこが悪かったかを、可視化できるようにしてフィードバックした。

審査結果を受けて、今回のプロジェクトに対する振り返りレポートを作成した。レポート内容は、「企画作成とフィールドワークについて」「公開プレゼンテーションについて」「プロジェクト全体を通じて」という視点から、自分達のグループの取組みがどうだったかをふりかえり（省察）させた。

このレポートは、審査結果とともに、報告書として冊子にまとめられ、履修学生、審査員などの関係者に配布された。

授業で特に使用している  
ツールとその活用法

〈インプット〉学生の調べ学習のツールは、インターネットに偏りがちである。インターネットにはない、紙媒体のパンフレット、マップなどを集めさせ、インプットのリソースとして活用させた。

〈分析・企画づくり〉企画づくりの流れや手法が理解できるように、各段階で何をすべきかがわかるようなワークシートを提供した。

〈アウトプット〉パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行うよう指導した。

学 習 成 果  
(学生は何ができるようになったのか)

本授業での学習成果として、以下の5点を履修学生が身につけることができたと考える。

①履修学生は、グループによる企画づくりのための調査からプレゼンテーションまでの一連の流れとその方法を習得することができた。

②グループでの学習を通じ、リーダーシップやフォロワーシップといった自分の特性に応じた役割の果たし方を身につけることができた。

③インターネットを用いた情報収集だけでなく、フィールドワークの大切さを理解し、フィールドワークで求められるスキル（インタビューや写真の撮りかた、メモの取り方）についても身につけることができた。

④公開プレゼンテーションを通して、企画の内容のみならず、話し方や伝え方の

●演習●PBLで地域貢献テーマにプラン作成

	<p>スキルも重要な点があることを理解した。</p> <p>⑤地域における課題とその解決にむけた企画づくりを試みることを通して身の回りの生活環境に関心を持ち、市民として地域の発展に貢献する意識を持つことができた。</p>
<p><b>学習成果の評価・測定の方法</b></p>	<p>プロジェクトのフェーズに応じたワークシートを記入させているため、学生たちが何をどこまで理解し、課題に取り組んでいるのかを、プロジェクトの進行中、随時、教員がチェックし、つまづきがある場合にはフォローを行なった。</p> <p>公開プレゼンテーションでの企画に対する評価は、20名の審査員による得点評価とすることで、客観的な評価となるよう工夫した。</p> <p>授業全体の評価は、審査結果のみでなく、プロジェクトに対する参加度などを出席状況、ワークシートの記入状況、振り返りレポート記述の内容から行なった。</p>
<p><b>本科目についての学生からの評価</b></p>	<p>最終的に成果報告書を作成し、学生自身による学習評価を記録している。授業内容の中で、企画作成・フィールドワークについては、「住人でありながら住んでいる環境について全く知らなかったことがショックだった。」「インターネットやパンフレットで情報を得るのではなく、実際にその街に足を運び、自分の目で確認することは重要なポイントだった。」「地域の人々の意見を直接聞き、地域の特産物を調べるなど、実体験をすることで新しい発見があり、地域振興の利点を発見できた。」という評価があった。公開プレゼンテーションについては、「多くの聴衆の前で緊張したが、プレゼンテーションソフトを使い分かりやすく、聴衆を引き付ける話し方を学んだ。」「質疑応答の時間に、外部審査員からの多くの質問に適切に答えるには、事前準備を徹底的に行うことが大事であると気づかされた。」「自分のアイディアがいかに人と違い、新規性を持っているかが一番重要なポイントだと理解した。」などの、学内授業だけでは得られない経験を評価している。全体としては、コンテストということで、緊張感、明確な優劣の評価、企画・立案・プレゼンテーションの達成感を得られ、学生にとっては効果的な教授法であったと考えられる。</p>
<p><b>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</b></p>	<p>大学での学びを、学内で完結させるのではなく、企業や地域と連携し展開することによって、学生たちは、モチベーションされ与えられた課題に対して本気で取り組むようになると考えている。本実践では、「観光まちづくり」に取り組もうとしている小平市のリアルな課題に関して、その解決をめざす方策を提案する、かつ、その企画を関係者に審査してもらうという点で、学生たちは、適当な企画では済まされないという自覚を持って課題に取り組むことができた。</p> <p>また、コンテスト形式を用いて、企画に順位付けすることで他のグループに負けたくないという競争意識を活用した。ただし、勝ち負けや順位自体には、意味がないということを、振り返り際には丁寧に指導を行なった。一連の活動を振り返ったときには、学生たちが順位に関係なく各々の成長を実感でき</p>

●演習●PBLで地域貢献テーマにプラン作成

ば、順位が大きな問題でないということを理解してくれた。

本授業で活用したプロジェクト学習やグループ学習の手法では、教師は、学生を本気にさせる環境を準備し、本気になって主体的に取り組む学生のつまづきを支援する、フォロワーとしての役割に徹することが重要だと考えている。

公開プレゼンテーションの様子



授 業 風 景



# 薬学教育 6 年制の全授業科目

## 北海道医療大学

薬学部／薬学科

薬学部全教員（ICT 教育支援システム開発担当教員 二瓶裕之）

科目の位置づけ	1～2年次の授業科目では基礎学力の向上を主とした全学教育や医療現場を体験するアーリーエクスポージャーなどを行う。2年次以降の授業科目では基礎薬学・社会・医療薬学領域へと薬学専門知識のステップアップを行う。4年次の授業科目では実務実習前共用試験に対応できる総合的学力を習得する。5年次には臨床現場での長期の実務実習を行う。最終学年である6年次には薬剤師として必要な知識・技能・態度を身に付ける授業科目が配当されている。
受講（登録）学生数	1,107名（1年199名、2年198名、3年200名、4年180名、5年155名、6年175名）
科目の到達目標	1～2年次では薬学専門科目に必要となる基礎学力を習得するとともに、薬剤師となる関心を早期に高めることを目標とする。2年次以降は薬剤師として必要となる専門知識、ならびに、薬剤師職務に必要な基本的知識、技能、態度をコアカリキュラムに沿って修得する。5年次には長期実務実習を通して、病院業務と薬局業務を実践できるようになるとともに、医療人としての倫理観と責任感を担う。6年次には、基礎薬学・社会・医療薬学領域などの幅広い薬学専門知識を習得する。
教育方法の特徴	<p>ICT 教育支援システムを大学が独自に開発し、それを活用することで、学生による主体的な学習を促す教育方法への転換を図っている。システムの特徴の1つが、本学独自の教育手法を細部まで具現化するため、薬学専門教員や情報系教員が学際的に一体となり全てのプログラムを自作した点である。また、もう1つシステムの特徴が、一貫した学びの連続性を保つため、特定の科目ではなく6学年全ての科目（講義・演習・実習）を対象とした点である。</p> <p>まず、モバイルにも対応した教育支援システムにより、時間的・空間的な制約のない学習環境を整え、教室外における主体的な事前・事後学習を促している。また、薬学部の全教員の組織的参加により、教育支援システムによる学習履歴の把握や学生とのコミュニケーションを通して双方向性のある対面授業を実施できるようにしている。さらに、コンピュータベースで学力到達度や実習レポートの判定を行うことで、学生による主体的学習の動機付けをして、学習サイクルを確立させるようにしている。加えて、学生が日ごろ使用する教務支援システムも自作して教育支援システムと連携させることで学習サイクルの活性化を図っている。また、海外を含む学外から授業を実施できる遠隔授業システムも構築し、ICT を利用した学習への良い刺激となるような取り組みも行っている。</p>
教室空間の特徴	大学内の講義室だけではなく、授業時間以外の放課後や自宅、さらには、本学では、多くの学生が電車などで約1時間をかけて通学することから、通学時間をも主

	<p>体的な学習を行える場とした。また、PBL 形式の演習や長期実務実習は、各々、札幌市内の福祉施設や北海道の広域にある病院・薬局などの医療施設で実施される。さらに、PBL 形式などいくつかの授業では、教室に 100 台前後の PC を設置しレポート作成や情報検索などを行う。</p>
<p><b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b></p>	<p>1・3・4年の例として、「早期体験学習」、「医療福祉活動演習」、「医療コミュニケーション」などの PBL 形式の授業では、学外などで実施した実習の後に、システムを通してレポートや報告書を作成することで、授業をサポートしている薬剤師や模擬患者の方と学習情報をスムーズに共有できるようにしている。さらに、1年生の「情報科学」においては、国際会議出席のために海外へ出張したときに出張先より遠隔授業を実施している。2012 年度はサンクトペテルブルクより遠隔授業を実施した。授業では、出張先で撮影した映像やスライドなどのコンテンツをあらかじめストリーミングサーバに転送しておき、授業資料として活用した。また、P2P によるリアルタイム通信により、出張先からの映像と音声により講義を実施した。</p> <p>4年の「長期実務実習前特別演習 I～IV」（通年・6単位）では、4年間に学んだすべての科目を対象として、演習問題形式で総合的なまとめ学習を行うが、システムには、この演習問題が登録されている。学生は事前学習として演習問題を解いた上で授業に参加する。教員は学生の学習履歴を把握した上で対面授業において演習問題の解説を行い、さらに、学生は事後学習として問題の演習を自宅などの教室外で行う。</p> <p>5年に実施される「長期実務実習」は臨床現場における参加型の実習であり、11週を1クールとした2クールが学外の医療機関で実施される。医療機関は北海道の広域にあるため、学生は長期にわたって大学から離れて実習を行う。実習の時間配分は医療機関によるが、原則として午前9時から午後5時まで実施され、たとえば、薬局の場合には「計数・計量調剤」、「薬剤管理指導業務」、「注射剤調剤」などの実習が行われる。実習終了の1時間くらい前にシステムを通して日誌などの作成を行う。日誌には、実習内容、薬学教育における到達目標(SBO)の達成状況、実習における気づき、明日の目標などを記入する。</p> <p>6年次の「医療薬学総合講義 I・II」などでは、1年間を通して7回の学力判定試験（アセスメントテスト）を実施し、6年間に学んだ知識の理解度を判定する。</p>
<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<p>本取り組みでは、6学年全ての科目を対象とした本学独自の ICT 教育支援システムをツールとして活用している。以下ではいくつかの授業科目での活用例を紹介する。</p> <p>(1) 長期実務実習前特別演習 I～IV（4年）</p> <p>4年次の長期実務実習前特別演習 I～IVに対するシステムは本 ICT 教育支援システムの根幹となるものである。ここでは、対面授業で解説される演習問題が登録されているが、登録されている問題数は 8,144 題と授業時間だけでは扱えない程の量となっている。この量の演習問題をもって、ICT 教育支援システムにより時間的・空間的な制約のない学習環境を整え、対面授業前後の事前学習と振り返り学習として、システムを通じた主体的な学習を学生に促している。また、システムは4年次のみでなく、6年間を通して利用できるようにしており、システムの利用履歴</p>

を基にした学習ポートフォリオも作れるようにしている。

ICT 教育支援システムを活用した本取り組みには、薬学部の全教員が組織的参加している。まず、演習問題は全て教員が自作したものであり、1年間をかけて計画的に制作した。さらに、システムには、問題を作成した教員へ学生が質問メールを送信したり、学生が対面授業での詳細な解説を要望する「しおり」を付加できる機能も設置することで、学生の事前学習の結果を反映した双方向性のある対面授業を教員が実施できるようにしている。

#### (2) 長期実務実習（5年）

長期実務実習を支援するシステムでは、実習の振り返り学習として日誌や週報を作成する。日誌を作成する際には、その日に実施した SBO を選択するが、パッケージ化された多くの他の実務実習システムとは異なり、本システムでは、学生自身が主体的に SBO を選択する設計としている。SBO が正しく選択されているかの判断は実習先の指導薬剤師が行う。大学側の教員は、システムを通して日誌や週報などの情報を共有することに加え、学生とのメッセージ交換を通して、大学を離れて一人で実習を行っている学生の心理的なケアもするようにしている。

#### (3) 医療薬学総合講義 I・II（6年）

医療薬学総合講義 I・II を支援するシステムでは、1年間を通して7回実施される学力判定試験に出題された問題の解説を閲覧できるようにしている。登録されている問題数は 6,541 題であり、解説をデータベース化したことで数年前の試験内容も容易に閲覧できるようになり、学生の学習の幅を広げられるようにしている。

#### (4) 教務支援システム（全学年）

6 学年全ての科目を対象とした ICT 教育支援システムにより、「教室外における主体的な事前・事後学習、教員の組織的参加による双方向性のある対面授業、学生による主体的学習の動機付けとなるアセスメントテスト」のステップを組み合わせた学習サイクルを確立するようにしているが、このサイクルをより活性化させる仕組みとして構築したのが教務支援システムである。

種々のシステムの中でも、出欠管理を行う教務支援システムに関しては、欠席回数により定期試験の受験資格が決まることなどもあり、以前より利用率が高かった。この利用率を、学習サイクルの活性化に役立たせようと考えて制作したのが教務支援システムである。このシステムでは、全科目の履修と出欠情報を管理する機能や、授業担当教員と学生が双方向にメッセージ交換できる機能などがある。このような教務に関わるシステムも自作した点は ICT 教育支援システムの特徴であり、これらのシステムに対しては LDAP によるシングルサインオンができるなどの統一性をもたせた。これにより、例えば、学生が自らの出欠を確認したあと、続けて、「長期実務実習前特別演習」の演習問題を解くなど、1 題でも多くの問題を解く流れができるようにした。他大学でも、教務システムを LMS などと連携させた例があるが、学習サイクルの活性化となるような設計で連携させた例は過去にないものと思われる。

#### (5) 遠隔授業システム（1年）

以上の ICT 教育支援システムに加えて、海外などどこからでも授業を発信することが出来る遠隔授業システムも自作して ICT 教育支援システムに組み込んでい

●講義・演習・実習●全学的な ICT 教育支援システムの導入

	<p>る。遠隔授業システムによる遠隔授業も欧州（イタリア、ドイツ、スイス、ロシアなど）やアジア（台湾、香港、シンガポール、上海など）から 10 回以上実施して、ICT の可能性を実感してもらうとともに、ICT を利用した学習へ良い刺激を与えるような取り組みも続けている。</p>
<p><b>学 習 成 果</b> (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>ICT 教育支援システムによる学習サイクルの確立により、学生による主体的な学習時間が確保されることで、基礎薬学・社会・医療薬学領域における薬学専門知識を習得できた。具体的なシステムの利用率としては、試験前などには、1 日だけで 1 万題以上の回答送信があり、普段でも 100～1,000 題の送信が記録されている。また、システムの対象学年である 4 年生の回答送信数は 2011 年の 1 年間で 50 万題(一人あたり 3,300 題)と、対面授業との組み合わせでシステムの利用が定着している。さらに、システムの利用時間であるが、7～11 時の通学時間帯に利用のピークが現れるのが特長である。この時間、モバイル端末からの利用率が約 7 割となっており、長い通学時間を逆に学習時間の確保へとつなげられた結果であると考えられる。</p> <p>なお、4 年次に全国の薬学部で共通して実施される実務実習前共用試験（薬学 CBT）では、薬学 CBT が実施されて以来 4 年間、本学の受験生は 100%の合格率を記録し続けている。</p> <p>また、実務実習支援システムでは、1 年間で提出される日誌と週報の枚数は 1 万 7 千枚に上り、教員とのメッセージ交換などを通して未提出のレポートは 1 枚もなく、提出率は 100%を記録した。これらのことから、日誌作成など実習の振り返り学習も定着しているものとする。</p>
<p><b>学習成果の評価・測定の方法</b></p>	<p>本 ICT 教育支援システムでは、ハイパーリンクではなくすべて submit ボタンにより画面遷移させることで、ユーザー情報も含めた詳細な利用履歴(ログ)を取得している。システム運用開始からログの総数は 610 万件を超え、貴重な学習履歴データとなっている。これを基に、本システムが利用されているのか、また、学習時間が確保されているのかを検証している。</p>
<p><b>本科目についての学生からの評価</b></p>	<p>本 ICT 教育支援システムには学生へ種々のアンケートを行う機能も常設している。その中で、「主体的学習に学習支援システムが役立ったか」を 5 段階評価で問う項目では 6 年生の平均で 3.9 点との結果を得ている。また、遠隔授業の効果を問うアンケートでは 4.2 点、授業評価アンケートでは 4.6 点などと、薬学部全体の授業評価アンケートの平均 3.7 点と比較して高い評価を得ている。</p>
<p><b>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</b></p>	<p>薬学部学生の 1 つの目標である薬剤師国家試験合格のためには、授業時間以外にも多くの問題演習を行うなど、主体的に学習時間を確保することが求められる。これを促す手段として、全国的にも、薬学教育においては ICT を用いた教育支援システムに寄せられる期待は大きい。しかしながら、導入される教育支援システムがパッケージ化された製品である場合には、大学独自の教育手法を実現することは難しいと考えられる。また、授業科目毎に個別のシステムが導入されているケースが多いため、システム間の設計に統一性がなく、一貫したカリキュラムの中での学びの連続性に欠けることも多いと考える。この結果として、ICT を用いた教育支援</p>

●講義・演習・実習●全学的な ICT 教育支援システムの導入

システムを導入したとしても、時間の経過とともにシステムの利用回数が減少してしまい、教育改善効果へ結びつけることが難しくなっているケースが少なくないと考えている。

そこで、私は、これらの問題を克服するためには、まず、教育支援システムを活用する場合には開発を学外に委託するのではなく、大学独自の教育手法を具現化するべく、教員自身が教育支援システムを制作することが不可欠であると考え。もう1つが、特定の科目を対象とした教育支援システムではなく、学びの連続性を確保すべく、すべての授業科目を対象とした一貫した教育支援システムを構築することが重要であると考え。さらに、このような取り組みを成功させるには、学部、そして、大学全体が組織的に取り組みに参加・協力する仕組みが不可欠であり、これらの要件をそろえることで、ICT を用いた教育支援システムをより有効なツールとして活用できると考える。

(1) PBL の風景と実務実習におけるシステムを使った日誌作成の風景



(2) 教室に設置された PC によるレポート入力や情報検索の風景



(3) 遠隔授業の風景



授 業 風 景

その他の特記事項

実務実習の支援システムに関しては、オープンソースとして北海道の3大学（北海道大学・北海道薬科大学・本学）が共通で利用できるようにしている。これにより、受け入れ実習生の多い病院などの施設における指導薬剤師にかかる人的負担を軽減するようにした。また、3大学での指導や評価の統一化といった教育的な効果ももたらしている。

なお、本取り組みに関しては、「学際的チーム体制により開発した薬学6年制教育支援システムと主体的な学習時間の確保」として、平成24年度 ICT による教育改善研究発表会において私立大学情報協会より奨励賞を受賞している。

# プロジェクトゼミ I、II、III、IV

## 北海道工業大学

未来デザイン学部 人間社会学科

三上行生教授、藤田勝康教授、濱谷雅弘教授、

碓山恵子准教授、佐々木智之准教授、坂井俊文准教授、梶谷崇准教授

<b>科目の位置づけ</b>	<p>本学科では1年生から4年生まで、少人数ゼミが学びの形態として一貫している。2、3年生のプロジェクトゼミはその中核に位置づけられる。1年時に少人数の基礎ゼミ（前期・後期の必修科目）で大学生としての基礎的なスキルを身につけ、2、3年生のゼミへと発展していく。3年時のプロジェクトゼミがそのまま4年時の卒業研究ゼミに上がる。</p> <p>1年基礎ゼミ：大学生のスタディスキルの習得、少人数によるグループダイナミクス</p> <p>2年プロジェクトゼミ I・II：プロジェクト型課題追究による実践力の育成</p> <p>3年プロジェクトゼミ III・IV：プロジェクト型課題追究による実践力の熟成</p> <p>4年の卒業研究に向けてのアプローチ</p> <p>4年卒業研究：個人またはグループによる学術的課題追究</p>
<b>受講（登録）学生数</b>	66名（2年生26名、3年生40名）
<b>科目の到達目標</b>	<p>①プロジェクトを立案し、実行する一連の流れを理解し、実践することができる。</p> <p>②グループ活動の方法やルールを理解し、円滑な活動方法を身につける。</p> <p>③活動やその成果について効果的なプレゼンテーションや報告の方法を理解する。</p> <p>④各プロジェクトに関する専門的な知識を習得する。</p>
<b>教育方法の特徴</b>	<p>少人数グループによるプロジェクト型課題追究である。手法はアクティブラーニングを用いているため座学の割合は極めて小さい。学生はゼミごとにテーマや課題を設定し、計画を立て、実践し、成果と課題を省察する。テーマや課題の設定方法は大きく分けて3つのタイプに分かれる。</p> <p>A) 指導教員が具体的な活動内容まで用意し、学生との話し合いを経て決定する。</p> <p>B) 指導教員はある程度の領域（企業研究、地域活性化、社会問題など）を枠組みとして提示し、その中で学生の主体性や独自性を出してテーマや課題を設定する。</p> <p>C) 学生が独自に追究したい課題を見出し、実践、省察をする。指導教員は課題設定、実践のプロセスでコーディネーターやファシリテーターとして学生をサポートする。</p>
<b>教室空間の特徴</b>	基本的には各ゼミ室を使用するが、ゼミの内容によって活動場所が学外になることもある。

<p><b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b></p>	<p>平成 24 年度プロジェクトゼミ報告会 最終週 (15/15 回目) に実施。 場所は合同講義室 (およそ 200 名収容の階段教室) で、ゼミごとに座席指定。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 学科主任教授からの挨拶 (5 分)</li><li>2. 趣旨説明 (3 分) 科目担当教員より 各ゼミの発表を聞いて、感想用紙にコメントを書くように指示をする。</li><li>3. 各ゼミからの活動報告 1 ゼミの持ち時間は発表 5 分 どのような目的、ねらいで、どんな活動を実践し、何が成果として得られたかを発表する。5 分の発表に対し 3 分の質疑応答を 7 つのゼミに対して行う (全体で約 60 分)</li><li>4. まとめのことば 科目担当教員より (5 分) 話す内容をそのままスライドに書き、スクリーンを見てただ読んでいるだけの発表は プレゼンテーションではないことを指摘。</li><li>5. 報告会についての省察 (15 分程度) 他者の発表を聞いて、他のゼミの良さや自分のゼミの改善点などをシートにまとめる。各ゼミ室に戻ってからグループでフリートーキングを行い、共有化を図る。</li></ol> <p>※後日コメントを書いたシートを回覧し、他のゼミからの反応を知る。</p>
<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<p>A) 学びの手法によるツール 多様な形式の話し合い 少人数グループによるディスカッション、企画立案の素地を作り上げるためのブレインストーミング、ファシリテーションなど、学生の多様な発想を引き出し、具体的なアイデアを構築するためのコミュニケーションアプローチを駆使している。</p> <p>B) 物的ツール：札幌市手稲区ゆるキャラ「ていぬ」 時代はまさにゆるキャラである。全国各地でゆるキャラによる地域活性化、イベントのマスコットキャラクター、商品化などが加速している。ゆるキャラはもはやひとつのビジネスモデルとなっている。本学科の複数のゼミが、ゆるキャラ「ていぬ」を用いて手稲区とコラボレーションを行った。学生自身がゆるキャラの中に入り、幼稚園訪問、環境キャンペーンのキャラクターなど活用の用途は多様であった。</p>
<p><b>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</b></p>	<ol style="list-style-type: none"><li>1. コミュニケーション能力：多様な他者と能動的にかかわることができる 事例 1) あるゼミでは学生が学長に取材を依頼し、インタビューを行った。普段接する機会が少ない学長と直接対話するという貴重な機会を通し、真の対話力を習得した。 事例 2) 地域とのふれあい 札幌市手稲区主催「手稲夏あかり」の準備段階で学生は小学校を訪問し、提灯の作成を指導した。いかにわかりやすく伝えるかを工夫し、実践する力を高めた。</li><li>2. 企画力：情報を収集、関連付け、再構成しオリジナリティーを生み出す ①柔軟に発想し、自分を取り巻くさまざまな情報をもとに独自のテーマを設定する力</li></ol>

事例1) ゼミのテーマ 平成25年度のプロジェクトゼミ企画発表会で紹介されたもの

SPI問題への取り組み、高齢化社会研究、ビジネスシミュレーション、手稲夏あかり(札幌市手稲区の祭り)への参画、農業体験、商品開発、高校でディベートの出前授業、ロックバンドのプロモーションビデオ作製、企業研究などと、多岐にわたっている。

②会議に提案する内容を「企画書」にまとめる力

③企画内容を相手に受け入れられるように提示し、説明する力

事例2) 商品開発

学生が企業と共に企画し、共同開発した食品(豆王)が商品化され、現在ローソンで市販されている。

3. 実践力:自らデザインした企画をもとに具体的に行動することができる

特に学外での活動で、予測のつかない状況や事態が勃発したときの臨機応変な対応ができる。

4. 省察力:報告会の開催

単なる反省ではなく、自己評価の視点、基準と規準を明確に立て、客観的に分析し、その後で反映することを想定した省察ができる。

1. 評価対象能力と配点(知識力50:応用力50:展開力10)

知識力:プロジェクトテーマの背景となる知識を身につけてられたか。

グループ活動のルールやマナーを正しく理解しているか。

外部の機関と対応する上でのマナーやルールを理解しているか。

応用力:議論を通して問題点や実行方法などについて分析し実行しているか。

調査・研究およびグループ内の議論を踏まえてプロジェクトおよびグループ活動の方法や計画を立案できるか。

展開力:さまざまな知識やスキルを応用して、効果的な方法を考案し、グループ内で

重要な役割を果たすなどして、プロジェクトの成功に向けた効果的な取り組みを行っているか。

2. 評価の場面

評価の場面1) プロジェクト活動中

企画会議の録音による談話分析、核となる活動への取り組みにおける他者との協働状況、書類作成などの事務能力、外部との関わり方

評価の場面2) 活動報告の準備

発表方法の工夫、内容の取捨選択と発表内容の構成、他者との協働状況

評価の場面3) 報告会のプレゼンテーション

発表時間の有効活用、スピーチにおける表現力(滑舌、声量、ノンバーバルコミュニケーション要素への配慮)、聴衆の感想用紙に書かれたコメント

評価の場面4) 有形の成果発表物

## 学習成果の評価・ 測定の方法

映像、印刷物などの内容

本科目についての学生からの評価

学生による年度末の「ゼミ活動自己評価レポート」より引用  
「ゼミは部活動とは違う忙しさと緊張感が伴う。私は人前に出て話すことに慣れるような活動がしたいと思い、人間社会学科に入った。1年間のゼミ活動を通して人前に出て話すことに耐性がついた。場数を踏んで自信がついたのだと思う。ゼミ活動によって自分がこの学科を選択したねらいは満たされたと言える」。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)

1. アクティブラーニング

昨今 PBL (Project-Based Learning), アクティブラーニングが大学の授業を改革する視点として脚光を浴びているが、それらをあくまでも「手法」としてとらえる。手法としてのアクティブラーニングは、単体では機能しない。学習者が自ら課題となる対象を見出し、自分とのかかわりをとらえ、内発的動機づけを土台に学びの企画をし、実践方法を工夫しながら実践していくプロセスの中に、他の学習活動と有機的な結びつきをもちながら位置付けられるとき、初めて存在の有効性が発揮される。

2. 省察の重要性

ディベートやディスカッションは、学生が活発に他者とかかわり合う様子を可視化しやすいためアクティブラーニングとして注目されるが、重要なのはその活動によって学習者の学びがどのような価値を有したかという点であり、それを学習者自らが振り返ることなしには有効な学びとはならない。狭義の「アクティブラーニング」は学習者が能動的に他者とかかわり合う学習活動と定義されるであろう。ここでさらに視野を広げる必要がある。能動的にかかわる対象は他者ばかりではなく自らの学びそのものも含まれる、ととらえるとアクティブラーニングの概念に深まりが生まれる。大学生に求められる能動的な学びとは、「学習者が自分の取り組んだ活動に対して、自ら視点を立て、分析的、内省的に振り返ることができる」ことである。そのような学習の流れをデザインすることが指導者に求められている。

授業風景



●必修科目●少人数グループによるプロジェクト型課題追究



人間社会学科3年生が地域の幼稚園を訪問し授業に参加した。

# コミュニケーションスキル

明海大学

外国語学部・経済学部・不動産学部・ホスピタリティーツーリズム学部  
授業担当 12名

## 科目の位置づけ

明海大学浦安キャンパスでは「人間力形成教育」「キャリア形成教育」「専門教育」「基礎教育」の4分野で科目を構成している。「基礎教育」には「学修の基礎（Ⅰ～Ⅲ）」という1年生対象の必修授業がある。この「学修の基礎Ⅱ」はコミュニケーションスキルの向上を目指すものである。スタディプロモーション、数理スキル、情報リテラシー、などを学ぶ他の学修の基礎と併せて、大学における学びの基礎を培う役割を担っている。

コミュニケーションスキルの向上のためには、よき人間関係を築き得る真の意味での日本語運用能力を育成しなければならない。真の意味での日本語運用能力とは、単に読み書きができるということだけでなく、情報を的確に理解し、正確かつ能率的に表現・伝達することができ、かつ自己の意見や要望を他者に違和感なく受け入れさせることができるということである。この意味での日本語能力を育成することを目標とする。

## 受講（登録）学生数

1132名（2013年5月22日現在）

## 科目の到達目標

1. 基本的な漢字・語句について正しく理解、表現できる。
2. 文字情報の伝達行為は読み手とのコミュニケーションであることを認識し、一般的もしくは専門分野における入門書レベルの文章を読んで大意を把握し、読み手を意識して分かりやすく文章で表現できる。
3. スピーチ、会話、グループディスカッション、面接など、様々な言語使用場面に相応しい表現方法を理解し、聞き手を意識して内容を構成し、分かりやすく伝達できる。

## 教育方法の特徴

20人程度の少人数制クラスでの課題の遂行を通じて、自己モニタリング能力の育成を目指した自己評価やピア・レスポンスなど学生同士による他者評価を経験させ、漢字・語句、文字情報、音声情報の3つの分野における伝達能力の向上を図っている。

オリジナル教材では、漢字・語句の反復学習が毎回用意され、文章の要約、図表の説明、スピーチ、面接、ロールプレイ、グループディスカッションと回を追って課題が変わり、情報発信の対象や表現方法など段階を踏んで多様な表現を経験できるようになっている。また、DVD教材を使用して、発話態度や発声など伝達態度も含めた日本語表現を学べるようにしている。さらに、留学生も混在しているクラスもあることから、オリジナル教材の内容を平易に表現した別冊教材も作成、使用している。全ての授業において一貫して強調しているのは、中心文と支持文からなる論理的な構成をすること、作文する際に聞き手や読み手を意識した表現をすること、思考・産出の過程において自己モニタ

●必修●オリジナル教材を使用した少人数制クラス

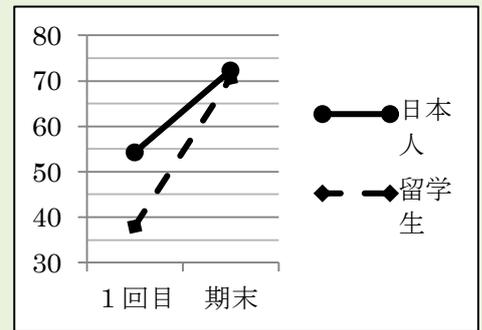
	リングを行うこと、などである。
<b>教室空間の特徴</b>	<p>可動式の机が配備されている教室で、グループワークや面接など多様な教室活動に対応している。ホワイトボードやOHCを利用した作文の推敲過程の検討など、文章産出のプロセスを教室全員で同時に体験できるようになっている。さらに、プロジェクターやDVDプレーヤーを利用し音声情報を提供し、録音・録画による自己モニタリングも行っている。</p> <p>マイク、インターネットなど活動を更に展開する際に必要な設備も整っている。</p>
<b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b>	<p>各回最初の20分は漢字・語句の学習で、残りの70分で文字情報、あるいは、音声情報の伝達能力の育成をはかる。例えば「スピーチ原稿の作成」の回では、20分の漢字・語句の学習の後、20分アイディアの抽出：マインドマップによりアイディアを拡散、20分プランニング：序論・本論・結論の構成で展開を考える、20分文章作成、10分推敲を行う。</p> <p>他の回の文字情報から音声情報の内容は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 文章理解（パラグラフィティング）：段落内に中心文と支持文があることを学ぶ。</li><li>2. 文章作成（課題環境としての読み手意識）：読み手を意識して文章作成することを学ぶ。</li><li>3. 構造化（文章の展開）：複数段落の一つの構成として序論・本論・結論の構成を学ぶ。</li><li>4. 推敲（形式面の点検）：文体の統一、誤表記や文のねじれの修正などを学ぶ。</li><li>5. 図表：図表を文章で説明する方法を学ぶ。</li><li>6. スピーチ原稿作成</li><li>7. スピーチ（発表）：アイコンタクトや声量などに注意を払いスピーチを発表する。</li><li>8. ロールプレイ：会話の目的に応じた適切な談話展開と待遇表現を学ぶ。</li><li>9. 面接：中心文と支持文からなる自己PRの文章作成をし、面接の場で発話する。</li><li>10. グループディスカッション：ペイオフマトリクスなどを使って課題解決型グループディスカッションを行う。</li></ol>
<b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b>	<p>携帯電話の録画、録音機能をスピーチに利用。スピーチ終了後に録画・録音を視聴し自己評価を行う。学生同士で携帯電話を使い録画し合うことで、同時並行でそれぞれが映像を確認し、自己評価する時間を確保することができる。</p>

●必修●オリジナル教材を使用した少人数制クラス

**学 習 成 果**  
(学生は何ができるようになったのか)

学修の基礎Ⅱのコースを専門に担当している専任教員3名の担当クラス(日本人学生111名と留学生32名)の1回目のテストの点数と期末テストの点数をもとに、反復測定分散分析を行い、その学習成果を確認したところ、全体的に有意な伸びが見られた( $F(1,141)=369.763, p<.001$ )。

留学生は、1回目の点数で日本人との差が見られたが( $F(1, 141)=26.531, p<.001$ )、その伸び率は日本人学生より高く( $F(1,141)=45.532, p<.001$ )、期末テストでは日本人と同程度の成果が確認されている。現在、多くの大学で留学生向けの日本語クラスが設けられ、留学生教育のあり方が模索されている中で、この結果は示唆に富むものである。



**学習成果の評価・測定の方法**

学修の基礎Ⅱでは、第1回目と第15回目の授業でテスト(100点満点、所要時間約1時間)を行っている。そのテストは、文章を書く問題(要約、スピーチ原稿)、単語レベルで書く、あるいは選択する問題(漢字の読み書き、漢字構成、語彙、敬語)、文レベルで誤用を訂正する問題(文法、敬語)から成る。このテストの結果にもとづき学習成果を確認した。

**本科目についての学生からの評価**

2012年度後学期に大学全体で行われた学生からの授業評価において、本科目の「満足度」は概ね高く、5点満点中4.31点(科目区分内平均)であった。担当教員3名が、文章を読む時、書く時、スピーチをする時に意識するようになったポイントについてアンケート調査を行った。調査内容は次の通りである。

- I. 読む時 1) 読み手 2) 構成 3) 中心文・支持文 4) 話のポイント
- II. 書く時 1) 読み手 2) 構成 3) 中心文・支持文 4) 適切な文法や表現

5) 誤字・脱字

- III. 話す時 1) 声の調整 2) 聞き手の目 3) 聞き手の反応 4) 原稿を見ない。

上記13項目について意識する度合いを6段階スケールで記入してもらった。177名からの回答を得たが、中でもII. 書く時の2)「構成を意識する」学生が顕著であった。

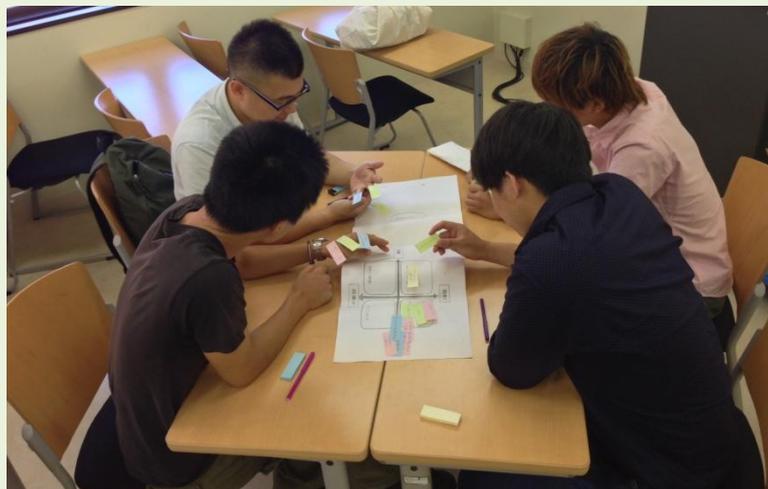
このほか、「中心文・支持文などを考えるのが難しく、文の構成に手間取った」「いろいろな情報をどうつなげるか難しかった」などの学生からのコメントから、文章構成への意識の深化が伺える。「スピーチのテーマに関して全く知らない人にも分かるように伝わりやすい文章で書きました」というコメントもあり、書く時に学んだ内容を話す時にも応用している学生の存在が明らかになった。

●必修●オリジナル教材を使用した少人数制クラス

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

メタ認知能力の育成を目指す。学習者自身が自分の言語活動を客観的に捉えられるようになること、自己モニタリング能力を養成することを目標としている。例えば作文指導では教員の添削による文章の修正ではなく、学習者自身がよりよい文章作成のために推敲を重ねるよう促し、自律学習へと導くようにしている。さらに、授業という他者とともに学ぶ環境だからこそ学べる事を十分に活用させるようにしている。

授業風景



これは、グループディスカッションでペイオフマトリクスを使用している場面である。

その他の特記事項

この授業の成果については、2013年8月、日本教育心理学会において「コミュニケーションスキルの習得を目指した初年次教育」というタイトルで発表を行う予定である。

# サイエンス・ボランティア入門 I・II

名城大学

理工学部数学科

川勝 博 他、総合数理教育センター教員

科目の位置づけ	21 世紀の科学者、技術者にとって大切なサイエンス・ボランティアの意義を体験的に学ぶ。受講生は、あらかじめ数理科学実験に関する知識と方法の指導を受け、本学や名古屋市などが企画する児童・生徒（以下、「生徒」）・成人向けなどの科学実験のイベントに参加する。その運営を通して、多様な参加者とのコミュニケーションの大切さやあり方、意味を学ぶ。
受講（登録）学生数	20 名程度 （本登録の学生は 1 年生を中心に、この半分以下だが、他は既に単位を取った学生を含めて、毎年学ぶことを希望して参加している。他大学の学生も希望しているが、今のところ単位認定は遠慮願っている。しかし、当日は協力して参加し、ときに 40 名程になる。）
科目の到達目標	①数理科学教育イベントで生徒・市民に喜ばれる実験教材を学ぶが、なぜそれが喜ばれるのか理解できる。②実験イベントで、放置し過ぎず、教えすぎず、生徒に応じた実験指導ができる。③サイエンス・ボランティア活動の意味が体験的にわかり、それを文章で表現できる。
教育方法の特徴	【オリエンテーション】 ①サイエンス・ボランティアの意味について、科学の歴史等も交えながら紹介する。②また、予定される実験科学ボランティア活動の過去の学生たちのビデオを視聴する。③分担して実施が予想される実験群を先生がいろいろ紹介する。④参加者同士が自己紹介し、担当する実験を自分で選び、実験ごとにグループ分けをする。⑤次回以降の自主的実験日時、内容、研修計画を定める。 【ボランティア準備（その 1）】 オリエンテーションで定めた日や時間帯に、各グループごとに、所定の場所に集まり、幾つかの数理科学実験教材についての原理を学び理解し、道具をそろえ、プリントを作り、参加するイベントの準備を行う。 【ボランティア準備（その 2）】 オリエンテーションで定めた日や時間帯に、各グループごとに、所定の場所に集まり、準備した企画をロールプレイングで生徒側とコーチ側に分かれ、参加者同士で模擬的に再現し講評をし合い、確認する。不都合なことがあれば、それを修正し、補い、本イベントに備える。
教室空間の特徴	この講義は集中講義であるので、毎週決められた時間に講義を行う訳ではない。よって原則として時間割に記された授業科目と重なることのないよう

	<p>に、受講者と相談の上、夕方以降、または日・祝日に開講するように配慮する。なお後期のサイエンス・ボランティア入門Ⅱは、ボランティアの内容をさらに発展させ、自主企画できる力を身につけることが目標なので、前期のサイエンス・ボランティア入門Ⅰで体験を積んでおく必要がある。よってあらかじめサイエンス・ボランティア入門Ⅰの科目を、履修していることが望ましいことを指導する。</p>
<p><b>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</b></p>	<p>【サイエンス・ボランティア実習 当日（その1）】 実験道具を運び、イベントのブースの設置準備を行う。自分の担当だけでなく、遅れた他のブースの準備も手伝い、実験道具の補修をおこない、イベント実施時のサイエンス・コミュニケーションに余裕が持てるようにする。</p> <p>【サイエンス・ボランティア実習 当日（その2）】 イベントに参加をして、数理科学実験ブースの運営を手伝う。またこれを通してサイエンス・コミュニケーションのあり方を、他の受講者の振る舞いや教師の振舞いから学ぶ。</p> <p>【サイエンス・ボランティア実習 当日（その3）】 参加をしたイベントの数理科学実験ブースの片づけを行い、道具装置を大学に返却する。またこの間、参加学生の参加に当たっての事前の意図と結果の相違についての感想を述べ合い、総括レポートの参考にする。 これらは、例えば《水ロケット》の製作準備、製作、飛ばし、片づけを想像してください。</p> <p>【最終講義日 反省会とまとめの日】 イベントの準備や実行を通して学んだこと、反省点などを話し合う。また、それらをまとめ、レポートを提出する準備とする。つまり ①実験の概要とその図 ②その原理と教育的意義 ③配布プリント ④ブース運営時のコミュニケーション体験の事例報告とその教訓 ⑤サイエンス・ボランティアの意味についての学習のまとめと体験による感想。</p>
<p><b>授業で特に使用している ツールとその活用法</b></p>	<p>この科目では、生徒がやってみたいと思う楽しい実験講義の製作を中心にしてボランティアを行っている。</p> <p>手を動かして製作する活動は生徒の思考を大きく発展させる。生徒がこうしたい、工夫したいと思うやり方を支援するように学生はアドバイスする。何度も作り変え、次第に良くなっていくプロセスは生徒が熱中する。それを見て学生もまた生徒一人一人の多様なプロセスを大切にしたい指導のあり方を学ぶ。</p>
<p><b>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</b></p>	<p>例えば、水ロケットでよく飛ぶようなものを考えるなら、その製作マニュアルを教えれば良い。しかし、まず飛ぶ最小限の型を教え、後は生徒の自由に形を選ばせる。たとえ変な形で飛ぶことが少なくとも、もう一度改良して、自分の工夫で飛ばす距離が伸びていくことが生徒にとっては楽しい。</p> <p>この多様な工夫のプロセスの大切さ。それが生徒の喜びであることを理解できること。それを指導できることの意味を知ることが大切である。</p>

●専門教育部門・理工学部基礎科目・自由科目●科学イベントにボランティアとして参加

**学習成果の評価・測定  
の方法**

平常点 50 点、レポート、イベントへの参加日姿勢 50 点。

この科目では、他の科目ではなかなか得られない実験が習得できる。また多様な学生との交流、多様な生徒・成人との科学を通してのコミュニケーションができる。この経験は貴重で、この科目で、サイエンスコミュニケーションを、しっかりと学んだかどうかをみる。

これは平常の活動・反省会におけるレポートでこれをみる。

**本科目についての学生から  
の評価**

言うまでもなく、学生の単位修得を超えて、「来年も参加したい」「卒業しても参加したい」と 80%の学生が考える。生徒が主体的になり、自分の教育指導のあり方を体験的に学べるからである。

# 症例解析演習 I

## 明治薬科大学

薬学部／薬学科

石橋賢一、越前宏俊、庄司 優、池上洋二、植沢芳広、  
大野恵子、花田和彦、佐野和美、野澤玲子、小川竜一

<b>科目の位置づけ</b>	医療薬学の基本および代表的な疾患の病態生理、臨床症状、標準的な薬物治療を理解するために、薬物治療学 I～VIを開講しているが、3年次までに修得した薬物治療学 I～IVの基礎知識をもとに、 <u>問題志向型アプローチ</u> で各症例の治療上の問題点を抽出し、患者の病態に応じた薬物選択をトレーニングしている。なお、同時期には5年の実務実習の準備に当たる事前実務実習および薬物治療学V（癌、緩和医療）も開講している。
<b>受講（登録）学生数</b>	4年生 A組 143名、B組 141名、合計 284名が履修。各組を2グループ（70名前後）に分けて、組ごと別曜日で2つの講義室に分かれて、 <u>4~6人の班ごとに SGD (small group discussion)</u> をおこなう。
<b>科目の到達目標</b>	<ol style="list-style-type: none"><li>1) 病態生理学、臨床検査学、薬物治療学などの知識を総動員して、模擬症例について個々の患者に適切な薬物治療を提案できる。</li><li>2) グループで学習し、その成果をまとめて質疑応答ができるコミュニケーション能力を身につける。</li><li>3) 患者の臨床的問題点（プロブラムリスト）を列挙して優先順位がつけられる。</li><li>4) 複雑な臨床症例を解きほぐしながら、診断・治療の糸口を発見できる。</li></ol>
<b>教育方法の特徴</b>	薬剤師には個々の患者の臨床的問題について薬物治療を中心に、速やかに解決できる（トラブルシューティング）能力が求められている。自分で調べた患者について、自分のアセスメントプランを短時間でみんなにプレゼンテーションをすることを繰り返し、聴衆や教員とディスカッションすることで臨床医学の理解を深める。さらに病気だけでなく患者のケアについても理解を深め、患者中心の医療を実践できるようにサポートもする。 <u>情報をまとめ症例について分析するのは学生であり、教員は判断の仕方や行動に焦点を当ててフィードバックする</u> 。5年生の臨床実習にそなえる実践的な内容を体験する。患者の問題を学生同士で話し合いながら解決していく。全体討議を通じてより適切な解決方法を模索する。教員の関与を最小限にすることで、学生の主体性を引き出す参加型の授業ではあるが、全体討議を通じて新たな知識を得ることもできる。 <u>1週間の間に各自が調査・理解することができる</u> 。 <u>3症例（6週）を経験することで、積み上げてSGDや調査の経験を深めることができる</u> 。 <u>症例ごとに各自がレポートを提出することで理解度を学生自身と教員が確認することができる</u> 。
<b>教室空間の特徴</b>	1講義室で、70名が4~6人の班ごとにSGDすることで、 <u>1人の教員でもマネージできる</u> 。マイクを使うことで教員のコメントはSGD中でも学生全員で共有できる。前後2つの3人がけ机（固定）で5人討議するので、机が固定された講義室でも行うことが可能。 <u>模造紙（50cm×100cm）に議論を記入することで、お互いに共通の理解を確認しつつ、巡回する教員は議論の経過を目で確認することが可能である</u> 。また1週間後に引き続いて議論をするときの助けにもなる

●必修科目●模擬症例に対する問題志向型アプローチ

	<p>(黒板のように消えてしまわない)。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・ 時間配分</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 4～6人の班分けする。</li> <li>2. 1講義室では全班が同じ症例に取り組む。</li> <li>3. 第1週目1時限は教員（1名）がパワーポイントを使いながら<u>症例のポイント</u>を解説。</li> <li>4. 第1週目2時限は班ごとに SGD:大きい部屋の机の前後で模造紙に各班で症例の問題点を列挙しながら、<u>症例についての疑問について意見交換</u>を行う。教員（ときに複数）は巡回し、学生に質問する、或いは学生からの質問に回答し、全体で共有すべき質問の回答はマイクを用いて講義室全体に聴こえるようにする。<u>最後に学生各自が調べてくるべき課題を分担</u>して、模造紙に書き出し、教員に提出して第1週目が終了。</li> <li>5. 第2週目1時限は症例について SGD : 討議すべきことを教員が示し（模造紙を返却）、<u>調べてきたことを中心に議論</u>して SGD を終了する。教員（ときに複数）は第1週目2時限と同様に巡回する。</li> <li>6. 第2週目2時限は<u>全体でワークショップ形式による発表会</u>：1教員の司会で進行：症例に関する問題について質疑応答。黒板に症例の経過についてその流れがわかるように簡潔に記載し（1時限目に教員が行う）、班ごとに代表2名が前に出てプロブラムリストごとに模造紙をみながら議論した内容を口頭で紹介する。それに対して全体で司会者の誘導で議論する。最後に教員が10分ほどで<u>症例の種明かしとその後の経過</u>をパワーポイントを使って説明して、班ごとに模造紙を提出して終了。</li> <li>7. 学生は各自A4で1枚程度に<u>症例のサマリー</u>を記載し、次週の開始時に提出し1クール終了。</li> <li>8. これを3クール（3症例）おこなう。</li> </ol>
<p>授業で特に使用している ツールとその活用法</p>	<p>New England Journal of Medicine の Case Conference を訳したものを教材として用いる。症例の診断やその後の経過は伏せられている。各班に模造紙（50cmX100cm）1枚。本やパソコンによる検索は SGD 中では原則的にはおこなわない（問題点や疑問点をだすことが中心）。全体討議には黒板を用いて全経過を見渡せるようにする。教員の解説はパワーポイントをもちいて説明する。全体討論は録音して、科目ホームページにアップして、あとで自己学習できるようにする。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 症例の診断が伏せられているので、<u>診断の推理小説を読むような感覚で病気を考える</u>ことで、症例解析自体に興味があった。</li> <li>2) SGD 中は、本やパソコンによる検索は原則行わないため、議論に集中できた。</li> <li>3) 逆に知らないことが多すぎて、何を議論してよいかわからなかったり、知らないことに対してこれではいけないという<u>普段の学習姿勢への反省</u>も生まれた。</li> <li>4) 最後の全体討議では、1名より気が楽になるように<u>2名ずつで前に出て発表する形式</u>にしたので、質問の回答にゆずりあう面もあったが、自信をもって話せるようになった学生もいた。</li> <li>5) 通常より複雑な症例（合併症や複数臓器をまたがる）をあえて取り上げることで、臨床医学の奥深さを知ると同時に、学生でもチャレンジできるという自信が得られた。それによって、症例の問題点の把握といかに解決すればよいかという解決手段の選択にも関心をもってもらえた。</li> <li>6) 英語の症例であったので、<u>米国の医療事情にも興味</u>を持たせることができた。</li> <li>7) 和訳された教材を用いたが、原書を次週の授業までに読んできて、和訳されていない解説部分を理解してきていた学生もいたので、<u>英語にも挑戦してみよう</u>というインセンティブも生まれた（どの症例からの訳かは学生は教えられていないが、New England Journal of Medicine のバックナンバーを調べることで学生が自ら発見することは不可能ではない）</li> </ol>

●必修科目●模擬症例に対する問題志向型アプローチ

学習成果の評価・測定の方法

成績は、演習の参加度（出席、代表、質疑応答）20%、各自が症例ごとに提出したレポート30%、定期試験50%で評価する。なお、定期試験はA Bクラス別々の未使用の新しい症例でおこなった。試験2週前に科目ホームページに症例2つ（特定できないように年齢などをオリジナルから改変）をアップして、個人あるいはグループで勉強会などを通じて症例を調べて把握して試験に臨むようにした。試験は症例ごとに15問の選択問題を課して症例の診断だけでなくそれに至る道筋についても理解度が試験できるようにした（記述にすると独創的な意見が聞けるメリットもあるがオーソドックスな理解を求めるのが臨床では必要とされるので）。

本科目についての学生からの評価

授業アンケートを年度末におこなっている。その内容に関して教員は回答を掲示することになっている。症例が難しくよく理解できていない印象がある。基礎知識の不足によるところが大きく、むしろこれを経験することで能動的に学修に取り組む姿勢が醸成されることを期待している。理解の容易な教科書的な症例では記憶作業に終わってしまう懸念がある。推理のおもしろさを教育に入れることで、記憶作業のルーチンワーク（それも重要ではあるが）を超える学習体験を得ることができる。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

患者の問題を解決することがいかに大変かをいろいろなバイエーションを通じて学ばせることで、患者への奉仕の精神を養うだけでなく、プロとしての専門的な治療提案をするために学ぶべきことが山のようにあることを自覚させられる。3人がけの机を2つはさんで議論するのがちょうどよいが、それでも議論に参加できていない学生がみうけられた。3人か4人で行うのがより参加度を高める可能性があるなので3人で議論した後に2つのグループを合体して6人で議論するなどのバリエーションをつけるのもよいと考えられる。

授業風景



その他の特記事項

後期には、症例解析演習Ⅱとして、SOAP形式で症例を考えるという、さらに専門的な演習が用意されている。そのあとの5年次のカリキュラムの主体は臨床実習に移行するので、この科目

●必修科目●模擬症例に対する問題志向型アプローチ

は臨床実習の準備科目の役割も果たしている。なお、写真の上段は班ごとに2名ペアで代表が出て3班で互いに1つのプログラムリストについて議論している。黒板には症例の経過が時間経過とともに記載されている。スライド画面には検査データ（レントゲン、CT、心電図もふくむ）などが投影される。下段の写真は班の発表に関して代表2名以外のメンバーは起立して、ほかの班の発表に質問すれば座れるというシステムにして質問が出るように促している。学生は何も持たずに議論に参加できるように重要事項は頭に入れていることが求められる。

# 自立と体験 1

## 明星大学

鈴木 浩子、榎本達彦、百木 英明、太田 昌宏、南 愛 ほか 48 名

科目の位置づけ	2010 年度よりスタートした明星大学の全学初年次教育科目。 1 年生全員が必修科目として授業を受ける。 全学共通教育科目、1 年前期科目、必修科目、2 単位。
受講（登録）学生数	2,141 名
科目の到達目標	この授業の教育目標は、「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」である。 明星大学の教育目標は「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」（自分の夢の実現に向けて努力し、他の人のために役に立つことのできる人を育てること）であり、この授業を通して自分の理想や目的を明確にしなが、社会貢献への道筋を学生一人ひとりが探すことを目標としている。
教育方法の特徴	1 クラス約 30 名で、全 68 クラスで授業が行われる。1 年生前期科目、全学必修科目で開設。最大の特徴は、学部学科横断型クラス編成である。 短い講義と個人学習、グループ学習を通して様々な学部学科に入学する学生と交流し学びあっていくアクティブラーニングである。学生に配布するポートフォリオを用いて、統一した教案をもとに、担当教員がファシリテーターとして授業を進めていく。担当教員は、授業手法や授業内容に関する事前研修を受ける。すべてのクラスに SA（スチューデントアシスタント）がつき、授業のサポートをする。サポートする SA も事前研修を受ける。
教室空間の特徴	約 30 名 1 クラスでの授業運営で、個人演習、グループ学習が中心となるため、移動可能な講義机、椅子の教室で行う。毎回グループワークができるように机を移動して授業を行う。合同授業では VTR の再生が可能な大教室を使用する。図書館の館内を使って展開する授業もある。
特定の回の授業の流れ・時間配分	下記の全 15 回の授業は、各回の教案に、授業の流れと時間配分（目安）が記載されている。（参考までに、*のある授業の教案を添付、ご参照のこと） 担当教員は、この教案に基づいて授業を行う。  全15回からなる授業は、「第一節 人と関わる」(1回～5回)、「第二節 人と関わる・学びのスタートを切る」(6回～11回)、「第三節 大学生活を見通す」(12回～15回)というテーマによって構成される。第二節(6回～10回)の授業は、複数クラス合同で行う授業が含まれるため、実施の順番がクラスによって異なる(ローテーション授業)。  シラバス内容

<b>前期</b>	
1	オリエンテーション
2	新しい環境で他者と出会う
※3	大学での学びを考える・・・別紙参照
4	聴いて相手を理解する(1)
5	聴いて相手を理解する(2)
※6	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)・・・別紙参照
※7	明星大学を紹介する (ローテーション授業)・・・別紙参照
8	図書館にふれる(合同授業・ローテーション授業)
※9	大学職員に取材する (ローテーション授業)・・・別紙参照
10	自分や相手の大切さを知る(ローテーション授業)
11	ルールとマナーを考える
12	卒業生から学ぶ
13	仕事と自分について考える
14	これからの大学生活を描く
15	未来の自分へのメッセージ

たとえば、第 6 回の授業は、学長が自ら大学の自校教育について講話をし (20 分)、その後、上級生の学生生活などの話を聞く仕立てになっている。  
 第 7 回では、第 6 回で得た情報 (学長・上級生の話、大学の歴史等の VTR) をもとに、高校生に「明星大学を紹介する」ポスター制作をする。さらに個々の学生が自分が所属する学科の特徴を調べてきて (第 6 回授業宿題)、「私の学科自慢」としてポスターに取り入れることになっている。2 週の授業および自宅学習のつながりを持たせて授業を進めている。

**授業で特に使用している  
ツールとその活用法**

- 教科書は使用しない。
- ポートフォリオ  
 第 1 回の授業で「自立と体験 1」で使用するポートフォリオを全員に配布。ポートフォリオやワークシートをもとに授業をすすめる。学生には、ポートフォリオに「授業で取り組む様々なワークの記録をする、ワークを通して学んだこと・感じたことを書きこむ、グループメンバーの発表や発言をメモする、先生の説明やまとめの話のノートを取るなどを通して自分の学習の積み重ねを記録しておく」ように指示している。
- 授業で使用しているツール：模造紙、ポストイット、プロッキー、タイマー、マグネット、他。
- それぞれの授業テーマに沿ったワーク教材を使用している。  
 例・卒業生パズル (オリジナル教材)  
 (卒業生へのインタビューをパズル形式にして、卒業後の仕事や大学生活について

	<p>考えるワーク)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報カードゲーム「歓迎企画をたてる」(オリジナル教材) (バラバラの情報を集めて、グループメンバーが協力して課題を解決するワーク)</li> <li>・ハラスメントリーフレット (大学発行のハラスメント対策について説明した資料を活用)</li> <li>・自己発見レポート(ベネッセ大学基礎調査を活用)</li> <li>・大学生活デザインシート(オリジナル教材) (将来を見通しながら、大学4年間の計画を記入するワークシート)</li> </ul>
<p><b>学 習 成 果</b> (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>学生の行動目標/到達目標は、「他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること」。</p> <p>多様な学部・学科に所属するクラスメートとの交流を通して、様々な角度から自分自身をみつめ、自分の理想や目的を明確にしていくことをねらいとしている。</p> <p>第1回と第15回授業での学生アンケートによれば、</p> <p>①「卒業後にしたいことを考えているか」②「学生時代にすべきことを考えているか」③「明星大学の歴史や特色を知っているか」④「大学図書館の利用方法を知っているか」⑤「自分の意見を筋道立てて話すことができるか」⑥「敬意・関心を持って他者の話を聴くことができるか」⑦「自分の意見を文章でわかりやすく表現できるか」という項目すべてについて、望ましい方向に自己評価が変化しており、学生たちが自信を深めている様子がわかる。</p> <p>ただし、⑧「規律を守って学習活動ができるか」だけは唯一自己評価の低下が見られ、この点は学生自身にとっても課題であると認識されているようである。</p>
<p><b>学習成果の評価・測定の方法</b></p>	<p>第1回授業と第15回授業で、上記8項目について学生にアンケートを取り、自己評価の変化を尋ねている。その他、担当教員、SAにもアンケートを実施し、学生の変化について気付いた点を尋ねている。</p> <p>定量的、客観的な指標による評価・測定は導入しておらず、今後の検討課題と考えられる。</p>
<p><b>本科目についての学生からの評価</b></p>	<p>上記、学生アンケートのうち、第15回授業時のアンケートでは「自立と体験1」の授業の特徴的な点について、「役に立ったか？」を尋ねて、学生に評価させている。平成24年度の結果では、それぞれの肯定的回答(「とてもそう思う」「そう思う」と答えた学生)は以下のとおりであった。</p> <p>「少人数クラス」91.8%、「他学部他学科の学生との交流」93.3%、 「グループでの学習活動」91.4%、「ポートフォリオ」79.3%</p> <p>また自由記述欄には、1388件の記述があった。</p> <p>【参考】自由記述欄より</p> <p>「いろいろな学部と交流がすることが出来て良かった」、「人と関わる、体験する、行動するというのは社会に出てからも役立つ」、「人に自分の考えを伝える、人の考えを理解することを通じて色々と学べた」、「最初は知り合いが少ないので不安だったけど、この授業を通じていろいろな人と触れ合えた」、「いろいろな目的をもって大学に入学してくるのがわかった。目標をもって行動をしたい」、「自分から動かないとダメな授業だと思うと大変だったけど、今の自分を見つめ直して将来についてみんなと意見交換</p>

●全学共通教育科目●講義と個人学習、グループ学習を通した学び合い

できてよかった」、「この授業がなければ明星大学のことを知らないで卒業をしたと思うので、知れてよかった」

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

全学初年次教育「自立と体験1」は、明星大学に入学したすべての学生が、充実した4年間の大学生活を送るための基礎となる科目と考えられる。能動的に学び、自分で考え、表現し、他者と関わり、多様性を理解し、多様性から学ぶ。まさしく「大学での学び方を学ぶ」授業である。

明星大学の授業でも、多くのアクティブラーニング科目（能動的な学び）が導入されていく中で、「自立と体験1」で「大学での学び方を学ぶ」ことが、専門知識を活用した授業で多くの学びを得ていく基礎となる。

そのためには、担当教員が学生の能動的な学びをサポートする役割（ファシリテーション）を行うことが重要であり、それにより学生の力を引き出していくことができると考える。



授業風景



授業風景（教室での授業、個人ワーク、グループワーク、発表等）

●全学共通教育科目●講義と個人学習、グループ学習を通じた学び合い

学長の講話（自校教育）  
動画での DVD を放映後、  
20 分間講話



図書館でのグループワーク（授業風景）：図書館クイズとブックフェッチ

大学職員に取材する（授業風景）

：大学事務局 13 部署にグループで訪問し職員へ取材をする。



●全学共通教育科目●講義と個人学習、グループ学習を通じた学び合い

**その他の特記事項**

本授業を行う上での授業運営の工夫と運営体制にも特徴がある。

この科目の開講にあわせて、2010年度より開設された明星教育センターで、特任教員と事務スタッフが協働して、すべての授業の教材等の準備および担当教員のサポートを行っている。

また授業の実施にあたっては、担当教員だけでなく、上級生（SA）や大学職員（職員インタビューや図書館での演習）が関わっており、まさに大学全体で取り組んでいる授業である。

初年次教育が専門の教員だけで実施するのではなく、各学部学科の教員が担当することで、学生の学習内容を大学全体で共有でき、1年生後期以降の授業に学びを継続させていくことができる可能性が生まれている。

また、「全学初年次教育に関する委員会」では履修者、担当教員、SA、授業に関わった職員などを対象にアンケートを実施。それらの声が授業改善の大きな柱となっている。

教職協働で、この授業に取り組んでいるということができる。

## 教授法が大学を変える

編集：日本私立大学協会 教育学術新聞

協力：日本高等教育開発協会

(<http://jaed.jp>)

平成26年3月15日 第1版発行

日本私立大学協会

(<http://www.shidaikyo.or.jp>)

〒102-0073 千代田区九段北4-2-25

TEL 03-3261-7048

FAX 03-3261-0769

担当：広報部 小林

[koei@shidaikyo.or.jp](mailto:koei@shidaikyo.or.jp)